

平成26年度

長期教育研究員

# 研究報告集録

第43号

はしがき

<幼稚園 健康>

- 進んで体を動かすことを楽しむ幼児の育成
- 多様な動きのある運動遊びと環境構成の工夫を通して —

浦添市立沢岬幼稚園  
前田 一美

<小学校 理科>

- 科学的な思考力・表現力を育成する指導の工夫
- 理科におけるイメージ図と定型文を活用した対話活動を通して —

浦添市立牧港小学校  
喜屋武 真史

<中学校 国語>

- 国語科学習における自分の思いや考えを論理的に表現する力を育む指導の工夫
- 根拠をもとに美術作品の良さを伝える鑑賞文の指導を通して —

浦添市立仲西中学校  
比嘉 麻衣子

平成27年3月

浦添市立教育研究所

# 目次

はしがき

## <幼稚園 健康>

- 進んで体を動かすことを楽しむ幼児の育成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- － 多様な動きのある運動遊びと環境構成の工夫を通して －

浦添市立沢岬幼稚園  
前 田 一 美

## <小学校 理科>

- 科学的な思考力・表現力を育成する指導の工夫・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 3
- － 理科におけるイメージ図と定型文を活用した対話活動を通して －

浦添市立牧港小学校  
喜 屋 武 真 史

## <中学校 国語>

- 国語科学習における自分の思いや考えを論理的に表現する力を育む指導の工夫・・・ 4 5
- － 根拠をもとに美術作品の良さを伝える鑑賞文の指導を通して －

浦添市立仲西中学校  
比 嘉 麻 衣 子

## は し が き

教育界の嬉しいニュースとして、平成 26 年度全国学力・学習状況調査において、小学校が全国水準、中学校が全国平均との差 10 ポイント以内に縮まったことである。児童生徒の努力と県や市町村、学校の取組、正答率の低い児童生徒・無回答率への改善策として、授業改善、得点率の低い問題への対応、補習等々の成果によるものである。

中でも授業改善の成果が大きいと思う。「確かな学力」の 3 要素である、「基礎的な知識技能」、「思考力、判断力、表現力」、「学習に取り組む態度」をバランスよく育てる授業、例えば交流による学び合いや探求的な学習活動等の授業である。

先生方の多くは保育や授業を行いながら悩み、模索している状況があると思う。そのような先生方に解決の一助になればと、研究所では研究員を募り、長期研修の時間と場所を提供してきた。

本研究所の歴史を見ると、昭和 63 年の第 1 期から始まり、昨年年第 42 期までに幼稚園 39 名、小学校 58 名、中学校 58 名、合計 197 名の先生方が研修を終え、その成果を学校現場に還元してきた。本年度も幼稚園・小学校・中学校から研究員が入所し、研究・実践を進めた。

ここで研究テーマと内容を紹介していく。

沢岬幼稚園の前田一美教諭は、研究テーマを「進んで体を動かすことを楽しむ幼児の育成—多様な動きのある運動遊びと環境構成の工夫を通して—」とし、様々な運動遊びを通して、進んで体を動かして遊ぶ幼児を目指し、環境構成や個に応じた援助の工夫を試みた。

巧技台や既存の施設遊具の活用、園児への具体的な援助の工夫を提案している。運動に取り組む子が増えたが、運動の年間計画、戸外活動等活動を広げ、更なる実践に意欲的である。

牧港小学校の喜屋武真史教諭の研究テーマは「科学的な思考力・表現力を育成する指導の工夫—理科におけるイメージ図と定型文を活用した対話活動を通して—」である。イメージ図を描かせ、定型文を使って根拠をもった発表を容易にし、対話・交流により、科学的な思考力を深めていこうというユニークな研究である。特にイメージ図は、現象を解釈する（可視化）手段として有効で、理科の年間計画に位置付けられて実践されてほしい手立てである。

仲西中学校の比嘉麻衣子教諭の研究も斬新で、「国語科学習における自分の思いや考えを論理的に表現する力を育む指導の工夫—根拠をもとに美術作品の良さを伝える鑑賞文の指導を通して—」が研究テーマで、美術の鑑賞に結び付けた国語の言語指導である。「沖縄の美術作品を紹介する」という設定で、鑑賞した作品への感想や意見を論理的に説明する文章を作らせるために、県立美術館学芸員の説明、推敲する学び合い等細かな指導を工夫した。

報告書には、実践前後の調査と分析、多くの文献の取り込み、具体的な実践・取組と成果と課題等がまとめられている。本人の授業実践力が向上したことは言うに及ばず、併せて幼小中学校の教育課題の解決にもなっている。本研究報告書が学校現場で活かされ、実践の一助になれば幸いである。

結びに、本研究に対し、ご指導・ご助言を賜りました関係者の皆様方に深く感謝申し上げます。1 園 2 校の園長・校長先生や先生方、仲西中学校の金城孝子教頭先生、内間幼稚園の友利愛子副園長先生はじめ、研究推進にご協力くださった全ての皆様に厚くお礼申し上げます。

平成 27 年 3 月

浦添市立教育研究所 所長 仲西 起實

〈幼稚園 健康〉

## 進んで体を動かすことを楽しむ幼児の育成

—多様な動きのある運動遊びと環境構成の工夫を通して—



浦添市立 沢岬幼稚園

前田 一美



# 目次

I	テーマ設定理由	1
II	目指す幼児像	1
III	研究の目標	2
IV	研究仮説	2
1	基本仮説	2
2	作業仮説	2
V	研究構想図	2
VI	研究内容	3
1	幼児期における運動能力の発達	3
2	幼児期の運動の意義	4
3	運動遊びにおける環境構成や援助の工夫	5
4	多様な動きが経験できる運動遊び	6
5	運動遊びの指導のポイント	6
6	運動遊びで育つ力	8
VII	保育実践	9
1	題材名	9
2	ねらい	9
3	題材について	9
4	検証保育の全体計画	9
5	本時までの遊びの様子	10
6	本時の保育	13
7	本時後の遊びの様子	16
VIII	研究の考察	17
1	作業仮説（1）の検証	17
2	作業仮説（2）の検証	19
3	本研究を通して	21
IX	研究の成果と課題	21
1	成果	21
2	課題	22
	おわりに	22
	主な参考・引用文献	22



## 進んで体を動かすことを楽しむ幼児の育成

— 多様な動きのある運動遊びと環境構成の工夫を通して —

浦添市立沢岬幼稚園 前田 一美

### 【要 約】

本研究は、様々な運動遊びを通して体を動かす楽しさや心地よさを味わい、進んで体を動かして遊ぶ幼児の育成を目指し、体を動かしたくなるような環境構成や、個の発達に応じた援助の工夫を試みるものである。

キーワード □運動遊び □環境構成 □個の発達に応じた援助

### I テーマ設定理由

現代の社会は、生活が豊かで便利になり、都市化や少子化が進展したことで、社会環境や生活様式を大きく変化させ、子どもの遊ぶ場所や仲間、時間の減少、交通事故や犯罪への懸念などが体を動かして遊ぶ機会の減少を招いている。このような社会の変化は、幼児期の多様な動きの獲得や、体力・運動能力にも影響を与え、意欲の減弱やコミュニケーションがうまくとれないなど、子どもの心身の発達に重大な影響を及ぼすことが懸念されている。

幼児期は運動機能が急速に発達する時期で、その時期に多様な運動刺激を与えることで、タイミングよく動いたり、力加減をコントロールしたり、とっさに身を守る動きを身につけたりするなど、体の動きを調整する能力が高まり、生活に必要な動きや将来的にスポーツに結びつく動きなど、基本的な動きを多様に身につけやすくなる。

幼稚園教育要領「健康」のねらいには、「自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする」と示され、自ら体を十分に動かそうとする意欲や、進んで運動しようとする態度を育て、身体諸機能の調和的な発達を促す重要性が述べられている。

幼児期の運動は、幼児一人一人の興味や生活経験に応じて、幼児自らが体を動かす楽しさや心地よさを実感することが大切である。また、様々な遊びを通して多様な動きを身につけていくことも重要である。

幼児期に体を動かして元気に遊ぶことは、身体的にも精神的にも健康の維持増進につな

がると考える。

本学級の幼児の実態は、体を動かすことが好きで木登りや鉄棒、鬼ごっこやリズム遊びなどを楽しむ幼児も見られる。しかし中には、朝から眠さやだるさを訴えたり、ボーっとしたり、体力が続かずすぐ「疲れた」と訴えたりする幼児が見られる。また、経験不足から手・足・指の力加減が苦手で動きがぎこちなかったり、運動が苦手で、自分からは運動遊びに全く取り組もうとしなかったり、やる前から「できない」と、初めてのことに對して消極的な幼児も見られる。

自身のこれまでの保育をふり返ると、運動遊びを取り入れてはいるが、取り組む期間や運動遊びの遊具を限定してしまうなど、進んで体を動かして遊びたくなるような環境構成の工夫が不十分だったように思う。

そこで、日々の保育の中で幼児が日常的に運動遊びを楽しんだり挑戦したり、思わず体を動かして遊びたくなるような環境構成や、多様な動きを経験できる運動遊びを工夫する。さらに個の発達に応じた声かけや援助を行うことで、幼児が自ら体を動かして遊ぼうとする意欲が育ち、体を動かす楽しさや心地よさを味わうようになり、進んで体を動かすことを楽しむ幼児が育つのではないかと考え、このテーマを設定した。

### II 目指す幼児像

様々な運動遊びを通して、体を動かす楽しさや心地よさを味わい、進んで体を動かして遊ぶ幼児

### III 研究の目標

進んで体を動かして遊ぶ幼児の育成を目指し、体を動かしたくなるような環境構成や個の発達に応じた援助の工夫を図る。

### IV 研究仮説

#### 1 基本仮説

園生活の遊びの中で、幼児が体を動かしたくなるような環境構成を工夫し、個の発達に応じた援助を行うことで、楽しみながら運動遊びに取り組み、充実感や満足感を味わい、

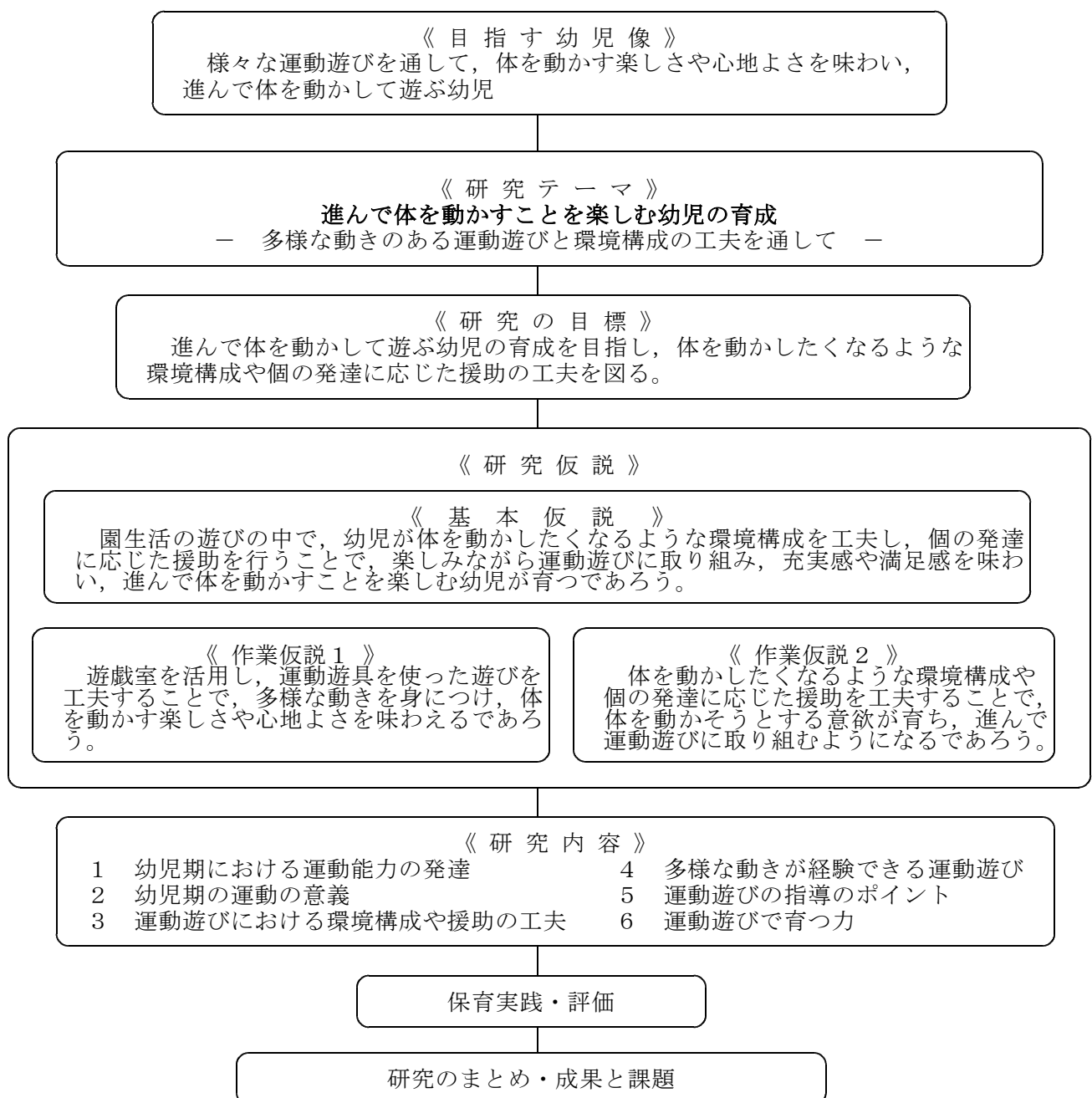
進んで体を動かすことを楽しむ幼児が育つであろう。

#### 2 作業仮説

(1) 遊戯室を活用し、運動遊具を使った遊びを工夫することで、多様な動きを身につけ、体を動かす楽しさや心地よさを味わえるであろう。

(2) 体を動かしたくなるような環境構成や個の発達に応じた援助を工夫することで、体を動かそうとする意欲が育ち、進んで運動遊びに取り組むようになるであろう。

### V 研究構想図



## VI 研究内容

幼児期運動指針ガイドブック(2012)を参考に研究内容1～4の項目をまとめた。

### 1 幼児期における運動能力の発達

幼児期は、人間の生涯にわたって様々な場面において必要な基本的な動き(表1)を幅広く獲得する大切な時期である。この時期には、日常生活や遊びの中で、いろいろな動きを経験することで、基本的な動きのレパートリーやバリエーションが拡大していく(動きの多様化)。さらに、その獲得した動きを繰り返し行うことで、無駄な動きや過剰な動きが減少し、動きが上手になっていく(動きの洗練化)。

表1 幼児期に経験する基本的な動きの例

体のバランスをとる動き	・立つ ・座る ・寝転ぶ ・起きる ・回る ・転がる ・渡る ・ぶら下がる
体を移動する動き	・歩く ・走る ・はねる ・跳ぶ ・登る ・下りる ・這う ・よける ・すべる
用具などを操作する動き	・持つ ・運ぶ ・投げる ・捕る ・転がす ・蹴る ・積む ・掘る ・押す ・引く ・こぐ

『幼児期運動指針ガイドブック』文部科学省 2012

次に、幼児期の発達段階での一般的な運動の発達の特性と、その時期に経験しておきたい遊びの例についてまとめた。

#### (1) 3歳～4歳ごろ

基本的な動きが未熟な初期段階から、園生活や家庭での環境に適応しながら、「体のバランスをとる動き」「体を移動させる動き」「用具などを操作する動き」といった多様な動きが一通りできるようになる。心身の発達とともに、自分の体の動きをコントロールするようになり、より巧みな動きを獲得するようになっていく。

この時期は入園前で、運動遊びの経験は、保育園に通っているか、家庭保育かということもあるが、保護者の影響が大きいように感じる。

(遊びの例)

全身を使って遊べる、滑り台、ブランコ、鉄棒、巧技台、マットなどの遊具を活用した動きを経験しておくことが望まれる。

#### (2) 4歳～5歳ごろ

友達と一緒に運動する楽しさを見だし、環境とのかかわり方や、遊び方を工夫しながら、多くの基本的な動きを経験するようになる。特に全身のバランスをとる能力が発達し、身近にある用具を使って操作する動きも上手になってくる。

この時期は、幼稚園の年中児にあたり、ほとんどの幼児が家庭保育からくるので、運動遊び以外にも様々な経験が少ない幼児が多い。園での体を動かす遊びを通して、一緒にやってみたり、楽しさを共感したりして、気の合う仲間ができてくる。体を使った遊びを発展させ、自分たちでルールや決まりを作るおもしろさが増えてきたり、また、年長児の遊びの様子に触れ、真似をしたり、一緒に挑戦したりする姿も見られるようになる。

(遊びの例)

縄跳びやボール遊びなど、体全体でリズムを取ったり、用具を巧みに操作したりコントロールさせたりする「用具などを操作する動き」を経験しておくことが望まれる。

#### (3) 5歳～6歳ごろ

これまでの経験をもとに、無駄な動きや過剰な動きが少なくなり、さらに複数の動きを中断することなく連続的に行ったり、優しい複数の動きを同時に行ったりと、基本的な動きの組み合わせができるようになってくる。

この時期は年長児にあたり、好きな遊びを見つけ、友達同士誘い合って、自分たちで遊びを進めていくようになる。これまでの経験から、遊びを考えたり、ルールを相談して決めたり、秘密基地などを作って危険な遊び方を楽しむようにもなる。

(遊びの例)

基本的な動きが、より滑らかに遂行できるようになることが期待されるので、遊具を用いた複雑な動きが含まれる遊びや、様々なルールでの鬼遊びなどを経験しておくことが望まれる。



## 2 幼児期の運動の意義

幼児期における遊びの現状は、活発に体を動かす遊びや、体を動かして遊ぶ時間や環境、自ら運動する機会が減少し、多様な動きを経験・獲得できず、体の操作が未熟な幼児が増えている。

幼児は夢中になって楽しく遊ぶ中で、多様な動きを経験し、繰り返し行うことで獲得し、動きが洗練されていく。楽しく体を動かす遊びは、運動を楽しむための基礎的な体力や運動能力を発達させるだけでなく、友達とのかかわりを通して、コミュニケーション能力、やる気や集中力、社会性や認知的能力などを育む機会を与える。

幼児期運動指針ガイドブック(2012)によると、幼児期の体を動かす遊びには、下記のような効果があると示されている。

### (1) 体力・運動能力の基礎を培う

幼児期は、5歳頃までに大人の約8割程度まで神経機能が発達するといわれ、運動を調整する能力が顕著に向上する時期である。この時期に培われる基本的な動きは、より複雑な遊びや運動の基礎を育むだけでなく、様々な危険から身を守るための基礎を育むことにもなる。また、筋力や持久力は、遊びや運動をより活発に行うためだけでなく、体力の重要な要素でもある。

幼児期は、筋力や持久力が著しく発達する時期ではないが、日頃から体を動かすことは、結果として穏やかに持久力や心肺機能を高めることにもつながる。

### (2) 丈夫で健康な体になる

運動習慣を身につけると、身体諸機能における発達が促され、健康的で活動的な生活習慣の形成にも役立つ可能性が高くなる。積極的に体を動かして遊ぶことで、お腹がすいておいしく食事を取ったり、適度に疲労することで十分な睡眠が取れるようになる。それらを継続することにより、健康的に運動習慣が身につく。幼児にとって体を動かして元気に遊ぶことは、身体的にも精神的にも健康を維持することにつながると考えられる。

さらに、肥満や痩身の問題は、栄養摂取の偏りと運動不足が大きな原因だが、これらは

骨の形成にも影響する。

骨の形成には、栄養摂取だけでなく、適度な運動が必要不可欠である。よって、幼児期でも適切な運動をすると丈夫でバランスのとれた体を育みやすくなり、肥満や痩身を防ぐ効果があると考えられる。

### (3) 意欲的に取り組む心が育まれる

幼児にとって体を動かす遊びなど、思い切りのびのびと動くことは、何事にも意欲的に取り組む態度を養い、健やかな心の育ちも促す効果がある。

積極的に体を動かす幼児は、「やる気」「我慢強さ」「友達関係が良好」「社会的」など、前向きな性格傾向にあり、このような傾向は、有能感や自信に支えられている。

幼少年期における遊びや、運動に関する有能感は、遊びの経験を通じた成功体験によってその基礎が作られ、その後の運動やスポーツ活動につながっていく。有能感を持てる子どもは、運動が好きになり運動する機会も増えていくが、逆に「無力感」を抱くようになるとその機会も減少していく。

### (4) 協調性やコミュニケーション能力が育つ

幼児期は、多くの友達とかかわりながら遊ぶことを通して、ルールを守り、自我を抑制し、コミュニケーションをとり合いながら協調・協働することを学んでいく。体を動かす遊びや運動、特にルールのある遊びやスポーツなどは、社会性を育てる契機を与え、また、体を動かして遊ぶことは、爽快感や達成感を味わいながらのストレス発散にもつながる。

### (5) 認知的能力の発達にも効果がある

運動を行うときは状況判断から運動実行まで脳の多くの領域を使用する。運動が知的能力にもよい効果をもたらす可能性が示され、すばやい方向転換などの敏捷な身のこなしや状況判断、作戦などの思考判断を要する全身運動は、脳の運動制御機能や知的機能の発達促進に有効であると考えられる。

このような、運動能力の発達の特性や、運動遊びの意義を踏まえて、体を動かしたくなる環境構成や、個の発達に応じた援助の工夫、指導方法について研究を進めていくことが大切である。

- 3 運動遊びにおける環境構成や援助の工夫  
 幼児期運動指針ガイドブック(2012)では、幼児期の運動を推進するための配慮事項として、次のことを挙げている(表2)。

**表2 幼児期の運動を推進するための配慮事項**

○ 一人一人の発達に応じた援助をすること
○ 幼児が思わず体を動かしたくなる環境を工夫すること
○ 安全に対する配慮をすること

(1) 環境構成の工夫

① 遊ぶ場所や遊具の安全点検

幼児が安全に楽しく過ごすためには、危険な場所、危険な遊び方などは、全職員で共通理解をして、誰もが安全な遊び方をしっかりと指導していく体制を作ることが大切である。そのために、園庭、固定遊具、室内など幼児が日頃遊ぶ場所や、大型遊具の安全な置き方(積み方)、遊具の破損、幼児が好きな隙間や高いところに危険物はないかなどの安全点検を定期的に行うことが大切である。

② 園庭の固定遊具の工夫

固定遊具にも、幼児の遊びに応じて布やゴムなどを加えたり、ロープを結んだり、幼児の動線を予想した遊具や用具の配置、場の構成にも配慮する。そうすることで、探検や修行、鬼ごっこなどの様々な遊びが生まれ、多様な動きを引き出すことができる。

また、挑戦意欲がかき立てられるように遊具に目印や色をつけることで、「やってみたい」「おもしろそう」などと、苦手意識を持っている幼児も抵抗なく取り組み、体を動かすことを楽しめるようになる。

このように固定遊具を工夫し、「運動チャレンジカード」等を活用することで、戸外での運動遊びの発展につながると考える。

③ 遊戯室の環境構成

遊戯室は、集団遊びや運動遊びをする場

と、様々な集会をする場として兼用しているため、広さが確保されている。いつでもすぐ使えるように、巧技台や平均台、マット、跳び箱、トランポリン、大型積み木など、遊戯室で使う遊具は遊戯室に集め、全職員で決められた場所に遊具を置くことや、大型遊具の安全な片付け方などを共通理解しておく必要がある。

④ 保育室の環境構成

幼児は、ビニールテープで床や廊下に行くつかラインを引いたり、長さの違うヒモ(的)をぶら下げているだけで、体を動かした遊びを楽しんだりする。

また、いろいろな素材を集めておくと、新聞紙やペットボトルなどの身近な素材を使って剣やボール、的、ピン、ゴールなどの遊具を作る。そこで教師が意図的な援助を行えば、戦いごっこや的当て、ボーリングやバスケット遊びなど、自然に運動遊びにつなげていけると考える。

⑤ 運動遊具の充実

縄やフープ、輪、ボール、竹馬などは、「やってみよう」と思っているときに、みんなで取り組めるよう数を揃える。(クラス全員分か半数分)また、個々の運動能力の発達に合わせてそれぞれが楽しめるように、大きさや長さ、高さなど違うものを揃える。

巧技台などの大型遊具の種類や数なども揃えておくと、幼児の発達や遊びに応じて配置や組み合わせなどを変化でき、遊びも広がり、興味が持続して繰り返し遊んだり、様々な動きに挑戦したりして、動きも洗練されていくと考える。

(2) 個の発達に応じた援助

幼児期運動指針ガイドブック(2012)に、「幼児期は心身の発達が著しい時期ですが、その成長は個人差が大きいので、幼児に体を動かす遊びを提供するに当たっては、一般的な発達の特性の理解だけでなく、一人一人の発達に応じた配慮が必要です」と示されている。

個の発達に応じた援助を行うためには、まず、個々の実態(身体的発達、運動能力、理解力、これまでの活動経験など)をできるだけ細かく把握する。

つぎに、その幼児が何に（どんな遊びに）興味を持っているのか、得意なこと、苦手なこと、コミュニケーション能力なども考慮して、運動遊びの提供や援助を工夫していく。その際、運動遊びに対して、①興味がないのか、②興味はあるけど苦手意識の方が強くて取り組まないのか、③方法がわからず困っているのか、④苦手だけど頑張りたいのか、⑤運動遊びが大好きなのかなどの、思いを読み取ることで、よりその幼児の思いに寄り添った適切な援助につながると考える。

また、教師自身も積極的に幼児と一緒に体を動かし、楽しい雰囲気を作ったり、いろいろな遊びを伝えていくことで、幼児が取り組んでみたいと思えるような意欲を喚起したり、取り組んで楽しかったという充実感や満足感を味わうことができると考える。

#### 4 多様な動きが経験できる運動遊び

幼児期運動指針ガイドブック（2012）では、幼児期の運動のあり方を表3のように示している。

**表3 幼児期の運動のあり方**

○ 多様な動きが経験できるように様々な遊びを取り入れること
○ 楽しく体を動かす時間を確保すること
○ 発達の特性に合った遊びを提供すること

##### (1) 好きなものになりきるごっこ遊び

アニメの主人公や忍者、ヒーローになって、鬼ごっこをしたり、戦ったり、修行したりして遊んだり、いろいろな動物を体を使ってのびのびと表現したりする。このような遊びの中で、歩く・走る・止まる・つかむ・投げる・ジャンプする・登る・（飛び）降りる・伸ばす・曲げる・避けるなど、多様な動きを経験し獲得することができると思う。

##### (2) 音楽に合わせて行う遊び

リトミックやリズム遊び、ダンスなど、音楽に合わせて思い切り体を動かしたり、のびのびと表現したりしながら、楽しく多様な動きを経験できる。また、友達と息を合わせたり、楽しさを共感したりしながら、リズム感

なども育っていくと考える。

##### (3) 遊具を使った遊び

ボール、縄、フープ、輪、大型積木、平均台、巧技台、跳び箱、トランポリン、マットなどを使用して遊ぶ中で、操作したり、バランスをとったり、力加減をコントロールしたりする。

また、友達と一緒に作ったり、片付けたりする中でも、持ち上げたり、運んだり、積み上げたりするなど、多様な動きの経験につながる。

さらに、遊具を組み合わせたたり、幼児の発達や興味に合わせて構成の仕方を工夫すると、難易度が上がり挑戦意欲をかき立てたり、達成感や充実感も味わうと考える。

##### (4) 身近な物を使った遊び

新聞紙、ペットボトル、ゴムなどを使って手作りの遊具を作って遊んだり、自分たちで遊び方やルールを決め、集団遊びやゲームなどを展開していく。このような遊びを通して、友達とのかかわり方や、ルールを守る大切さなども経験し、学んでいくと考える。

#### 5 運動遊びの指導のポイント

運動遊びを指導・展開していく際に、教師は幼児の持っている力を最大限に発揮できるように、様々な配慮をしなければならない。その配慮すべきポイントを、『幼児体育－理論と実践－』（2011）では、3つの観点からまとめられている。

##### (1) 指導を展開する上で配慮する点

###### ① 簡単なことから段階指導

誰もが興味を持って取り組んだり、自分なりに目標を持ったり、自分のペースで参加できるよう、参加する幼児の運動能力の発達に合わせて段階を調整していくことが大切である。

###### ② グループ遊びは少人数から

はじめから大人数でグループ遊びを行うと、役割がなかなか回ってこず、一緒に遊んでいる感や楽しさが薄れ、遊びが自然消滅することも多い。少人数から行うことで、一人一人が自分の役割を実感し、楽しさを感じて自分たちで遊びを進めていけるようになると思う。

③ ルール理解のための展開  
ルールが理解できるよう、ルールを明確でわかりやすく工夫したり、ルールを守ることによって、遊びが楽しくなる経験ができるようにすることが大切である。

④ メリハリのある展開  
静と動、力合わせや力くらべなど、幼児の興味・関心・理解度に合ったメリハリのある流れを工夫することで、集中力も持続できると考える。

⑤ 十分な運動量  
幼児が自分のしたいことを見つけて遊べる環境を整え、思い切り体を動かして遊べる展開を工夫することが大切である。

⑥ 仲間作り遊び  
仲間づくり遊びを通して、自分の力や相手の力を感じ合い、相手に対して自分の力をコントロールすることができるようになっていくと考える。

⑦ 繰り返し丁寧な指導  
幼児は楽しみながら繰り返すことで動きを獲得することを踏まえ、個々のねらいを持ち、習慣化されるまで繰り返し丁寧に指導することが大切である。

⑧ 安全への配慮  
大切な幼児の命を預かっていることを念頭に置き、気の緩みや錯覚、手抜き、憶測などによるケガや事故のないよう、安全に十分な配慮をすることが大切である。

⑨ 誰もが楽しめる工夫  
幼児一人一人の心身の発達や経験に関わらず、誰もが楽しさを感じられるような、遊びの展開を工夫することが大切である。

⑩ 幼児の考えを取り入れた展開  
幼児がいろいろなことに「気づき」「考えたり」「試したり」して遊ぶように、遊び込める展開を工夫することが大切である。

## (2) 子どもとのかかわりで配慮する点

① 声かけや援助  
幼児の実態を把握し、個に応じた具体的にわかりやすい指導・援助を行うことが大切である。

② 幼児の興味関心を引き出す工夫  
幼児の興味・関心・意欲が生まれ、楽しく

て繰り返したくなるような声かけや援助を行うことを心がける。

③ 幼児理解  
個々の幼児の実態を知り、行動特徴を理解して、状況に応じた対応ができるようにすることが大切である。

行動特徴とは、例えば、頭部が大きく重たいため、重心が高く、転倒、転落しやすい、自分の見えている範囲以外のことが認知しづらい、危険を予知する能力が低いということ。また、ヒーローなどになりきって遊ぶことや、見えない所で遊ぶことが好きなどである。それらを理解することで、事故発生の要因や可能性を予測し、対策を考えることが可能になると考える。

## (3) 用具の理解について

① 用具の安全な使用方法の理解  
教師が用具の使い方を理解することで、安全に楽しく遊ぶことができ、幼児へも遊具の正しい使い方や安全な使い方を指導することができると思う。

② いろいろな遊具で創意工夫  
縄だからすぐ縄跳びをするのではなく、いろいろな縄あそびから取り入れることで、幼児が興味を持つきっかけ作りや、苦手な幼児も抵抗なく取り組むという、指導や援助の工夫になる。また、身近な物を使って遊具を作り、遊びを紹介することで、幼児も自分で作ったり、試したりして、遊びが広がっていくと考える。

③ 準備や片付けの安全指導  
幼児が自分たちで遊びを進めていけるように、片付ける場所をわかりやすく整理したり、遊具を安全に取り扱う方法も、教師が見本を見せながらしっかり指導することが大切である(図1)。



図1 大型遊具の取り扱い指導

6 運動遊びで育つ力

幼稚園で行う運動遊びと、その遊びを通して育つものを下記の表にまとめた（表4）。

表4 運動遊びで育つ力

遊具	場所	活動内容	遊びで育つもの
道具を使わない運動遊び	室内	<ul style="list-style-type: none"> <li>進む（歩く・おしり歩き・はいはい・クモ歩きなど）</li> <li>いろいろジャンプ（片足跳び・両足跳び・遠くに跳ぶなど）</li> <li>片足バランス ・スキップ</li> <li>なりきりごっこあそび</li> <li>手押し車 ・足踏みっこ</li> <li>ボートこぎ ・うまとび</li> <li>ネコとネズミ（鬼ごっこ）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>移動系運動スキルの向上</li> <li>平衡系運動スキルの向上</li> <li>リズム感 ・平衡性 ・巧緻性</li> <li>敏捷性 ・瞬発力 ・身体認識力</li> <li>腹筋力 ・背筋力 ・脚力 ・腕力</li> <li>柔軟性 ・スピード感 ・調整力</li> <li>持久力 ・空中バランス ・協応性</li> <li>走力 ・空間認知能力 ・模範能力</li> <li>判断力 ・集中力 ・正しい姿勢作り</li> <li>協力する、友達を認める、励ます、順番を待つなどの社会性</li> </ul>
	戸外	<ul style="list-style-type: none"> <li>かけっこ ・リレー</li> <li>鬼ごっこ（色おに・高おに・影踏みなど）</li> </ul>	
新聞紙	室内	<ul style="list-style-type: none"> <li>ちぎったり、丸めたり、長くしたり、細く丸めたり、ねじったり</li> <li>新聞紙プール</li> <li>投げる（上に・遠くに・的当てなど）</li> <li>落とさないように走る</li> <li>小さくなる島</li> <li>しっぽ取りゲーム</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>操作系運動スキルの向上</li> <li>移動系運動スキルの向上</li> <li>瞬発力 ・走力 ・スピード感</li> <li>巧緻性 ・空間認知能力 ・腕力</li> <li>筋力 ・平衡性 ・協応性</li> <li>協力する、友達を認める、励ます、順番を待つなどの社会性</li> </ul>
フープ・輪	室内	<ul style="list-style-type: none"> <li>相手に向かって転がす</li> <li>転がっているフープをくぐる</li> <li>フープごま ・なべなべそこぬけ</li> <li>島とびわたり ・けんけんば</li> <li>通り抜け競争</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>操作系運動スキルの向上</li> <li>移動系運動スキルの向上</li> <li>リズム感 ・巧緻性 ・柔軟性</li> <li>身体認識力 ・空間認知能力</li> <li>スピード感 ・瞬発力 ・集中力</li> <li>協応性</li> <li>協力する、友達を認める、励ます、順番を待つなどの社会性</li> </ul>
	戸外	<ul style="list-style-type: none"> <li>いろんなところでフープ回し</li> <li>フープなわとび</li> </ul>	
短縄・長縄	室内	<ul style="list-style-type: none"> <li>縄の上を歩く</li> <li>縄を踏まないように進む</li> <li>ジャンプ（へび・なみ・やまなど）</li> <li>上をまたぐ ・下からくぐる</li> <li>ウサギとオオカミ（鬼ごっこ）</li> <li>ぐるぐるトンネル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>移動系運動スキルの向上</li> <li>操作系運動スキルの向上</li> <li>瞬発力 ・巧緻性 ・空間認知能力</li> <li>身体認識力 ・柔軟性 ・協応性</li> <li>筋力 ・リズム感 ・平衡性</li> <li>調整力 ・空中バランス能力</li> <li>創造力 ・集中力 ・敏捷性</li> <li>協力する、友達を認める、励ます、順番を待つなどの社会性</li> </ul>
	戸外	<ul style="list-style-type: none"> <li>縄回し（片手・両手）</li> <li>縄とび（前回し・後ろ回し・あや跳び・かけ足跳び・仲良し跳びなど）</li> <li>長縄（郵便屋さん・大波小波など）</li> </ul>	
ボール	室内	<ul style="list-style-type: none"> <li>世界一周 ・ボールの帽子</li> <li>つく（立つ・座る・左右の手・歩き・走り・スキップなど）</li> <li>転がす ・捕る ・バウンドキャッチ</li> <li>投げる（両手・片手・的当て・相手になど）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>操作系運動スキルの向上</li> <li>移動系運動スキルの向上</li> <li>協応性 ・柔軟性 ・身体認識力</li> <li>巧緻性 ・空間認知能力 ・敏捷性</li> <li>瞬発力 ・リズム感 ・平衡性</li> <li>協力する、友達を認める、励ます、順番を待つなどの社会性</li> </ul>
	戸外	<ul style="list-style-type: none"> <li>サッカー ・ドッジボール</li> <li>当ておに ・キックベース</li> </ul>	
大型遊具	室内	<ul style="list-style-type: none"> <li>平均台 ・巧技台 ・とびばこ</li> <li>マット ・トランポリン</li> <li>ドリームトンネル ・大型積み木</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>平衡系運動スキルの向上</li> <li>移動系運動スキルの向上</li> <li>空間認知能力 ・身体認識力 ・筋力</li> <li>巧緻性 ・柔軟性 ・平衡性 ・腕力</li> <li>瞬発力 ・空中バランス能力 ・脚力</li> <li>協応性 ・リズム感 ・集中力</li> <li>回転感覚 ・協調性 ・持久力</li> <li>協力する、友達を認める、励ます、順番を待つなどの社会性</li> </ul>
	戸外	<ul style="list-style-type: none"> <li>ブランコ ・ジャングルジム ・滑り台</li> <li>うんてい ・登り棒 ・鉄棒</li> <li>ターザンロープ ・タイヤ跳び</li> </ul>	

前橋 明 『0～5歳児の運動遊び指導百科』 ひかりのくに 2004

表4の運動遊びを通して育つ力を踏まえ、本研究では、運動遊びを楽しみながら、個々の力をより伸ばしていくことを考え、環境構成や個の発達に応じた援助の工夫を、遊戯室で行う運動遊びに絞って検証保育を進めていく。

## VII 保育実践

### 1 題材名 『遊戯室を活用した運動遊び』

### 2 ねらい

遊戯室を活用した運動遊びを通して、いろいろな運動遊具に触れたり、運動遊具を使って試したり工夫したりして遊ぶ中で、多様な動きを経験したり、友達と一緒に思い切り体を動かして遊ぶ充実感や満足感を味わう。

### 3 題材について

#### (1) 学級の幼児の姿

歌やリズムダンスが大好きで、音楽が聞こえると体を動かしたり、戸外や体育館で自由に体を動かしたり、走り回ったり、競争したりする遊びが好きな幼児が多い。楽しくなると注意力が散漫になり、ケガをすることもあるが、しっかり話を聞いて素直に受け入れたり、友達の良い面を見つけてや認め合ったり、いけない面を注意したり、意見を言い合ったりする姿が見られる。特に女兒は元気があり、様々な活動に対して積極的に取り組む幼児が多い。しかし、中には運動遊びの経験が少なく、体を動かす遊びに興味が悪かったり、動きがぎこちなかったり、苦手意識からか取り組みが消極的な幼児もいる。友達関係が深まると、誘い合って挑戦したり、教え合ったり、競い合ったりしながら、少しずつ運動遊びに挑戦する様子が見られるようになってきた。

#### (2) 題材として取り上げた理由

本学級は、広い場所で自由に体を動かすことは好きだが、運動的な要素や技能を伴う遊びでは、ぎこちなさや苦手意識を持っている様子を感じられる幼児もいる。保護者アンケートや幼児への聞き取り、園での遊びの様子から、経験不足が主な要因だと感じられたので、園生活の様々な場面で、多様な動きを経験できる遊びの工夫や個に応じた援助の必要性を感じていた。

そこで、戸外とは違った遊具を使って多様な動きを経験できる遊戯室で、友達と一緒に運動遊びに取り組むことで、互いに刺激し合い、良さを認め合いながら、体を動かす遊びの楽しさや充実感を味わい、進んで体を動かすことを楽しめるのではないかと考え、題材として取り上げた。

### 4 検証保育の全体計画

検証保育の実践にあたり、下記のような全体計画を立てた（表5）。

表5 検証保育計画表

実践	日程	題材名	ねらい	内容
1	8/28 (木)	・アンケート調査① ・運動能力テスト①	・幼児の実態や家庭での実態を調査し、保育実践の指標とする。	・幼児への聞き取り調査① ・保護者へのアンケート調査① ・幼児の運動能力テスト①
2	11/11 (火)	・思い切り体を動かしてみよう	・自分の体の動きや力の使い方を意識しながら、友達と一緒に運動遊びを楽しむ。 ・身近な素材（新聞紙）を使った運動遊びを楽しむ。	・道具を使わない運動遊びをする。 ・新聞紙を使った運動遊びやゲームをする。
3	11/13 (木)	・フープで遊ぼう	・フラフープや輪を使った運動遊びを楽しむ。	・フープや輪を使って、転がしたり、回したり、くぐったりして遊ぶ。
4	11/18 (火)	・縄で遊ぼう	・縄を使った運動遊びを楽しむ。	・縄を引いたり、動かしたり、跳んだりなど、縄を使って遊ぶ。

5	11/20 (木)	・ボールで遊ぼう	・ボールの感触や特徴に気づき、ボール遊びを楽しむ。	・ボールを転がす、つく、投げる捕るなど、ボールを使って遊ぶ。
6	12/9 (火)	・大型遊具で遊ぼう	・巧技台、平均台を使って、安全に気をつけて、扱い方や遊び方を知る。	・巧技台や平均台で、安全な扱い方や遊ぶ方法を知りながら、いろいろな動きを経験する。
7	12/16 (火)	・そら組公園で遊ぼう①	・これまで行ってきた運動遊びを組み合わせてコーナーを作り、いろいろな運動遊びを楽しむ。	・みんなで話し合いながら、運動遊びのコーナーを作って、好きな運動遊びをする。
8	12/18 (木)	<b>本時</b> ・そら組公園で遊ぼう②	・みんなで相談して作ったコーナーで、友達と一緒にいろいろな運動遊びを楽しんだり、自分なりの目標を持って挑戦したりする。	・みんなで相談してコーナーを作る。 ・作ったコーナーで、ルールを守りながら、自分のペースで運動遊びに挑戦する。
9	1/8 (木)	・新しいそら組公園を作って遊ぼう ・アンケート調査②	・友達と一緒に運動遊びのコーナーを作ったり、動きを工夫したりして運動遊びを楽しむ。 ・幼児、家庭への調査を行い、前回との変容や課題について考察する。	・2学期前半から引き続き、みんなで相談して新しいそら組公園を作って遊んだり、いろいろな動きをを考えたりする。 ・幼児への聞き取り調査② ・保護者へのアンケート調査②
10	1/13 (火)	・そら組サーキットで遊ぼう	・運動遊びの遊具を組み合わせてサーキットを作り、友達と競い合ったり協力したりする楽しさを味わう。	・これまでの運動遊びの遊具を組み合わせてサーキットを作り、みんなでゲームをしたり、競争したりする。
11	1/15 (木)	・運動能力テスト②	・テスト結果も踏まえ、成果や課題について考察する。	・幼児の運動能力テスト②

### 5 本時までの遊びの様子

<b>【実践2】</b>	内 容	・道具を使わない運動遊びや、新聞紙を使った遊びをする。
11/11 (火)	環境構成	○ 遊びに必要な機具・材料（デッキ・曲・タンバリン・ベル・ガムテープ・セロハンテープ・ビニールテープ・PPヒモ・はさみ・雑巾など）を準備しておく。 ○ 大きく動き回るので、使用しない物は片付けて、遊戯室を広く使えるようにしておく。 ○ 事前に活動を予測し、ビニールテープを等間隔で貼ったり、目印をつけておく。 ○ 新聞紙遊びの際、幼児がセロハンテープやガムテープが使いやすいように設置する場所を作る。
思い切り体を動かしてみよう	教師の援助	☆ 活動前に気持ちを落ち着け、見通しを持って取り組めるように、内容や安全の約束について、全体で話し合う。 ☆ わかりやすく伝えたり、楽しさを共有するため、教師も一緒に遊びに参加し見本を見せる。 ☆ うまくできない幼児に、励ましの声かけをしたり、そばで一緒にやってみせたり、手を添えたり、コツや方法を具体的に説明したりなどの個人指導や援助を行う。 ☆ 幼児の遊びの様子を見ながら、進行したり、レベルアップしたりする。 ☆ 幼児に考えてほしいところや工夫してほしいポイントを投げかけ、自分なりに考えたり、工夫したりする時間を取る。
<b>【実践3】</b>	内 容	・フープや輪を使って、転がしたり、回したり、くぐったりして遊ぶ。
11/13 (木)	環境構成	○ フープ・輪などを準備しておく。 ○ 安全面への配慮として、広さに合った人数ずつで遊びを進める。 ○ 競争もあるので、事前にスタートラインを引き、折り返し目印になる物（カラーコーン・ペットボトルなど）を準備しておく。 ○ 遊びの内容に応じて、フープ（プラスチック素材）を使用するか、輪（ゴムホース）を使用するか工夫する。
フープと輪で遊ぼう		

フープと遊ぼう	教師の援助	<ul style="list-style-type: none"> <li>☆ 事前に内容の説明や、安全の約束について再確認する。</li> <li>☆ 友達と一緒にする遊びは、相手と声をかけ合ったり、相談したり、相手のことを考えて力を入れたりできるような声かけをする。</li> <li>☆ 勝負の楽しさがわかるよう、勝った嬉しさを共感したり、頑張っている姿を認めたり、悔しさを次の意欲につなげるような声かけをする。</li> <li>☆ こうしたらどうなるか、良い例や、ケガにつながりそうな危険な例を挙げて話し合い、幼児が自分で考えられるような援助を行う。</li> </ul>
【実践4】	内容	・縄を引いたり、動かしたり、跳んだりなど、縄を使って遊ぶ。
11/18 (火)	環境構成	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 短縄・長縄・ロープ・ガムテープなどを準備しておく。</li> <li>○ 縄で一本道を作り、縄の上を歩いたり跳んだりして遊ぶ際、安全のために両端をガムテープで固定する。</li> <li>○ 長縄での遊びは、勢い余って壁にぶつからないように、遊戯室の真ん中で行うようにする。</li> </ul>
縄で遊ぼう	教師の援助	<ul style="list-style-type: none"> <li>☆ 事前に内容の説明や、安全の約束について再確認をする。</li> <li>☆ 運動遊びが得意な幼児の遊びの様子を伝え、動きを真似したり、良い方法に気づいたりなど、他児に良い刺激となるような声かけをする。</li> <li>☆ 動きがごちない幼児のそばでアドバイスしたり、一緒にやってみたり、手を引いたりなど、個の発達に応じた援助を行う。</li> <li>☆ 次はどうしたいか、どうしたらもっと楽しくなりそうか、幼児の考えやアイデアを引き出していけるような声かけをする。</li> </ul>
【実践5】	内容	・ボールを転がす、つく、投げる、捕るなど、ボールを使って遊ぶ。
11/20 (木)	環境構成	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ボール・箱・フープなどを準備しておく。</li> <li>○ 一人一人が十分に触れたり、集中して遊んだり、また、みんなで一斉に取り組めるように、ボールは人数分揃える。</li> <li>○ ねらって投げる遊びでは、距離を長くしたり、箱やフープの大きさを変えたり、片手投げに挑戦させたりと、徐々にレベルアップしていく。</li> <li>○ 隣同士でぶつからないように、安全な距離の取り方を確認するなど、遊びの中で経験を重ね、幼児なりに安全な遊び方を身につけられるように援助する。</li> </ul>
ボールで遊ぼう	教師の援助	<ul style="list-style-type: none"> <li>☆ 教師も一緒に遊ぶことで、楽しさを共感したり、うまくできない幼児へ見本を見せて良い方法に気づかせ、自信につなげるような援助を行う。</li> <li>☆ 自分なりに挑戦したり、工夫したりしている様子を認め、褒めたり、他児に伝えたりして、互いに良い刺激となるような声かけをする。</li> <li>☆ 転がすときのスピードや方向を、相手の動きや気持ちを考えながら、力加減をコントロールできるような声かけをする。</li> </ul>
【実践6】	内容	・巧技台や平均台の安全な扱い方や遊ぶ方法を知ったり、登ったり、ジャンプしたり、バランスをとったり、くぐったりなど、いろいろな動きを経験する。
12/9 (火)	環境構成	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 巧技台・平均台・跳び箱・マット・トランポリン・ドリームトンネルなどの大型遊具を準備しておく。</li> <li>○ 大型遊具なので、安全のために十分な広さの確保や、組み合わせる場合は、互いがぶつからないように配置を工夫する。</li> <li>○ 遊具がきちんと積み重なっているか、ズレて危険な箇所はないかなどの安全点検を定期的に行う。</li> </ul>
大型遊具で遊ぼう	教師の援助	<ul style="list-style-type: none"> <li>☆ 安全な取り扱い方について、正しい方法、危険な方法、その危険性など例を挙げながら、1つ1つ丁寧に説明していく。</li> <li>☆ 大きな遊具なので、準備や片付けも友達同士で協力し合えるようにし、声をかけ合ったり、相手の動きに合わせてたりして、協力する楽しさを味わえるようにする。</li> <li>☆ 幼児の遊びの様子に合わせて、優しいものから少しずつ難しいものへレベルアップしていく。</li> <li>☆ 遊具を組み合わせたサーキットのようなコースを、幼児のイメージを大切にしながら教師も一緒に考え、いろいろな動きが経験できるように構成する。</li> </ul>



【実践7】 12月16日(火) そら組公園で遊ぼう①

【内容】 ・みんなで話し合いながら、運動遊びのコーナーを作って、好きな運動遊びをする。

【環境構成】 ○これまで経験してきた運動遊具や材料・機具を準備して、幼児が見やすいように設置しておく。

○これまでのことを振り返り、こういう公園にしたいとイメージしやすいように、これまでしてきた運動遊びの内容を表示しておく。

○幼児の提案を聞きながら、互いの遊びがぶつからないように、安全な間隔を確保しながら遊具設置の援助をする。

○遊具がしっかり積み重なっているか、ズレて危険なところはないか、常に安全点検を心がける。

【教師の援助】 ☆幼児がそれぞれ自分の好きな運動遊びに取り組めるように、どの遊具を使って公園を作るか、ルールなども全体で話し合っていて決めていく。

☆友達同士で声をかけ合いながら準備・遊び・片付けまでできるように声かけする。

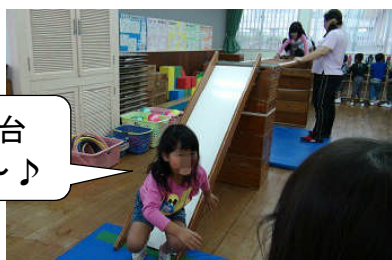
☆友達同士で教え合ったり、励まし合ったりする場面を捉え、優しい気持ちや言葉に共感したり、認めたりする。

【幼児の姿】

巧技台とすべり台を合体

ここはボール遊びコーナー

すべり台  
楽しい～♪



ちゃんと  
つかまえてるから  
大丈夫だよ



オレは  
おさるだから  
大丈夫

斜めのはしごにも挑戦してみよう

はしごの下から渡ってみよう

【反省】

- ・これまで安全に遊ぶための指導を徹底してきたことで、幼児が安全を意識しながら遊具を取り扱ったり、遊びを進める姿が見られた。
- ・幼児と相談しながら公園を作ったので、同じ遊具でも自分なりに遊び方を工夫して楽しむ様子が見られた。
- ・幼児の提案から、雲底を作るため巧技台を高く設置したので、安全管理のため教師がその場から離れられず、幼児の待ち時間も増え、その他の遊びも広げることができなかった。そのため、好きな運動遊びに取り組むというねらいが十分に達成できなかった。本時では、今回の遊びの様子から使用する遊具をある程度予想し、遊具の配置や環境構成を計画しておく(図3、表6)。

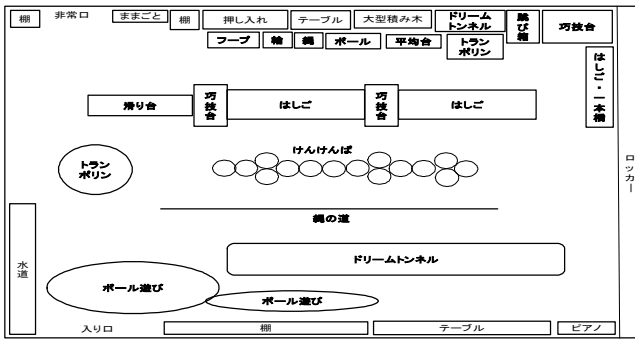


図2 12月16日(火)の環境構成図

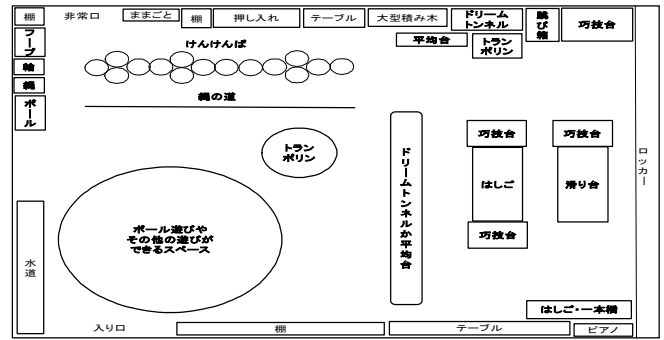


図3 前時の反省を踏まえた環境構成計画図

表6 前時の反省を踏まえた環境構成や援助の工夫

前時の反省	改善方法
●巧技台を高くしたことで、安全管理のために教師がそばを離れられず、その他の遊具を使った遊びを広げていくことができなかつた。	○教師がそばを離れられるように巧技台の高さを低くしたり、低くても楽しめる動きを提案したりする。
●はしごと滑り台を初めて使ったので、人気が集中し、幼児の待ち時間が長く、いろいろな遊びを楽しむことができなかつた。	○はしごと滑り台を分けて設置し、幼児がそれぞれ好きな運動遊びに取り組めるようにする。
●一緒に設置した巧技台以外の遊具を使って、好きな運動遊びに挑戦してもいいという声かけがうまく幼児に伝わらず、しばらく巧技台以外の遊具がなく、いろいろな遊具で遊ぶ時間が少なくなった。	○遊びながら遊具を1つずつ設定するのではなく、全てのコーナーを最初に設定してから、遊びを始める。 ○教師がこれまでの幼児の遊びの様子から、興味を持っているものを把握し、あらかじめ環境構成の計画図を考え、援助していく。
●幼児が見やすいように、これまでの遊びの表示や全ての運動遊具を一カ所にまとめて置いたが、活動中の遊具の出し入れの際、場所が狭かったり、幼児が遊具や友達にぶつかったりする場面があった。	○大型遊具とその他の運動遊具を分けて置き、遊ぶ場所もその近くに設けることで、互いがぶつからないで十分に遊びを楽しめるようにする。

6 本時の保育

検証保育 実践事例 『そら組公園で遊ぼう②』

保育指導案

平成26年12月18日(木) 10:30~12:00

そら組 男児10名 女児13名 計23名

教諭 前田 一美

幼児の姿	<ul style="list-style-type: none"> <li>今までやった運動遊びを自由に組み合わせせて「公園を作ろう」と伝えていたので、どの遊びをしたいか、どのように組み合わせたいか考え、「先生、今日は公園作るんだよね」「大きくしてからうんていにしたい」と、期待いっぱいでもとても楽しみにしている様子がうかがえた。</li> <li>準備、遊び、片付けまで、みんなで一緒にするよう声かけをすると、進んで活動に取り組む様子から、遊戯室での遊びに対する意欲がうかがえた。</li> </ul>	ねらい	◎みんなで相談して作ったコーナーで、友達と一緒にいろいろな運動遊びを楽しんだり、自分なりの目標を持って挑戦したりする。
		内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>みんなで相談してそら組公園を作る。</li> <li>作ったコーナーで、ルールを守りながら、自分のペースで運動遊びを楽しむ。</li> </ul>

時間	予想される幼児の姿	教師の援助	環境構成
10:20	<p>○始まる前のひととき</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・友達同士で今日の遊びに期待を持って話す様子が見られる</li> <li>・グループごとに座って待つ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・検証保育が始まる前に、幼児が緊張しないように、参観する先生方について話をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児がこれまでのことを振り返り、公園作りをイメージしやすいように、これまでの運動遊びの内容を表示しておく。</li> </ul>
10:30	<p>○運動遊び前の話し合い</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・みんなで楽しく遊ぶための約束について話し合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みんなが安全に楽しく過ごせるよう、事前に注意事項や約束について再確認する。</li> </ul>	
10:35	<p>○準備運動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・運動できるよう広がって、ケガ予防のための体をほぐす準備運動をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児のケガ予防と、運動遊びへの導入として、体を温め、ほぐす準備運動を取り入れる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・BGMで楽しい雰囲気作りをする</li> </ul>
10:40	<p>○公園作りの話し合い</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「これやったから、次は・・・」「この前これやって楽しかったから・・・」と、どの遊具をどのように組み合わせるか、前回の様子も踏まえ、遊び方やルールを相談する。</li> </ul> <p>(遊び方・ルール)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①スタートとゴールについて</li> <li>②各コーナーでの遊び方について</li> <li>③途中で失敗した場面等について</li> </ol> <p>○遊具の組み合わせ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・使う遊具の数や高さなどを相談しながら遊具を組み合わせていく。</li> </ul> <p>○運動遊び開始</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分のペースで各運動遊びに挑戦していく。</li> </ul>	<p>○前回の遊びの様子を振り返りながら、どんなコーナーを作りたいか、幼児の声を引き出すようにする。</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・意見がまとまらないときは、今後も時間があることを伝え少しずつみんなの考えを試していくことを提案する。</li> <li>・みんなで楽しく遊ぶために、遊び方やルールなども相談して決めるので、話し合いを進めたり、まとめる援助をする。</li> <li>・遊具の取り扱いの際、方法や順番などを教えたり、ケガをしないように声かけを行う。</li> <li>・全体的に回りながら、危険な場所で注意を促す声かけをしたり、事故のないよう見守ったりする。</li> <li>・個人的な援助が必要な幼児に付いて、励ましたり、補助したり、できた喜びを共感したりする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊具がすぐ使えるように、幼児が見える場所に、運動遊具や素材を準備しておく。</li> <li>・前回から継続できるように、大型遊具を出しやすいよう準備しておく。</li> <li>・幼児がイメージしやすいように、遊戯室の見取り図を用意し、遊具の配置を図示する。</li> <li>・各遊具が邪魔し合わないよう、遊具と遊具の間隔や配置を工夫し、安全に十分配慮する。</li> </ul> <p>(使用する遊具)</p> <p>フープ・輪・縄・ボール 巧技台・平均台・跳び箱 トランポリン・ドリーム トンネル・大型積み木等</p> <p>※小学校に相談してマットを借りる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・使わない(余っている)遊具は、遊びの邪魔や危険のない場所に、寄せておく。</li> <li>・定期的に遊具がズレていないか、きちんと設置されているかを確認する。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「先生、見ててよ。これできるようになったよ。」とできた喜びを報告する。</li> <li>・「〇〇すごいね。」 「これはこんなするんだよ」 「△△もできるようになったね。良かったね。」 「□□、前進んでるよ」等と、友達同士で声をかけ合う様子が見られる。</li> <li>・運動能力の差から、「〇〇まだこれできないの」「遅い、早くやって！」等、マイナスの声も出てくる。</li> <li>・簡単にできるようになると、「先生、ここはこんなしよう」「これもう少し高くしたい」「こことここつなげよう」等、もっと楽しくするためのアイデアを提案する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達同士で教えたり、励まし合ったりする場面を捉え、優しい言葉や気持ちに共感したり、認めたりする。</li> <li>・運動が苦手な幼児へコツを教えたり、頑張りを認めたり、優しく見守っている幼児の態度を褒めたりなどの援助を行う。</li> <li>・幼児のもっといろんなことに挑戦したいという意欲を高めたいけるよう、アイデアを引き出したり、アドバイスする援助を行う。</li> </ul>	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・遊びへの意欲や集中力が継続できるよう、遊びの様子に合わせて幼児の思いや提案を聞きながら、遊具の配置や難易度を変えていく。</li> </ul>
11:30	<p>○片付け</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・みんなで決められた場所に使った遊具を片付ける。</li> <li>・友達にぶつからないように移動したり、一緒に力を合わせて運んだりする。</li> </ul>	 <ul style="list-style-type: none"> <li>・片付けを最後まで頑張っている幼児や、友達と協力している様子を捉え、褒めることで、みんなで頑張ろうという意識を高める援助を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児の遊具の扱い方を見ながら、危険の無いように声かけをしたり、決められた場所に片付けできるよう援助する。</li> </ul>
11:45	<p>○運動遊び後の話し合い</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今日の楽しかったことや頑張ったこと、気づいたこと、困ったことなどの感想を発表する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今日の幼児の感想を聞き共感したり、頑張りを認めたり、気づいたことを共有したりなど、個々の思いを受け止める援助を行う。</li> <li>・次回の予告をし、次への期待や意欲につなげるようにする</li> </ul>	
12:00	<p>○教室に戻る</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊具や遊戯室の整理整頓がきちんとされているか最終確認をする。</li> </ul>
評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分で好きな運動遊びを見つけ、自分なりの目標を持って挑戦していたか。</li> <li>・友達と一緒に楽しみながら、どうしたらできるか、考えたり工夫したりして取り組んでいたか。</li> <li>・遊びのコーナー作りや遊具の準備・片付けにも、積極的に取り組んでいたか。</li> </ul>		


7 本時後の遊びの様子

**【実践9】** 1月8日（木） 新しいそら組公園を作って遊ぼう

**【内 容】**・2学期前半から引き続き、みんなで相談して新しいそら組公園を作って遊んだり、いろいろな動きを考えたりする。


**【遊びの様子】**  
 前回までのことを振り返り、新しいそら組公園をどのように作るかの話し合いを、K男が描いてきた設計図を参考にしながら進めていった。その他の幼児も、いろいろイメージが膨らんでいたようで、自分の考えを発言する子が多くなっていた。そのため、事前にみんなで相談することを伝えてはいたが、全てが設計図通りにならなかったと、K男がすねてしまう場面もあった。  
 遊びをスタートすると、準備や片付け、遊具の変更まで自分たちで考えて行動し、重たい物を運ぶ時や遊ぶ時も、友達同士で声をかけ合い取り組む姿が見られた。

『輪なげ遊び』




入ったら  
10点だよ

『長縄跳び』




郵便屋さん  
郵便屋さん♪

『タオルタクシー』



安全運転  
お願いします

『ハシゴ道陣取り』



じゃんけん  
ぼん!

**【実践10】** 1月13日（火） みんなでそら組サーキットで遊ぼう

**【内 容】**・これまでの運動遊びの遊具を組み合わせてサーキットを作り、みんなでゲームをしたり、競争したりする。

**【遊びの様子】**  
 前回、滑り台とはしごの道をつなげたいという提案で終わった活動から遊びを再開した。高さの違う2つの遊具をどうつなげるかみんなで相談し、階段でつなげたり、難易度を上げてはしごでつなげたりして遊ぶことになった。  
 初めは興味を持って、どこまで手放しで渡れるか、速く渡れるかなど、友達と競い合いながら遊んでいた。しばらくすると遊びが鬼ごっこに変わり、数人の幼児がとこころ構わず走り回り出した。そのため、別の遊びをしていた幼児にぶつかったり、転んだり、ボールを投げて周りの幼児に当たったりする場面が出てきた。  
 そこで、遊びに変化を取り入れ発展し、継続して楽しく遊べるように、活動の後半はそら組公園の遊具を組み合わせてサーキットを作り、競争をしてみようという提案をする。競争することに興味を示し、みんなでコースやチームを作って遊び始めた。初めは、競争の意味がわからず、隣の友達を待ってしまう幼児も数人いた。競争の意味がわかってくると、徐々に自分のチームを応援する声が出てきて、動きもうまく機敏になり、競い合うことを楽しむ様子が見られた。

**『そら組サーキット』**



「一本橋ハイハイはグラグラする」



「ボール持ってるからちょっと難しい」



「落ちないように気をつけよう」

## VIII 研究の考察

### 1 作業仮説(1)の検証

遊戯室を活用し、運動遊具を使った遊びを工夫することで、多様な動きを身につけ、体を動かす楽しさや心地よさを味わえるであろう。

#### (1) 遊戯室で運動遊具を使った遊びの展開

##### ① 手だて

遊戯室を活用し、身近な運動遊具を使った遊びを段階的に取り入れ、いろいろな動きを楽しみながら経験できるようにした。

##### ② 結果

遊戯室での活動において、幼児が傍観したり途中でやめたりすることなく、自分のペースでいろいろな動きに取り組んでいた。その中で、自分が好きな遊びに繰り返し取り組み、徐々に動きのぎこちなさもなくなり、自分で新しい技を考え挑戦する姿が多く見られるようになった(図4)。



図4 『あんたがたどこさ♪』ができたよ

また、これまで運動遊びに消極的だった幼児も、途中で諦めずに最後まで取り組み、緊張していた表情が笑顔になり、「先生、できたよ」と喜ぶ声も聞こえてくるようになった(図5)。



図5 巧技台の山登りは簡単!

遊戯室での活動後に、幼児から感想の聞き取りを行うと、積極的に発表する子が増え、できるようになったことを喜んだり、次回を期待する声が聞こえた(表7)。

表7 活動後の幼児の感想

- ・「♪あんたがたどこさ、」までできるようになりました。
- ・ケンケンパで、1回も止まらないでできて嬉しかったです。
- ・はしごを手放しで渡れるようになって嬉しかったです。
- ・今度のはしごと一本橋つなげてみたい。

さらに、8月と1月に行った運動能力テストから、評価3以上の人数が増え、前回より結果が伸びた幼児も多かった(図6, 7)。

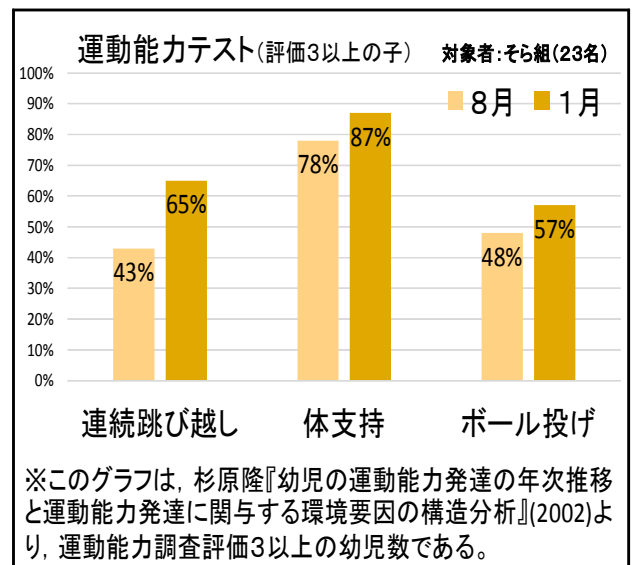


図6 運動能力テスト結果

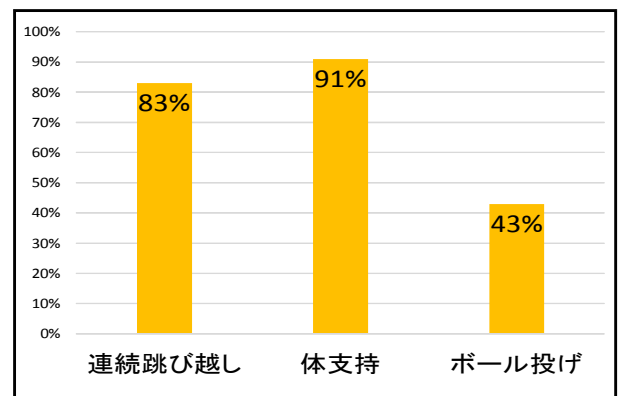


図7 結果が伸びた幼児数

### ③ 考察

遊戯室を活用し、身近な運動遊具を使った遊びを工夫したことで、幼児がいろいろな動きを繰り返し経験することができた。幼児の感想からも思い切り体を動かしたことで、体を動かす遊びの楽しさや、充実感、満足感を味わえたことがわかる。

また、遊びを幼児の興味や発達に応じて、段階的に展開したことで、運動遊びに消極的だった幼児も、途中で諦めずに取り組む姿が見られた。そのため、幼児が多様な動きを身につけ、ぎこちなさが減少し、力加減やバランス感覚が良くなるなど、運動能力が高まったと思われる。

### (2) 体を動かす楽しさや心地よさを味わう

#### ① 手だて

友達と一緒に挑戦したり、教え合ったり、協力したりする場面を大切にし、楽しさや心地よさを共感できるようにした。

#### ② 結果

運動遊びにクラス全員で取り組むことで、友達の良いところを見て真似てみたり、励まし合ったり、教え合ったりする姿が見られた。また、感想や幼児同士の会話から、友達と楽しさを共感している声も聞こえた(表8)。

表8 幼児の声

<p>【幼児の感想】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・〇〇さんと、一本橋でじゃんけんぼんしたことが楽しかったです。</li> <li>・縄の「ぐるぐるトンネル」ができて楽しかったです。</li> <li>・トランポリンで先生の頭を超したことが楽しかったです。</li> </ul> <p>【幼児の会話】</p> <p>T男：「うさぎとオオカミ」が楽しかったなあ。</p> <p>Y男：オオカミに捕まりそうだったけど、ギリギリセーフだったなあ。</p> <p>H男：今日の「遊戯室で遊ぼう」楽しかったね。先生、明日も来る？また、ケンケンパできる？</p> <p>M子：今日一緒にすべり台したよね。</p> <p>K子：うん、楽しかったね。また一緒にしよう。</p>
---

感想を発表する際、これまで自分の思いをうまく伝えきれなかった幼児や、人前での発表が苦手だった幼児も、積極的に手を挙げて発表することができた。

今回、幼児の体を動かす楽しさの実態を知るために、「運動遊びは好きですか」という聞き取り調査を行った(図8)。

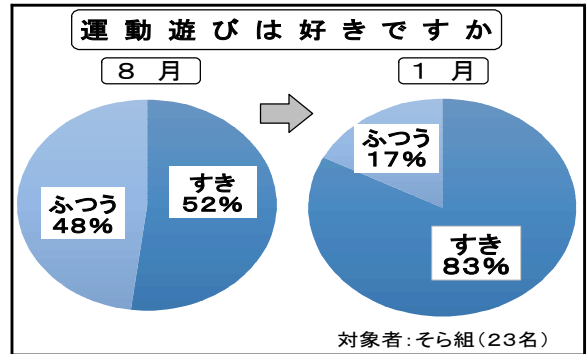


図8 幼児への聞き取り調査結果

さらに、それぞれの回答の理由を聞いてみると、表9のような理由があった。

表9 幼児の回答の理由

<p>【運動遊びが好きと答えた理由】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 楽しいから</li> <li>◎ 難しいから挑戦したくなる。</li> <li>◎ 最初は上手じゃなかったけど、練習して上手になったら楽しくなる。</li> <li>◎ いろいろなもので遊べるから。</li> <li>◎ 友達に教えてもらってできるようになったから嬉しい。</li> </ul> <p>【運動遊びがふつうと答えた理由】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 今はこま回しに挑戦中だから、運動遊びはふつう。</li> <li>○ あまり難しくなくて、簡単すぎる。</li> </ul> <p>※運動遊びが嫌いという幼児はいなかった。</p>
---

### ③ 考察

友達と一緒に遊ぶという場面を大切にすることで、友達と声をかけ合いながら、達成感や充実感を味わい、友達と楽しさを共感していることがわかった。

また、遊戯室での運動遊びを通して、運動遊びが好きな幼児が増え、ほとんどの幼児が楽しみながら取り組んでいることがわかった。

遊びの中で、「簡単すぎる」という声から、運動能力の個人差に応じた内容を工夫する必要性を感じた。

さらに、人前で発表することが苦手だった幼児も、達成感が自信につながり、楽しさや自分の思いを伝えたいと、みんなの前で発表できたことから、運動への意欲が表現力の育ちにも大きな影響を与えたと思われる。

## 2 作業仮説(2)の検証

体を動かしたくなるような環境構成や、個の発達に応じた援助を工夫することで、体を動かそうとする意欲が育ち、進んで運動遊びに取り組むようになるであろう。

### (1) 体を動かしたくなる環境構成

#### ① 手だて

運動遊びで使用する道具や大型遊具を、遊戯室に集め、幼児と相談しながら遊びのコーナーを作り、より運動遊びに興味を持てるようにした(図9)。



図9 遊戯室の環境構成

#### ② 結果

初めは、遊具を見て「今日はどんなことして遊ぶの?」と、教師の言葉を待っていたが、徐々に「先生、今日はこうやって遊びたい」と、自分の思いや考えを伝え、主体的に遊ぶようになった。

遊びのコーナー作りでは、「ここはこうしよう」「トランポリンも出したい」「ここだったら(周りとはぶつからないから)危なくないよ」など、遊具の準備や片付けも、幼児が進んで取り組むようになった。

また、大型遊具を運ぶ際には、「これ大きいから一緒に持とうね」と、友達同士声をかけ合って協力する様子も見られるようになった(図10)。



図10 「そら組公園作ろうよ」

そら組公園を作る際、幼児が理解しやすいように、教師が遊戯室の配置図を用いて話を進めたので、「次はそら組まつりがしたい」と、自分の考えた設計図を描いてきた幼児がいた(図11)。

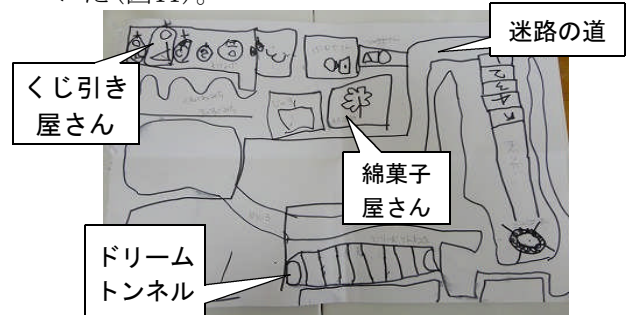


図11 「そら組まつり」の設計図

#### ③ 考察

体を動かすのに十分な広さと、いろいろな種類の大型・運動遊具を用意し、幼児が見えるように設置したことで、「早く遊びたい」と、運動遊びに興味を持ち、積極的に行動する幼児が増えた。

環境構成の設計図を図示したことで、みんなイメージを共有でき、相談しながら遊びを進めていくことができた。また、準備や片付けまで幼児が進んで行うなど、運動遊びへの意欲の高まりが見られた。

遊びたくなるような環境を整え、相談しながら進めるという手だてが、幼児の主体的な活動を促すことに効果的だった。

### (2) 個の発達に応じた援助

#### ① 手だて

励ましたり、見守ったり、見本を見せたり手を添えたりなど、個々の運動能力の発達に応じた援助を行うことで、運動遊びに消極的な幼児も抵抗なく取り組めるようにした。



② 結果

運動遊びに消極的な幼児へは、得意な幼児の様子に気づかせたり、励ましたり、教師が手を添えるなど、個の発達に応じた援助をすることで、繰り返し挑戦するようになった。

**運動遊びに取り組むH男の変容**

**【4月～9月頃の様子】**

集団保育の経験が無く、初めてのことに強い不安を抱き、怒った口調で話すことが多く、友達とかかわることが苦手なH男。教師との信頼関係を築き、園生活の仕方を個別に丁寧に指導し、H男のペースで焦らずゆっくり取り組ませていくことで、徐々に情緒が安定していった。

これまで戸外に出ることが少なく、運動遊びはほとんど経験が無いため、苦手意識が強かった。他児の様子を見せて楽しさが伝わるようにしたり、H男が興味を持ってできそうな運動遊びに「一緒に遊ぼう」と誘うが、「それはやらない」とその場を離れたり、「できないからやらないんだよ！」と怒って、挑戦する前からできないと決めつけて、あまりかかわろうとしなかった。

**【11月～2月頃の様子】**



遊戯室での活動では、H男も楽しんで参加できそうな、簡単な動きから取り入れ、楽しい雰囲気作りを心がけていった。




H男のペースに合わせて取り組んでいったことで、抵抗なく取り組み、できなくても怒ることなく何度も挑戦し、できるようになった喜びを感じられるようになった。少しずつ



できるようになったことで自信がつき、「自分でできる」と、教師の補助がなくても、友達の様子を真似して、



自分からいろいろな運動遊びに挑戦していくようになった。運動遊びをする中で、友達とのかかわりが深まり、友達同士誘い合って、積極的に戸外でも運動遊びに挑戦する姿が見られるようになった。



幼児が、家庭で運動遊びを楽しむ様子の変容を知るために、保護者アンケートを8月と1月に実施した。その結果、家庭でも活発に体を動かして遊ぶ幼児や、体を動かすことを楽しむ幼児が増えた(図12)。

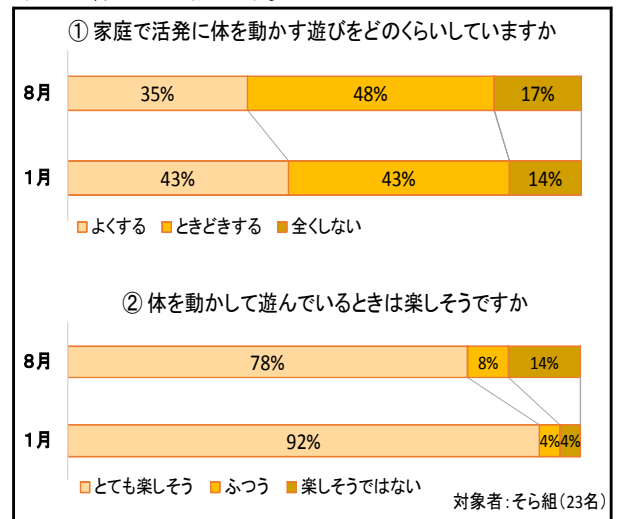


図12 保護者アンケートの結果

③ 考察

個の発達に応じた援助を行うことにより、H男の事例のように、運動遊びに消極的だった幼児も、友達の様子を見て真似たり、励まされたりして、不安や緊張を感じることなく自分のペースで運動遊びに取り組むことができた。そのため、友達と一緒に運動遊びを楽しみ、友達とのかかわりも深まった。また、できることが少しずつ増えたことが自信になり、別の運動遊びへの意欲につながったことから、この手だてが有効であった。

さらに、保護者アンケートの結果から、幼児が進んで体を動かして遊ぶことを楽しいと感じ、継続して家庭でも活発に体を動かして遊んでいることがわかった。

### 3 本研究を通して

本研究では、「運動遊びを楽しむ」ということを第1のねらいとして、活動の場を遊戯室に絞って検証保育を進めてきた。

結果、毎回幼児の楽しそうな様子や感想、発言、意欲の高まりなど様々な変容が見られ、今後もさらに教材研究を深めながら継続して取り組んでいきたい実践となった。

さらに、その影響が、本研究と平行して園で取り組まれているチャレンジカードにも現れていた。



図13 チャレンジカード

7月から実施しているチャレンジカードは、戸外での運動遊びへ、幼児の挑戦意欲を高めることをねらった取り組みである。誰でもできるような簡単なものから、少々努力が必要な難しい内容を29項目取り入れている(図13)。

しかし、当初は、進んで取り組むのは運動遊びが得意な幼児数名で、教師がそばで援助をするときだけ取り組んだり、チャレンジカードに興味を示さない幼児もいた。

遊戯室での活動を通して、運動遊びに消極的だった幼児も、抵抗なく体を動かすことを楽しむようになり、ほとんどの幼児が、運動遊びに意欲的になった。その影響から、戸外でも運動遊びに取り組むようになり、チャレンジカードにも挑戦するようになった。

また、これまで教師が誘っても、なかなか取り組もうとしなかった幼児が、「今日は赤色まで」「あの線のところまで」と、自分なりに目標を持って挑戦したり、できるまで集中して取り組む姿も見られるようになった。このように、友達と一緒に教え合ったり、競い合ったりしながら、クラス全員が達成項目数を増やした。

さらに、2人はチャレンジカードの全項目を達成することができた(図14)。

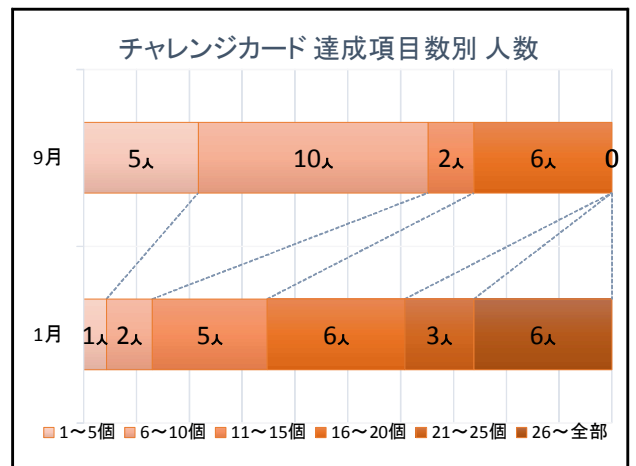


図14 チャレンジカード集計結果

遊戯室での運動遊びを通して、運動遊びが好きになり、進んで体を動かすようになることを目指した本研究の取り組みが、戸外での運動遊びにも好影響を及ぼしていることがわかった。

## IX 研究の成果と課題

### 1 成果

- (1) 遊戯室を活用し、運動遊びを段階的に取り入れたことで、幼児が自分のペースで楽しみながら取り組み、運動遊びが好きになり、自分なりの目標を持って進んで体を動かすようになった。
- (2) 遊戯室の環境を工夫し、使用する遊具や遊び方も、環境構成図を作成したりして一緒に考えていったことで、幼児が見通しを持って意欲的に運動遊びに取り組むようになった。
- (3) 個の発達に応じた援助を行ったことで、運動遊びに消極的だった幼児も、抵抗なく取り組み、達成感や充実感を味わうことができた。
- (4) 幼児が基本的な動きを身につけたことで、できる喜びを味わい、運動遊びへの意欲がますます高まった。
- (5) 思いを伝えることが苦手だった幼児も、進んで発表できるようになるなど、少しずつできることが増えたことで、自信がついた。

## 2 課題

- (1) 誰もが楽しく取り組めるよう、個人差に応じた内容や援助を工夫していく。
- (2) 運動遊びの年間活動計画を作成し、室内や戸外でも年間を通して継続的に取り組んでいけるようにする。
- (3) 園生活の様々な場面で運動遊びを取り入れられるよう、教材研究を深めていく。

### おわりに

本研究を通して、幼児期に多様な動きを経験し身につけることが、幼児の様々な発達に大きく影響してくることを学びました。また、楽しく遊びながらいろいろな動きを経験できるよう、環境や援助の工夫、教材研究も深めていくことができました。

今回、実践を進めながら、幼児の表情や言動から、楽しさや意欲の高まり、成長が感じられ、私自身も楽しみながら進めていくことができました。

さらに、実践からいくつかの課題も見えてきましたが、改善を加えながら年間を通して継続していくことで、更なる成果が期待できることも実感しました。

今後は、遊戯室に限らず、園庭や体育館、運動場、日々の保育の中などでも、運動遊びを取り入れていけるよう、活動の場も広げていきたいと思えます。

入所前研修から研究期間中、多くのご指導をいただきました仲西起實所長、山里崇係長、日高聡指導主事、ご指導、ご助言をいただきました幼稚園指導主事名嘉房枝先生をはじめ、浦添市教育委員会の諸先生方、内間幼稚園の友利愛子副園長へ深く感謝申し上げます。

最後に、この研究の機会をくださり、快く送り出してくださいました沢岬幼稚園の仲間公子園長をはじめ、いつも暖かく励まし、協力してくださった先生方、半年間共に支え合ってきた研究員の先生方に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

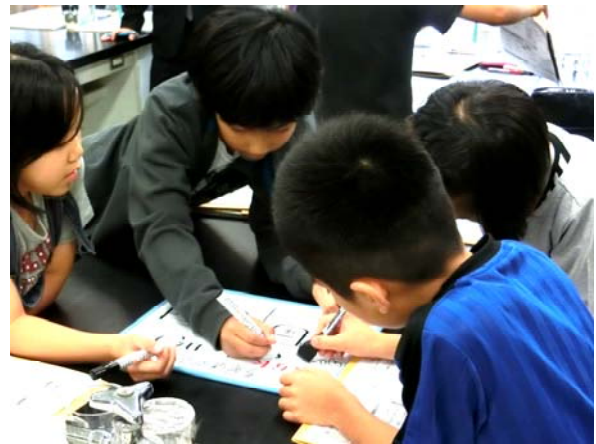
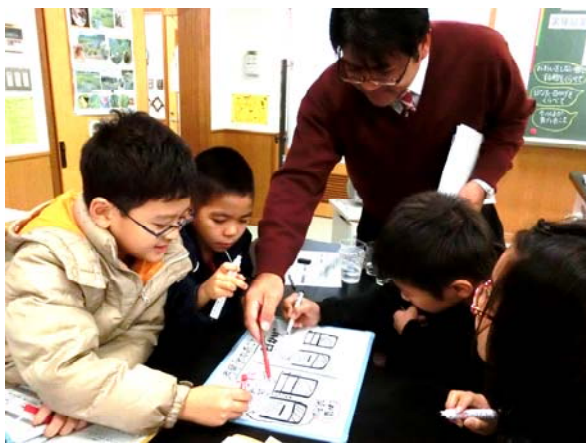
### 【主な参考・引用文献】

- ・指導用スライド教材Ⅲ  
運動能力の発達と「遊びの」大切さ ～運動遊びを通して育つもの～  
東京都教育委員会 2012年
- ・0～5歳児の運動遊び指導百科 前橋 明 ひかりのくに株式会社 2004年
- ・幼児期運動指針ガイドブック ～毎日、楽しく体を動かすために～  
文部科学省 幼児期運動指針策定委員会 2012年
- ・日本幼児体育学会認定 幼児体育指導員養成テキスト  
幼児体育－理論と実践－〔初級〕 日本幼児体育学会 株式会社大学教育出版 2011年
- ・文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書  
「幼児の運動能力発達の年次推移と運動能力発達に関与する環境要因の構造分析」  
研究代表者 杉原隆 文部科学省 2002年
- ・幼稚園教育要領解説 文部科学省 フレーベル館 2008年

〈小学校 理科〉

## 科学的な思考力・表現力を育成する指導の工夫

—理科におけるイメージ図と定型文を活用した対話活動を通して—



浦添市立 牧港小学校

喜屋武 真史

# 目次

I	テーマ設定理由	23
II	目指す児童像	23
III	研究の目標	24
IV	研究仮説	24
1	基本仮説	24
2	作業仮説	24
V	研究構想図	24
VI	研究内容	25
1	科学的な思考力・表現力について	25
2	対話活動について	27
3	イメージ図と定型文の活用について	29
VII	授業実践	31
1	単元名	31
2	単元の目標	31
3	単元について	31
4	単元の評価規準	32
5	単元の系統性	33
6	指導計画	33
7	本時の学習	34
VIII	研究の考察	36
1	作業仮説（1）の検証	36
2	作業仮説（2）の検証	38
3	本研究を通して	43
IX	研究の成果と課題	44
1	成果	44
2	課題	44
	おわりに	44
	主な参考・引用文献	44

## 科学的な思考力・表現力を育成する指導の工夫

ー 理科におけるイメージ図と定型文を活用した対話活動を通して ー

浦添市立牧港小学校 喜屋武 真史

### 【要 約】

本研究は、自然事象等に対する児童の考えを、定型文の活用で言語化するとともに、イメージ図で可視化し、それらを基にした交流をもつことにより、他者との対話や自己内対話のある学習活動を活発にし、科学的な思考力・表現力をはぐくんでいくことを目指したものである。

キーワード □科学的な思考力・表現力 □定型文 □イメージ図 □対話 □コミュニケーションボード

### I テーマ設定理由

21世紀は、「知識基盤社会」の時代であると言われ、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が一層重要になり、同時に「グローバル化・多様化」する社会変化に合わせ、他者を理解する資質も必要性を増している。こうした社会の変化やニーズから考えても、これからの授業づくりでは、他者と関わり、他者を理解しながら、基礎的・基本的な知識・技能と、思考力・判断力・表現力等を調和的にはぐくむことを考えていくことが重要となる。

こうした状況を踏まえ、我が国における児童生徒の学力についてみると、PISA調査等の結果からは、「思考力・判断力・表現力を問う問題、知識・技能を活用する問題に課題がある」ということが分かっている。また、平成24年度全国学力・学習状況調査の結果からも、科学的思考力・表現力が十分定着していないという実態が示された。

こうした課題に対し小学校学習指導要領解説理科編（以下、「解説理科編」）では、科学的な思考力・表現力の育成を図る観点から「観察・実験の結果を整理し考察する学習活動、科学的な概念を使用して考えたり説明したりする学習活動、探究的な学習活動を充実する方向で改善する」と方針が明記された。

これまでの私の授業実践を振り返ると、理科における「問題解決学習（探究的な学習活動）」という授業スタイルの定着を図ることで、見通しや意欲を持って学習に取り組むという点で、一定の成果はあった。しかし、実験の結果から考察について話し合う場面などでは、発言する

児童がやや限定され、特に説明を求められると尻込みをしてしまう児童が多かったと感じる。児童一人ひとりに、言語活動の機会を保障し、科学的な思考力・表現力を育成するために授業展開に工夫が必要である。

また、アンケートによる意識調査では、考察などを説明することが苦手な理由として、「説明の仕方がわからない」「時間内に書けない」などの意見が多く見られた。このことから、「考察等を表現する力の定着が不十分、故に説明できない」という実態を捉えることができる。

これらの課題を改善するには、考察したことを言語化する表現力を高めるとともに、絵や図などを用いて可視化表現するよさを味わわせ、それらを基にして、考えを相互に交流させる活動を展開することが有効であると考えられる。

そこで、本研究では、理科における問題解決学習の過程において、定型文の活用による考えの言語化や、頭の中のイメージを絵や図で表現する思考の可視化を試み、それを基にして、コミュニケーションボードを媒体とした対話のある活動を取り入れていく。その活動の中で、児童は目の前の自然事象について、考えたり説明したりしながら、他者との対話や自己内対話をくり返して、自分の考えを整理していく。そのような学習活動を充実させてこそ、科学的な思考力・表現力をはぐくんでいくことができるのではないかと考え、本テーマを設定した。

### II 目指す児童像

自然事象について、根拠をもとにした対話をしながら、科学的に思考し表現できる児童

### III 研究の目標

科学的な思考力・表現力を育成するために、根拠をもとにした対話を活発にする手立てとしての、イメージ図や定型文の活用のしかたについて、具体的に研究する。

### IV 研究仮説

#### 1 基本仮説

問題解決の学習過程において、定型文やイメージ図を活用した対話活動を取り入れることで、考えたり説明したりできるようになり、

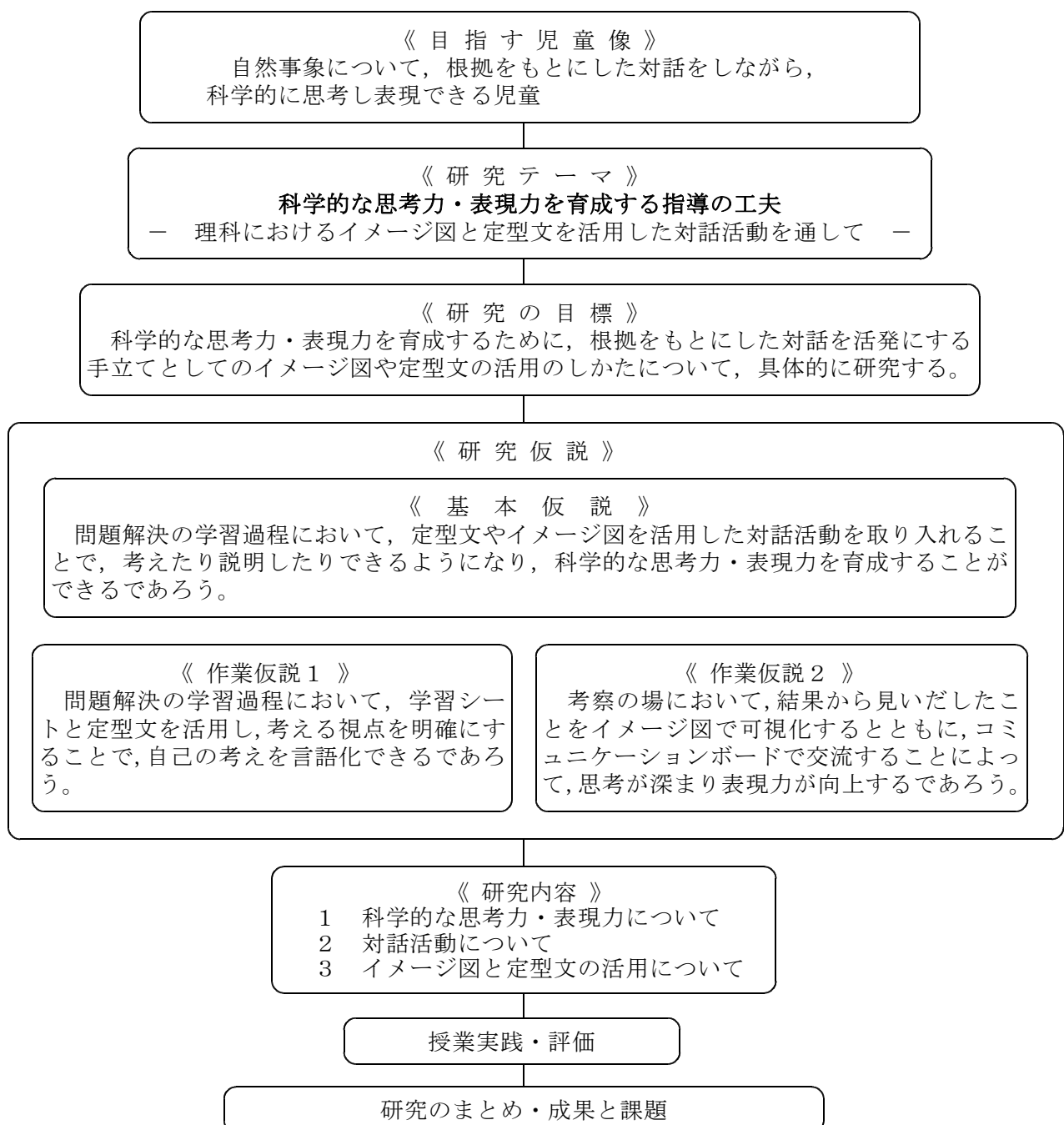
科学的な思考力・表現力を育成することができるであろう。

#### 2 作業仮説

(1) 問題解決の学習過程において、学習シートと定型文を活用し、考える視点を明確にすることで、自己の考えを言語化できるであろう。

(2) 考察の場において、結果から見いだしたことをイメージ図で可視化するとともに、コミュニケーションボードで交流することによって、思考が深まり表現力が向上するであろう。

### V 研究構想図



## VI 研究内容

### 1 科学的な思考力・表現力について

#### (1) 科学的な思考力・表現力とは

解説理科編(2008)には、『科学が、それ以外の文化と区別される基本的な条件としては、実証性、再現性、客観性などが考えられる。「科学的」ということは、これらの条件を検討する手続きを重視するという側面からとらえることができる』と示されている。つまり、「科学的」であるためには、表1に示した、その3つの条件を検討することを重視していることが条件となり、小学校理科教育においては、「問題解決の過程」そのものが「科学的」な学習活動であると考えることができる。よって本研究において、「科学的な思考力・表現力」とは、「問題解決の過程において、思考する力、思考したことを表現する力」と捉えることとする。

**表1 科学が、それ以外の文化と区別される基本的な条件（解説理科編より）**

実証性	考えられた仮説が観察、実験などによって検討することができるという条件
再現性	仮説を観察、実験などを通して実証するとき、時間や場所を変えて複数回行っても同一の実験条件下では同一の結果が得られるという条件
客観性	実証性や再現性という条件を満足することにより、多くの人々に承認され公認されるという条件

また、角屋重樹(2011)は、「思考とは、ある目標の下に、子どもが既有知識をもとにして対象に働きかけ種々の情報を得、それらを既有の体系と意味づけたり、関係づけたりして、新しい意味の体系を創りだしていくことである」とし、「表現は、対象に働きかけて得られた情報を目的に合わせた的確に表すこと」と述べている。

以上のことから、本研究における科学的な思考力を、「問題解決の過程において、得られた情報を根拠として、新しい概念を創り出す力」とし、科学的な表現力を「科学的に思考したことを、文章や図などを用いて表す力」と定義する。

#### (2) 科学的な思考力・表現力を育成するには

平成20年の中央教育審議会答申の中で、理科の改善の基本方針として「科学的な思考力・表現力の育成を図る観点から、学年や発達段階、指導内容に応じて、例えば、観察・実験の結果を整理し考察する学習活動、科学的な概念を使用して考えたり説明したりする学習活動、探究的な学習活動を充実する方向で改善する」と示された。

ここでは、「観察・実験の結果を整理し考察する学習活動」「科学的な概念を使用して考えたり説明したりする学習活動」を理科における言語活動ととらえ、「探究的な学習活動」を問題解決ととらえることとする。よって、理科の授業づくりでは、問題解決や、その中で行われる言語活動の充実を図ることが、科学的な思考力・表現力を育成することにつながると考えられる。

本研究は、「対話」という活動を通して科学的な思考力・表現力をはぐくむ指導について研究することが目的であるが、問題解決の学習過程と言語活動の充実について研究することが、対話の活動を充実させることに資すると捉え、以下、理科における問題解決と言語活動の充実について考察する。

#### ① 理科における問題解決の充実

解説理科編においては、問題解決の過程について「児童が自然の事物・現象に親しむ中で興味・関心を持ち、そこから問題を見だし、予想や仮説の基に観察、実験などを行い、結果を整理し、相互に話し合う中から結論として科学的な見方や考え方をもつ過程」と解説されている。このような過程の中で、目標に示されている問題解決の能力が育成されるのであるが、平成20年告示の学習指導要領では、問題解決において同じような科学的な思考を用いるものを、同じ学年に配置するように内容が整理されている(表2)。

そのため、理科の学習で充実した問題解決を成立させるためには、各学年で示されている問題解決に必要な能力の育成を意識し、授業をデザインしていくことに留意が必要である。ただし、これらの問題解決の能力は、その学年で中心的に育成するものであるが、下

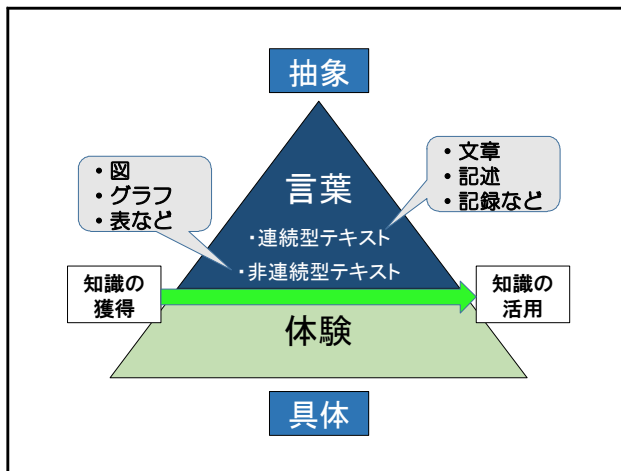


の学年の問題解決の能力は上の学年の問題解決の能力の基盤となるものであることも忘れてはならない。

**表2 各学年で育成する問題解決の能力**

第3学年	比較しながら調べる（比較）
第4学年	関係づけながら調べる（関係づけ）
第5学年	条件に目を向けながら調べる（条件制御）
第6学年	推論しながら調べる（推論）

また、村山哲哉（2013）は、『理科の問題解決のプロセスにおいて重要なのは、具体の事物・現象から受け取る子どもの見方や考え方が、観察、実験といった「体験」と思考、表現といった「言語」を織り交ぜながら、科学的な見方や考え方に高まるように指導することである。つまり、「具体」の体験を重視しながら、「抽象」操作である言語活動を充実することが、問題解決を成立させる重要な要件となる』と述べている（図1）。



**図1 小学校理科における言語活動の充実**  
(村山の図を参考に作成)

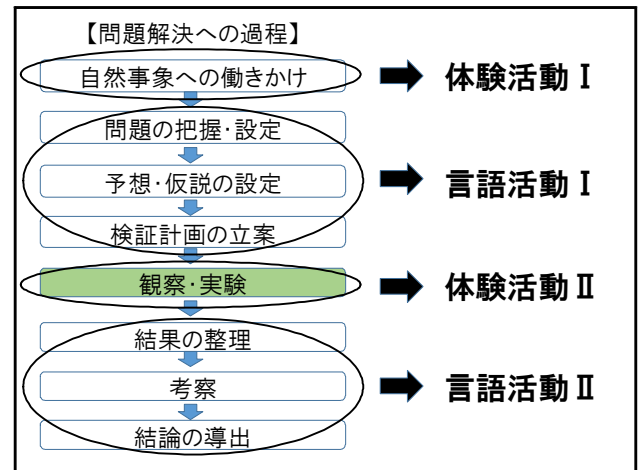
新しい知識を獲得した上で、その知識を活用していくためには、問題解決の過程において、実験や観察などの「具体」と、「抽象」操作である言語活動を織り交ぜて設定することが重要である。そこで本研究では、予想や仮説を立てる場面や結果から考察する場面において「抽象」操作である言語活動を設定し、児童の見方や考え方が科学的なものに高まるよう指導していく。その際、科学的に思考したことを表現する方法としては、文章、記述、記録などの連続型テキストばかりでなく、

図やグラフ、表などの非連続型テキストを用いて表現することも大切であると考える。

② 理科における言語活動の充実

理科における言語活動の充実については、科学的な思考力・表現力の育成を図る観点として解説理科編にも示されているように、学年や発達の段階、指導内容に応じて、例えば観察・実験の結果を整理し考察する学習活動、科学的な言葉や概念を使用して考えたり説明したりする学習活動を充実することが考えられる。これまで述べてきたように小学校理科の学習においては、問題解決で探究的に学ぶことが重視されるが、その中のどの過程で言語活動の充実を図るのか、教師が意図的に組み込んでいくことが重要であると考えられる。

村山（2013）は、問題解決のプロセスを、8つのステップに分けて考えており、これらを体験活動と言語活動に分類すると、図2のように整理することができる。その上で、「問題解決は、体験活動と言語活動の両面から成り立っており、問題解決のプロセスを子ども自身が成立させることが、言語活動の充実につながると考えられるであろう」と述べている。



**図2 問題解決のステップと体験活動, 言語活動**

よって本研究では、言語活動の充実を図るための前提条件として、まず、子ども達自身が問題解決のプロセスを十分に理解し、見通しをもつことから始めたい。そのための環境整備として、まず揭示資料を活用し、問題解決のプロセスについて常に意識しながら取り組める工夫を講じる（図3）。次に、児童の学習シートも、問題解決の流れに沿ったレイアウトにし、思考

パターンの定着を図る（図4）。そして、予想や仮説を立てる場面や結果の考察をする場面において、意図的な「対話」活動を組み込み、言語活動の充実を図っていくこととする。

対話を活性化する手だてとして、予想や仮説を立てる場面では、定型文の活用による思考の言語化に取り組む。そして、それを基に、自ら

の考えを顕在化させていくための、他者との対話や自己内対話を活発にしていきたい。結果を整理し考察していく場面では、定型文の活用による思考の言語化や、イメージ図を活用した思考の可視化を行う。そして、表現したそれぞれの考察を持ち寄り、グループでの対話というスタイルで言語活動を活発に展開していきたい。

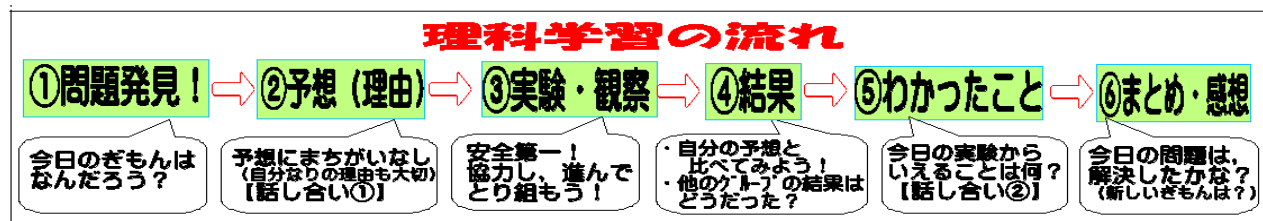


図3 問題解決の流れ（教室掲示用）

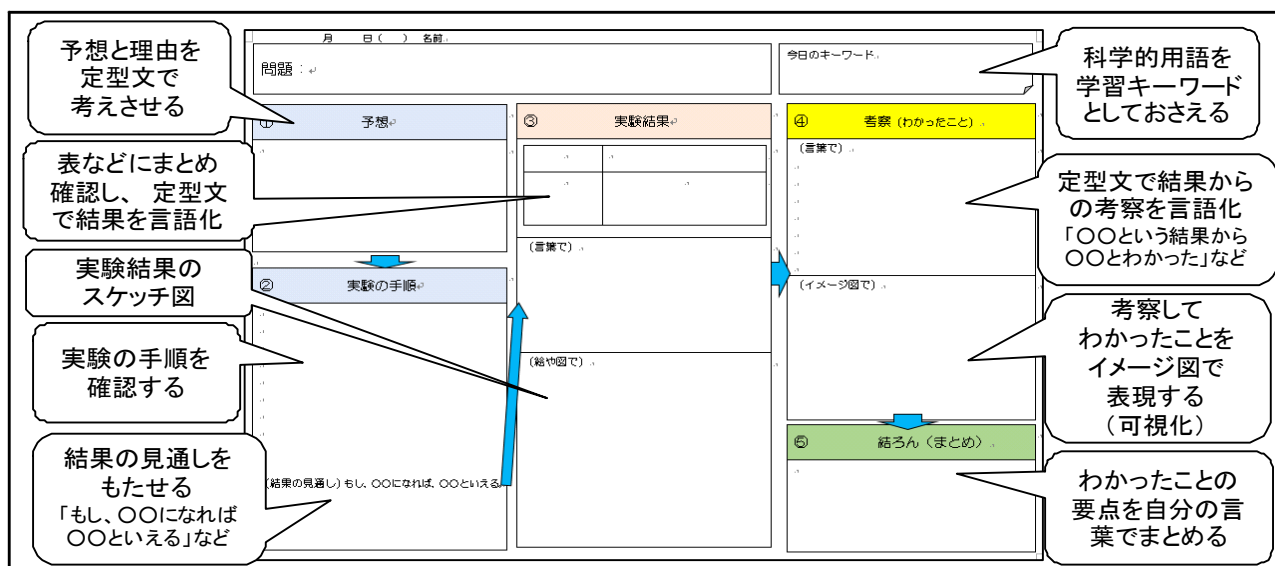


図4 問題解決の流れに沿った学習シートの工夫

## 2 対話活動について

### (1) 対話とは

「対話」を辞書で調べると、「広義には2人以上の人物間の思想の交流」とある。しかし、授業では目的に応じてさまざまな形態の対話がなされている。それは、「教材（自然事象）との対話」「自己内対話」「他者との対話」などが挙げられる。そのため、本研究においては、対話について「教材との対話や自己内対話を含めた科学的な思考の交流（他者との対話については相互交流）」と定義する。

理科の学習では問題解決を通して、それぞれの対話を効果的に取り入れていきたい。本研究では、その中でも特に、ペアでの対話、グループでの対話、全体での対話などの「他

者との対話」と、他者との対話を活発にしてこそ深まるであろう「自己内対話」による科学的な思考力・表現力の高まりについて考えていく。

### (2) 対話と思考力・表現力について

#### ① 対話による思考力の向上

小野田亮介(2014)は、根拠に基づく対話の重要性について、『「自分の考えの根拠」と「他者の考えの根拠」とを比べられるところにある』と述べ、さらに「根拠という比較のポイントがあるからこそ、子どもは自分と他者がなぜ異なる考えを持つのかについて思考を深めることができる」と説明している。つまり、根拠について語り合うことは、他者の考えについて良く理解するためでもあるが、自分の

考えについて振り返り、より考えを深めていく活動でもあると考える。

② 「ズレ」が生み出す対話

話し合う必要性を生み出す一つの視点として、「ズレ」という考え方がある。ズレという言葉は、一般的には良いイメージの言葉ではないが、「ズレ」を追究していくことで感性や認識を深めていくという考え方がある。

福島県教育センター提供資料（「言語活動の充実」のために－「思考力・判断力・表現力等」の育成をめざして－資料編）によると、『「ズレ」を明確にした上で、それを中心に話し合わせるとよい。相違点を明らかにし、それぞれにその根拠を説明させ、正しいか否かを検討し合うことで、ズレを修正しようと、あるいはそのズレの基を探ろうと、話し合いは進んでいく』とある（表3）。

表3 話し合う必要性を生み出す「ズレ」

○「イメージ」とのズレ	○「感覚」とのズレ
○「生活経験」とのズレ	○「既習内容」とのズレ
○「予想」とのズレ	○「友達」とのズレ 等

授業で対話を取り入れるからには「必要性」を持たせることが重要になる。対話を活発にし、科学的な思考力・表現力をはぐくんでいくために、子ども達に「ズレ」を感じさせる仕掛けを講じていきたい。

本研究で扱う、定型文やイメージ図の活用による、思考の「言語化」や「可視化」は子ども達に「ズレ」を感じるためにも有効な手だてになると考えられる。

(3) 対話を活性化するコミュニケーションボードの活用について

① コミュニケーションボードとは

もともとは、知的障害や自閉症などといった障害者や高齢者、病気療養中の方、外国人など、話し言葉によるコミュニケーションが困難な人とのコミュニケーションツールとして使われ始めた。文字での説明に加えて、絵や図での表現をすることによって、コミュニケーションの補助的ツールとして大きな役割を果たしている。

理科の学習においては、文字という言葉による理解だけではなく、絵や図で表現し、イ

メージとして理解することも重要である。よって、話し言葉によるコミュニケーションに障壁が有る無しに関わらず、絵や図を用いて、コミュニケーションボードに表し、「ズレ」を出発点として対話をするのが、思考を深め表現を見直す手だてとして有効にはたらくものと考えられる。

ボードの種類としては、使用する場面や対象者、目的等に応じて様々な物が活用されている。本研究においては、児童に、「安心してかき込み表現してほしい」というねらいから、A3サイズのホワイトボードをコミュニケーションボードとして使用することとする（図5）。

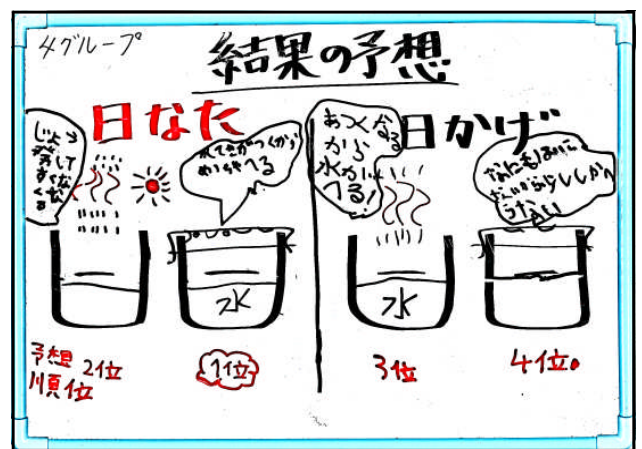


図5 使用したコミュニケーションボード

② 理科授業におけるコミュニケーションボードの活用の仕方

まず、コミュニケーションボードを活用し、対話を活性化させるために必要な前提条件として、「個の考えを持たせてから使用する」ということが考えられる。積極的にリードする子がどんどん進め、グループのイメージ図を完成させてしまえば、必要とする「対話」は生まれない。考えの「ズレ」を感じさせ、必然的に対話が広がり深まっていく展開を求めていくことが重要である。

次に、コミュニケーションボードに表すべき内容について視点を明確にする必要がある。そのために「基本となる実験器具などの図」は、あらかじめ教師で作図したものを準備することが考えられる。また、本時のねらいに則した「学習キーワード」を児童から引き出し、焦点化することも有効であると考えられる。

その他の留意点として、使用ルールの設定が

大切になると考えられる。全員の意見や考えが一枚のコミュニケーションボードに反映され、考察となる絵や図が深まっていくように、ルールを確認し使用する（表4）。

表4 コミュニケーションボード使用ルール

<p>【コミュニケーションボード使用のルール】</p> <p>①ボードは、グループ全員の真ん中に置く。</p> <p>②全員がマーカーを持ち、いつでも発言できる。</p> <p>③何度かき直してもよい。</p> <p>④絵や図だけでなく、言葉の説明も工夫する。</p> <p>⑤全員の考えの良さが、表現できるようにする。</p> <p>⑥全員が理解し、誰でも説明できるようにする。</p>
--

3 イメージ図と定型文の活用について

(1) イメージ図を活用することの意義

教師用指導書（資料編）では、「子どもは、一つの事象を目にしたとき、さまざまな気づきや考えを持つが、子ども達が考えていること、想像していることをイメージ図として表現させると、同じような言葉で表現していた子ども達が、いろいろなイメージ図を基に説明し始めるようになる」と述べられている。

図6～図8は、いずれも「空気をおし縮め、体積が小さくなったときのようす」についてのイメージ図であるが、このような「ズレ」を感じた時にこそ対話の必然性が生じるものとする。そしてお互いの考えのズレの部分を問題とし、他者と対話することによって、自分のイメージの良さや矛盾点に気づくことができる。その結果として、再び自己内対話が生まれ、自分の考えを見直すきっかけになるものとする。そういう対話をくり返すことを通して、子ども達に科学的な思考力・表現力をはぐくむことができるものとする。

また、イメージ図は教師にとっての評価材料としても役立つことができる。イメージ図に表すことは、本来見えないものである「児童の思考のようす」を可視化することといえる。そのことは、児童の思考の過程や変容を見取る材料にもなる。科学的な思考力・表現力についての診断的評価・形成的評価・総括的評価に生かし、指導と評価の一体化という観点でも活用していきたい。

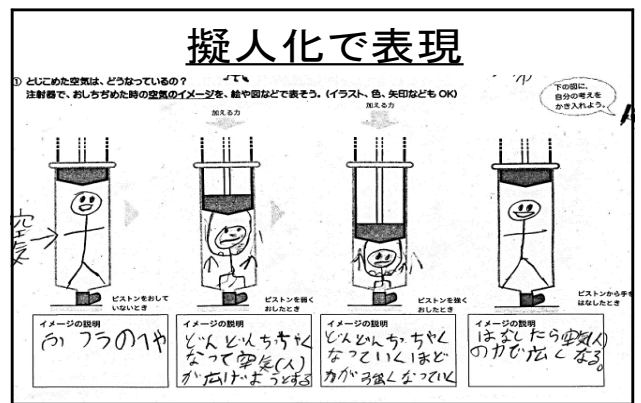


図6 空気のイメージ図（擬人化タイプ）

図6をかいた児童は、空気の体積が小さくなるほど、空気がおし返してくる「手ごたえ」が大きくなることを関係づけて捉えている。

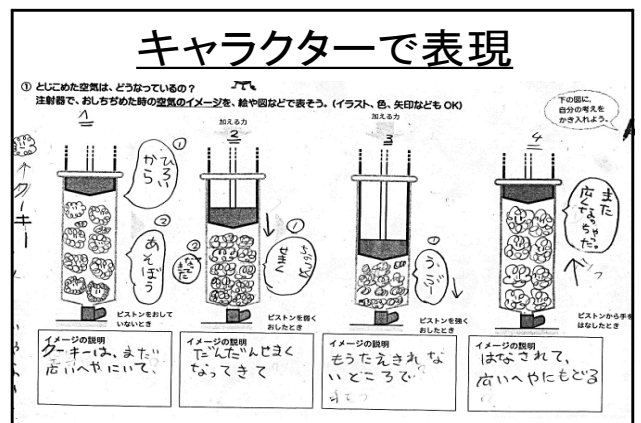


図7 空気のイメージ図（キャラクタータイプ）

図7をかいた児童は、キャラクターを小さくかいたことで、空気をおし縮めたときの空気の体積が小さくなるようすを捉えていることを見取ることができる。

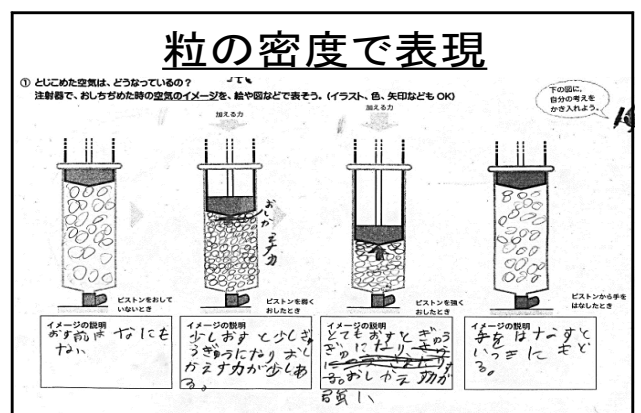


図8 空気のイメージ図（密度タイプ）

図8をかいた児童は粒の密度の変化で表現しているが、気密性の観点からは、粒の数を変えない方が科学的であることに気づかせる必要がある。

(2) イメージ図に表すための手立てについて

教師が「イメージ図をかきましよう」といつてすぐにかくことができる児童は少数と思われる。頭の中にイメージを持っていたとしても、どうかいていいかわからないこともあるだろうし、そもそもイメージ自体が持てていない場合も考えられる。ここでは、児童がイメージしたことを図に表現していくための手だてについて考える。

① 学習キーワードの活用

イメージ図やその説明に表すべき事項として、科学的な用語「学習キーワード」を確認し、思考の視点を明確にする。学習キーワードは、できるだけ児童から引きだし、ワークシートに書き込ませ、常に意識できるようにする。

② グループ交流

友達のかいたイメージ図を見たり説明を聞いたりしながら、自分の考えに最も近い図や絵を参考にすることを認める。

③ ふきだし法や矢印の活用

イメージ図にふきだしや矢印を使った説明をかきこませることで、他者に対し、より伝わるように工夫させる。

④ その他の留意点として

(新しい理科教師用指導書資料編参考)

ア 無理にかかせず、絵や図で表すことが有効だと感じたらかくようにさせる。

イ イメージ図は言葉を補助したり、言葉によって補助されたりするものと捉えるように指導し、図に執着させすぎないようにする。絵や図で表現したものを言葉でも説明できるように指導する。

ウ 例えば、粒子の考えや、質量の保存性など、科学的な視点のあるものを紹介するなど教師が価値づけし、児童の表現が、より科学的になっていくよう支援する。

エ 実験結果では、結果のスケッチ（見たまま）をかかせ、考察では、見えないものを含めたイメージ図をかかせる。

オ 学習シートをファイリングし、学習履歴として使うことで、前時までの既習事項を振り返りながら考えるなどの思考の連続性をもたせる。

(3) 定型文を活用する意義について

小学校理科教育においては、実験や観察をする際、何を目的として、どのような方法で行うのか、また、得られた結果についてどのように考察していくのかを、しっかりと見通しを持って行うことが重要視されている。しかし、実際に予想や仮説を示したり、実験の結果を述べたり、考察を説明したりする場面では、「結果の記述に自分の考えが混在」「結果と考察の区別がついていない」「結論の記述に主語が入っていない」「単語での記述で文章になっていない」などの課題が多く見られる。そこで、理科授業における言語環境を整え、児童がきちんとした文章で表現できるように、手だての一つとして「定型文の活用による思考の言語化」が有効であると考えられる。

① 思考の言語化

予想や考察の場面では、定型文を示すことにより、「何を根拠として書けばよいのか」など、視点を持たせ児童の思考を促すとともに、スムーズな言語化により適切に表現することができるように考える。

また、思考の言語化は、学習内容に対する「納得」にも資すると思われる。それは、実験の結果得られた情報について、しっかりと形での考察文でまとめることにより、児童の中におとし込む「実感」につなげることができるからである。

② 科学的に思考・表現する素地づくり

予想場面、結果確認場面、考察場面など、問題解決それぞれの場面に応じた定型文を示すことにより、問題解決のプロセスを身につけるとともに、根拠を示す表現を身につけ、科学的に思考し表現する素地づくりに役立つと考える。

(4) 定型文の活用法について

① イメージ図との連動

実験結果の考察をする場面では、定型文による言語化とイメージ図による可視化に取り組ませる。前述したように、イメージ図は言葉を補助し、言葉によって補助されるものと捉える。定型文で言語化した文章に連動したイメージ図をかかせることで、表現力を高め、他者へわかりやすく伝える工夫をさせる。

② 理科定型文の掲示（言語環境整備）

那覇市立教育研究所の玉村かおり指導主事（2012）作成の文例を参考に、発達段階や場面ごとの定型文を作成し表にまとめた（表5）。

③ 定型文活用の留意点として

- ア 学習キーワードを使用させる。
- イ 発達段階に応じた定型文を示し、思考の誘導にならないようにする。
- ウ 教室に掲示し、必要に応じて活用するように助言する（定型文にこだわらせすぎないように配慮し、自分の言葉や感性で表現していけるように指導する）。

表5 理科定型文活用表

学年		予想	結果	考察
3年生	比較	～をしたら、～は～になると 思います。なぜかという (生活経験から)～だからです。	【比べながら】 aとbを比べると、 aは～なのに対して、 bは～でした。	予想通り(予想とちがって)、 aはbよりも～だったので、 ～とわかりました。【結論】
4年生	関係づけ	【自分の立場を明確にして】 ～になると思います。 なぜなら(既習、生活経験から)	【関係づけながら】 ～(操作)をしたら、 ～になりました。(結果)	予想通り(予想とちがって)、 ～(操作)をしたら、 ～になりました。(結果) このことから～ということが わかりました。【結論】
5年生	条件制御	～になると思います。 なぜなら(既習、生活経験から) ～だからです。	【関係づけながら】 ～(操作)をしたら、 ～になりました。(結果)	予想通り(予想とちがって)、 ～(操作)をしたら、 ～になりました。(結果) このことから～ということが わかりました。【結論】 【結論】になったわけは、 (根拠)だからです。
6年生	推論	【自分の立場を明確にして】 ～になると思います。 なぜなら(既習、生活経験から) ～だからです。	【関係づけながら】 ～(操作)をしたら、 ～になりました。(結果)	予想通り(予想とちがって)、 ～(操作)をしたら、 ～になりました。(結果) このことから～ということが わかりました。【結論】 【結論】になったわけは、 (根拠)だからです。

※根拠は、実験結果に基づいた理由(わけ)のレベルで捉える

VII 授業実践

第4学年 理科学習指導案

平成26年12月17日（水）5校時  
 牧港小学校 4年3組 30名  
 指導者 喜屋武 真史

1 単元名

「水のすがたとゆくえ」

2 単元の目標

水を熱したときのようすに興味をもち、水を熱すると水蒸気になることや冷やすと氷になることを温度と関係づけて調べたり、水面やしめった物から水が蒸発していることや空気中の水蒸気は水滴になって現れることを調べたりして、水は温度によって固体、液体、気体に状態が変化すること、水が氷になると体積がふえることなど、水の状態変化についての考えをもつことができるようにする。

3 単元について

(1) 教材観

本単元は、学習指導要領理科4学年の内容「A 物質・エネルギー (2)ウ 水は、温度によって水蒸気や氷に変わる。また、水が氷になると体積が増えること。」及び、「B 生命・地球 (3)イ 水は、水面や地面などから蒸発し、水蒸気になって空気中に含まれていくこと。また、空気中の水蒸気は、結露して再び水になって現れることがあること。」にあたるものである。

ここでは、水の性質について興味・関心を持って追究する活動を通して、水の状態変化と温度変化を関係づける能力を育てるとともに、それらについての理解を図り、水の性質についての見方や考え方もつことができるようにする。また、自然界の水の変化が起こる様子について興味・関心をもって追究する活動を通して、水と空気中に存在する水蒸気とを関係づける能力を育てるとともに、それらについての理解を図り、自然界の水の変化についての見方や考え方もつことができるようにすることがねらいである。

(2) 児童観

単元との関わりから児童の実態を見ると、児童は、夏場には水やお茶を冷やすために氷を用いたり、冬場には温めた水やお茶を飲んだり、水や氷、または湯を日常的に目にしたり利用したりしている。しかし、白い湯気を見て「水蒸気」と言ったりしている姿から、特に水蒸気や湯気、蒸発

などについては、言葉だけが先行し誤解や捉え違いも見られ、科学的に理解しているとは言い難い。また、水が100℃で沸騰し0℃で凍ることを知識として持っていて、固体、液体、気体の違いや、水がいつも決まった温度で変化することを実感を持って理解しているわけではない。

次に、本研究との関わりから児童の実態を見る。アンケートにより「理科で好きな活動」を問うと、「実験や観察」（約80％）に対し「結果などについて話し合うとき」（約28％）となっている。「考えや意見を説明することができますか」の問いに対しても、「あまりできない、できない」の合計が58％にもものぼり、自分の考えを言語化し伝えることに対し、苦手意識を持っている児童が多いといえる。ペアやグループでの話し合いでは、友達の意見を聞くことを好む児童が多い反面、積極的に意見や考えを伝えることができる児童は限られている。また、意見が言える児童も「自分の意見や考えを一方向的に伝える」ととどまっている場合が多く、考えながら聞いたり、質問し合ったりという「対話」には発展しないケースが多い。本単元では、気体になった水蒸気が目に見えない物であることから、目には見えないものを図に表したりするイメージ化も、「ズレ」を生み出し対話を活発にする上でも重要となってくるが、これまでの学習の様子から、「絵や図に表し思考する」ということも習慣化はしていないというのが実態である。

### (3) 指導観

指導にあたっては、まず単元導入において、児童の生活経験を引き出し学習問題と結びつけていく。水を熱したときの温度変化と水の様子について調べる場面においては、温度変化をグラフ化しながら、水はおよそ100℃で沸騰し、沸騰中は水の温度が一定であることを捉えさせる。沸騰中の様子を見て湯気や泡について着目する児童がいると考えられるので、湯気の正体と泡の正体を探る実験を行う。これらの実験を通して、水蒸気の内容念を持たせていく。しかし、水蒸気や湯気、泡などに対する児童の見方や考え方には、捉え違いが起きやすいので、実験後に言葉やイメージ図などで表現させ、交流させる活動を設定し、一人ひとりの見方や考え方を確実なものにしていきたい。

水を冷やした時の温度変化と水の様子について調べる場面においても、温度変化をグラフ化し、凝固中は水の温度が一定であることを捉えさせる。同時に水が氷になると体積が大きくなることも実験を通して理解させる。

水の自然蒸発を扱う場面においては、水が自然に蒸発する現象を通して、水は沸騰しなくても表面から水蒸気となって空気中に出て行くことを確認する。また、生活経験から日なたと日かげでの自然蒸発の違いについても着目させる。

水の結露を扱う場面においては、冷やした飲み物の容器につく水滴を提示し、結露について考えさせる。温度が異なる水を入れた二つのビーカーの表面を観察し、既習事項を使って現象の説明ができるようにする。

単元を通して様々な実験器具を取り扱うことになるので、事前に操作方法を確認する。特に単元前半では加熱器具を扱う実験が多いので、安全への配慮を怠らないようにする。

## 4 単元の評価規準

自然事象への 関心・意欲・態度	科学的な思考・表現	観察・実験の技能	自然事象についての 知識・理解
① 水を熱したり冷やしたりしたときの現象に興味や関心をもち、進んでそれらの性質を調べようとしている。 ② 水が蒸発する様子に興味や関心を持ち進んで自然界の水の変化を調べようとしている。また自然界の水の変化について見いだしたきまりで日常生活を見直そうとしている。	① 水蒸気や氷に姿を変える水の状態変化と温度を関係づけて、それらについて予想や仮説をもったり考察したりし、自分の考えを表現している。 ② 蒸発や結露によって姿を変える水の状態変化と気温を関係づけて考え、予想や仮説をもったり考察したりし、自分の考えを表現している。	① 加熱器具などを安全に操作し、水の状態変化を調べ、その過程や結果を記録している。 ② 水の状態変化を定点で観測したり、自然蒸発や結露などの現象を観察したりして、その過程や結果を記録している。	① 水は、温度によって水蒸気や氷に姿を変えることや、水が氷になると体積が増えることを理解している。 ② 水は、水面や地面などから蒸発し、水蒸気になって空気中に含まれていくことや、空気中の水蒸気は、結露して再び水になって現れることがあることを理解している。

## 5 単元の系統性

### 3年 太陽の光を調べよう

○地面は太陽によって暖められ、日なたと日かげでは地面の暖かさや湿り気に違いがあること。

### 9 物の体積と温度

○金属、水及び空気は、温めたり冷やしたりすると、その体積が変わること。

### 【本単元】

●水は、温度によって水蒸気や水に変わる。また、水が氷になると体積が増えること。  
●水は、水面や地面などから蒸発し、水蒸気になって空気中に含まれていくこと。また、空気中の水蒸気は、結露して再び水になって現れることがあること。

### 発展的な学習内容

☆自然のなかの水のすがた  
☆霜をつくる

### 5年 物のとけ方

○物が水に溶ける量は水の温度や量、溶ける物によって違うこと。また、この性質を利用して、溶けている物を取り出すことができること。

### 中学校(1分野1年)

(4) 身の回りの物質  
ウ 状態変化

## 6 指導計画

時	ねらい	学習活動	評価の観点と方法
<b>第1次 水を熱するとどうなるか</b>			
1	水は、身のまわりにさまざまなすがたで存在していることに興味をもち、熱したり冷やしたりしたときの水のすがたについて、生活経験や既習事項などをもとに考えることができる。	・水を熱したときのようにして、知っていることをまとめる。	<b>関意態①</b> 水を熱したときのようにに興味をもち、進んで調べようとしている。 〔発言・行動観察〕
2	加熱器具を安全に正しく使い、水を熱したときのように温度の変わり方を調べ、グラフにまとめることができる。	・水を熱したときのように温度の変わり方を調べ、グラフにまとめる。(実験①)	<b>技能①</b> 加熱器具を正しく安全に使用して、水を熱したときのように温度の変化を調べ、結果を記録している。 〔行動観察・記録〕
3			
4	水を熱したときに出てくる湯気や、水が沸騰しているときに出てくる泡に興味をもち、加熱器具を安全に正しく使いながら、それらの正体を進んで調べることができる。	・水を熱して、湯気や泡の正体について調べる。 (実験②③)	<b>思表①</b> 実験結果をもとに、湯気や泡の正体について考察し、自分の考えを表現している。 〔発言・記録〕
5			
6	水を熱したときに出てくる湯気や泡について調べた結果から、水を熱したときの変化と水のゆくえについて考え、水は熱せられると湯気や目に見えない水蒸気(気体)になるということをとらえることができる。	・水を熱したときの変化をまとめる。	<b>知理①</b> 水は、熱し続けると約100℃で沸騰して、水蒸気になることを理解している。 〔発言・記録〕
<b>第2次 水は冷やされるとどうなるか</b>			
7	水を冷やすと、水はどうなるかに興味をもち、水を冷やしたときの温度変化や水のすがたの変化、体積の変化について、進んで調べることができる。	・水を冷やしたときのように氷になるときの温度と体積の変化を調べ、グラフにまとめる。(実験④)	<b>技能②</b> 温度計を正しく使って、水が氷になるときの温度と体積の変化を調べ、記録している。〔行動観察・記録〕  <b>知理②</b> 水は冷やされると0℃でこおり始め、水が氷になると体積がふえることを理解している。 〔発言・記録〕
8			
9	水をあたためたり、冷やしたりしたとき、固体、液体、気体と状態が変化するきまりを、温度と関係づけて考察し、表現することができる。	・温度による水のすがたの変化についてまとめる。	<b>思表②</b> 水を温めたり、冷やしたりしたとき、固体、液体、気体と状態が変化するきまりを、温度と関係づけて考察し、表現している。 〔発言・記録〕



第3次 水たまりの水はどこへいったのか			
10	水が自然に蒸発して、水たまりの水がなくなったり、洗たく物が乾いたりする現象に興味をもち、生活経験などから、自然界の水のゆくえを予想し、進んで調べることができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>水たまりの水のゆくへについて考え、入れ物に水を入れて、おおいをした物としない物で蒸発実験を行う。(実験⑤)</li> </ul>	<b>関意態②</b> 水たまりや、洗たく物などにふくまれている水のゆくえについて興味をもち、進んで予想したり、調べたりしようとしている。 [発言・行動観察]
11 【本時】	実験結果から、水は沸騰しなくても蒸発するかどうかを考え、水は自然に蒸発すること、日なたほど蒸発しやすいことをまとめることができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>水が空気中に出ていくようすをイメージ図に表現し、話し合う。</li> <li>水は空気中に出ていくことをまとめる。</li> </ul>	<b>思表③</b> おおいをしない入れ物の水がなくなっている実験結果から、水は熱しなくても空気中に出て行っていることを説明している。 [発言・記録]
第4次 水じょう気は水にもどせるのか			
12	空気中の水蒸気の水にもどすことができるかどうかに興味をもち、冷やした物の表面に水滴がつくことを調べ、空気中の水蒸気が冷やされると水にもどることをまとめることができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>空気中の水蒸気は水にもどることを調べ、まとめる。(実験⑥)</li> </ul>	<b>思表④</b> 空気中の水蒸気は冷やされると、液体の水になって、とり出せることを実験結果から考察し、自分の考えを表現している。 [発言・記録]
13	イメージ図や模型などを活用して、自然界の水がどのようなすがたで循環しているかを説明することができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>自然の中の水のすがたについてまとめる。</li> </ul>	<b>関意態③</b> 自然界の中で水がどのようなすがたで循環しているのかに興味を持ち、自分の考えを説明しようとしている。 [発言・行動観察]
14	これまでの学習をふり返って、水のすがたとゆくえについて、まとめることができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>水のすがたの変化について、学習したことをまとめる。</li> </ul>	<b>知理③</b> 水は水面や地面などから蒸発し、水蒸気になって空気中にふくまれていることや、空気中の水蒸気は水になってとり出せることを理解している。 [発言・記録]

## 7 本時の学習 【11/14時間】



### (1) 目標

水は熱しなくても、自然蒸発することや、日なたほど蒸発しやすいことを、実験結果と関係づけて考え、表現する。

### (2) 本時の授業の工夫

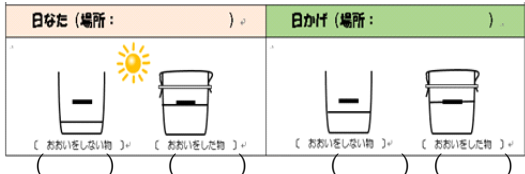
実験結果について考察させる場において、結果からわかったことを定型文を活用し言語化させるとともにイメージ図に表現させる。それを基にコミュニケーションボードで考えの交流をさせることにより、自己の考えや表現を深めさせる。

### (3) 展開

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	評価項目(方法)
導 入 (5) 分	1 前時の確認をする。 (1) 実験方法のふり返り。 (2) 「問題」の確認。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">問題：水は、ふつとくしなくても、じょう発するのだろうか？</div> (3) 予想のふり返り。 (4) 実験用コップを設置場所から理科室へ運ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> <li>画像で問題解決の前段をふり返る。(実験の目的を再確認する)</li> <li>グループ話し合った予想をふり返らせる。</li> <li>水滴などをよく観察するために、ゆっくり運ばせる。(設置場所が遠い場合は、前もって理科室へ運んでおく。)</li> </ul>	 

<p>展 開  ( 3 5 ) 分</p>	<p>2 実験結果を確認する。 (1) 結果をスケッチし、水のようすを確認する。  (2) 全体で実験結果を確認し、言葉で整理する。 3 結果の考察をする。 (1) 考察文をかき、グループで交流する。  (2) わかったことをイメージ図に表現する。〔個人〕  (3) コミュニケーションボードでグループの考察としてまとめる。  4 全体で考察の共有をする。 (1) 仕上がったグループから前面にはる。 (2) 1～2人発表する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・見間違えないよう順番良くコップを並べさせる。</li> <li>・結果の図は見たままを記録させる。</li> <li>・さかんにじょう発した順位も確認する。(全グループの結果を確認する。)</li> <li>・結果から見取れることを言葉でも記録させる。</li> <li>・結果と関係づけた考察をさせる。〔定型文活用〕</li> <li>・学習キーワードを確認し、視点を与える。</li> <li>・交流後の直しには、赤ペンを使わせる。</li> <li>・グループでまとめることを予告する。</li> <li>・考察したことやキーワードを意識させる。</li> <li>・グループの真ん中に置くこと。</li> <li>・かきながら説明したりし、みんなが納得したものを残していくこと。</li> <li>・みんなの良いところが集まるようにする。</li> <li>・誰でも説明できるようにすること。</li> <li>・実物投影機等を使い、発表させる。</li> </ul> 	<p>【思考・表現】 〔発言・学習汴〕 <b>(十分満足)</b> おいをしない入れ物の水がなくなっている実験結果や日常生活での経験などから、水は空気中に出ていくことを、イメージ図や具体例を用いて説明している。 <b>(概ね満足)</b> おいをしない入れ物の水がなくなっている実験結果から、水は熱しなくても空気中に出ていっていることを説明している。 <b>〔概ね満足に至らない場合の支援〕</b> ラップシートをした物としていない物を比較させ、どちらの水も自然蒸発しようとしている共通性と、空気中に出ることが可能かどうかの違いを確認させる。</p>
<p>ま と め ( 5 ) 分</p>	<p>5 考察したことを基に、結論(まとめ)をかく。 6 日常生活で、温度と蒸発に関係することを考えさせる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童の言葉を引き出し、まとめるようにする。</li> <li>〔蒸発を早める工夫〕</li> <li>・洗濯物を早く乾かすには、どんな日にどのような場所に干すと良いか。</li> <li>〔蒸発を防ぐ工夫〕</li> <li>・水そうを置く場所は、どんなところが良いか。</li> </ul>	

(4) 板書計画

<p><b>問題</b></p>	<p>水は、ふっとうしなくても、じょう発するのだろうか？</p>	<p>キーワード</p>							
<p>実験結果</p>	<p>水じょう気, じょう発, 水てき</p>								
	<p>考察 ～(結果),このことから～とわかった。(結ろん)</p>								
<p>① おおいをしない物は、だいぶ水がへった。 ② おおいをした物は、ほとんどへっていない。 ③ 日なたのおおいの内側には、たくさんの水てきがついた。</p>	<table border="1"> <tr> <td>コミュニケーションボード ①</td> <td>コミュニケーションボード ②</td> <td>コミュニケーションボード ③</td> <td>コミュニケーションボード ④</td> </tr> <tr> <td>コミュニケーションボード ⑤</td> <td>コミュニケーションボード ⑥</td> <td>コミュニケーションボード ⑦</td> <td>コミュニケーションボード ⑧</td> </tr> </table>	コミュニケーションボード ①	コミュニケーションボード ②	コミュニケーションボード ③	コミュニケーションボード ④	コミュニケーションボード ⑤	コミュニケーションボード ⑥	コミュニケーションボード ⑦	コミュニケーションボード ⑧
コミュニケーションボード ①	コミュニケーションボード ②	コミュニケーションボード ③	コミュニケーションボード ④						
コミュニケーションボード ⑤	コミュニケーションボード ⑥	コミュニケーションボード ⑦	コミュニケーションボード ⑧						
<p>結ろん</p> <p>① 水は、ふっとうしなくても、(表面から)じょう発する。 ② 水は、温められると早くじょう発する。</p>									

## VIII 研究の考察

### 1 作業仮説(1)の検証

問題解決の学習過程において、学習シートと定型文を活用し、考える視点を明確にすることで、自己の考えを言語化できるであろう。

#### (1) 学習シートの工夫について

##### ① 手だて

問題解決の流れに沿った板書と同様の形式の学習シートを活用することで、パターン化した学習過程ごとに、考える視点を明確にしながら取り組めるようにする(図9)。

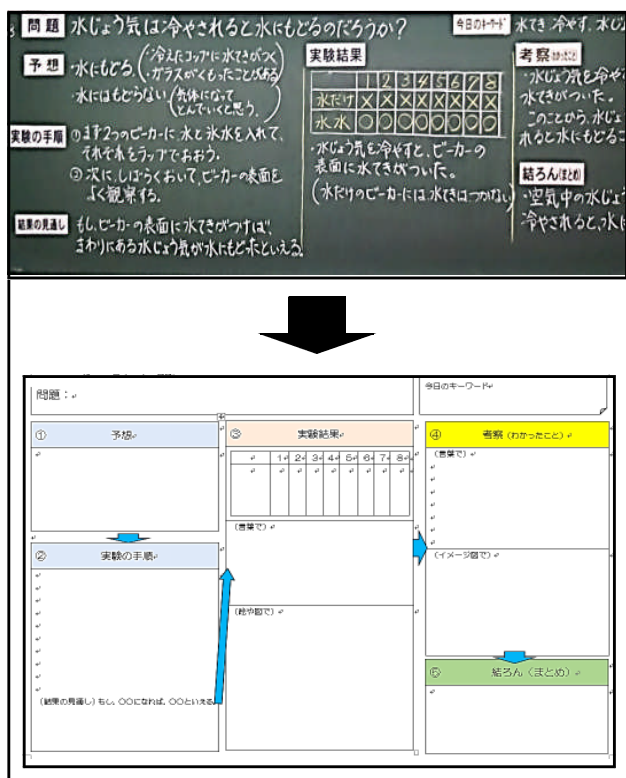


図9 問題解決の流れに沿った板書と同じレイアウトの学習シート

##### ② 結果

理科の授業に関するアンケートによる児童の意識調査の結果を見ると、「学習シートを使うと、実験(学習)の流れがわかりやすいと思うか?」という問題解決過程の見通しに関する設問に対し、90%の児童が肯定的に回答している。また、「思わない」と回答した児童はいなかった(図10)。

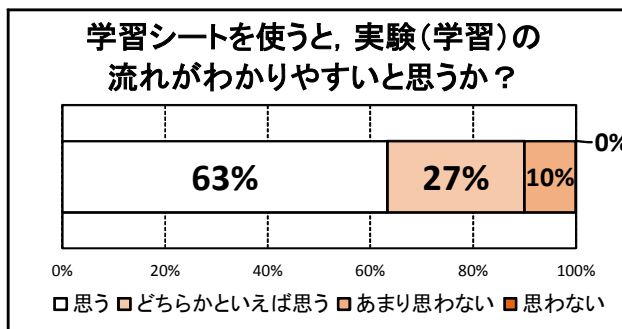


図10 学習シートと学習過程の理解に関する調査 [N=29]

また、本研究においては、板書と同様の形式の学習シートにしたが、「学習シートを使うと、黒板に書いてあることが理解しやすいと思うか?」という設問では、93%の児童が肯定的に回答している(図11)。

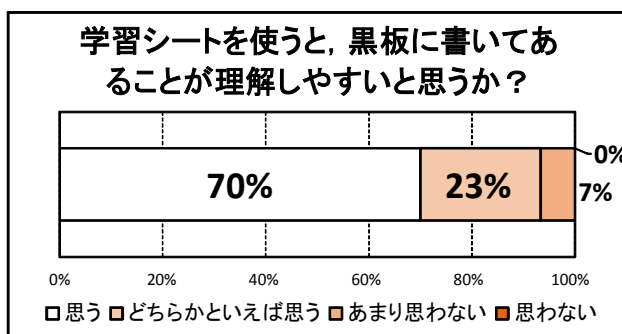


図11 学習シートと板書の理解に関する調査

学習シートを使用した児童の感想の中には、問題解決の学習過程や板書との関連において、肯定的な記述が多く見られた(表6)。

表6 学習シートに対する児童からの主な肯定的感想

#### 【学習の流れとの関連】

- 「理科の学習の流れ」(P&図3参照)と同じ流れだったから、わかりやすかった。
- 今から「何を書く」とかわかりやすい。

#### 【板書との関連】

- (市販の)ノートは、黒板と違うから、学習シートを使うとわかりやすい。
- ほとんど学習シートと(黒板が)よく似ていたからわかりやすかった。

##### ③ 考察

学習シートに関するアンケートの結果から、児童が学習シートを使うことに対し肯定的に考

えており、利便性を感じながら活用していることがわかる（図10, 11）。また、その理由として「『理科の学習の流れ』と同じだったから、わかりやすい」「今から『何を書く』とかわかりやすい」という児童の反応がある（表6）。このことから、児童は問題解決の過程において、学習シートを使うことによって学習の流れをつかみやすくなり、見通しを持って学習に取り組めたことがうかがえる。

また、板書との関連として「(市販の)ノートは黒板と違うから、学習シートを使うとわかりやすい」「ほとんど学習シートと(黒板が)よく似ていたからわかりやすかった」という反応もあった（表6）。これらの感想から、学習シートは、実験結果を確認したり全体の考えを集約したりする場面等で、板書と自分の記述を比べたりしながら学習を進めることに役立ったと見取ることができる。

以上のことから「学習シートの活用」は、思考のガイドラインとして機能したと見ることができ、学習活動の場面ごとに、考える視点を明確にすることにつながったといえる。

## (2) 定型文の活用について

### ① 手だて

学習過程ごとの定型文を作成し、掲示物を工夫し活用することにより、言語化による表現力の向上を図る（図12）。

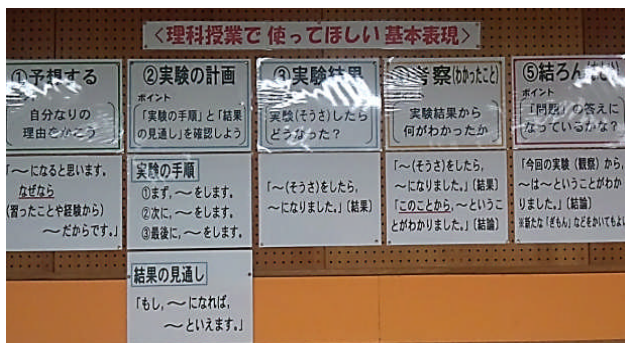


図12 教室に掲示した、理科的定型文

### ② 結果

まず、指導事前と事後で記述による表現力に変容が見られるか、同じ問題に対する記述の様子で比較した。既習事項である「温度変化による金属球の体積変化」について、実験の様子を示したイラストを見ながら、その実験結果と考察についての的確な記述ができるか

調査した。

図13では、児童Aの結果と考察の記述の変容を見ることができる。指導事前では、実験の結果と考察の区別がついておらず、逆の記述になっているが、事後では、「実験操作をした結果」や「実験結果を根拠とした考察」の記述ができています。

**問題1**  
ひびきさんは、下の図のように金ぞくをあたためたり冷やしたりして、体積の変わり方を調べる実験をしました。実験のようすをみて、この実験の結果と考察(わかったこと)をかきましょう。

**実験結果**  
金ぞくをあたためると、金ぞくの体積が大きくなった。冷やすと、元にもどった。(体積が小さくなった)

**考察(わかったこと)**  
金ぞくは、あたためると、輪をとおりぬけなくなり、冷やすと、通るようになった。

(事前) 結果と考察の記述が逆になっている

↓

**実験結果**  
球を熱すると、通りぬけなくなり、冷やすと通る。

**考察(わかったこと)**  
球を熱すると通りぬけなくなり、冷やすと通ることがわかり、このことから金ぞくを熱すると体積が大きくなり、冷やすと体積が小さくなることわかった。

(事後) 実験操作をした「結果」と結果を根拠とした「考察」が書けている

図13 児童Aの結果と考察についての記述変容の様子

図14は、上記同調査(記述による表現力の変容)について学級の結果をグラフ化したものである。

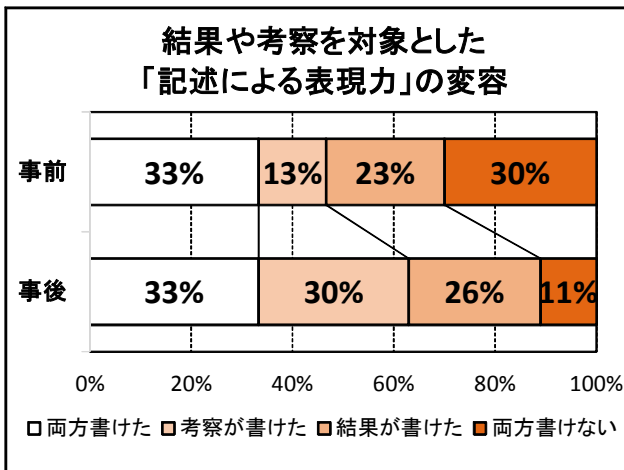


図14 「記述による表現力」の変容

両方書けた児童の割合には変化がなかったものの、結果か考察のどちらかがきちんと書けている児童が増加した。両方書けないという児童は減少した。

ここで、理科の授業に関するアンケートによる児童の意識調査の結果を見る。「基本表現（定型文）は、考えを書くのに役立ったか？」という設問に対し、87%の児童が「役立った」「どちらかといえば役立った」と肯定的に回答している。また、「役立たない」という回答はなかった（図15）。

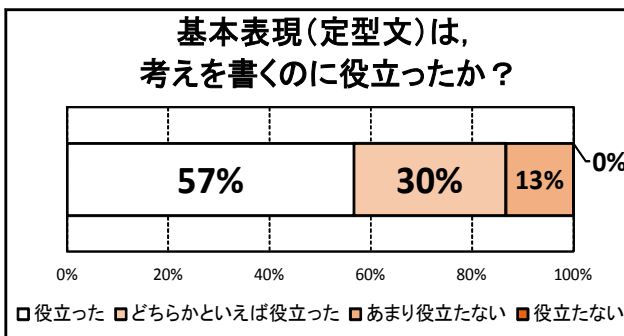


図15 定型文に対する意識調査

### ③ 考察

アンケートによる意識調査から、児童は理科的基本表現（定型文）を活用することに有用性を感じていることがわかる。また、定型文に当てはめることで、自分の考えを言語化し、まとめることに自信を持つ児童がふえた。また、その意識調査を裏付けるように、記述による表現力の調査においても、結果と考察を記述する力の向上が確認された（図13, 14）。

以上のことから、理科的定型文を活用するこ

とは、「何に注目して書けば良いのかという視点」を明確にする一助となり、児童が自分の考えを言語化することの手だてとして有効であることがわかった。

しかし、記述内容を分析する中で、定型文を指導したことにより、逆に迷いや難しさを感じている様子もうかがえた。また、児童の自由な発想や表現の妨げになるケースもあった。したがって、定型文に当てはめることよりも、「何を根拠（基）として書くのか」など、ポイントを理解させることの方が重要であると考えられる。

今後の指導としては、考えを言語化する力を段階的に身につけていけるように、例えば小単元1では教師と共に考え、小単元2では定型文の掲示物や前時までの自分の記述を見ながら考え、小単元3では自力で考えまとめるなど、単元を通して習熟を図る方法や、あるいは、年間を見通して徐々にスキルを上げていく方法が考えられる。

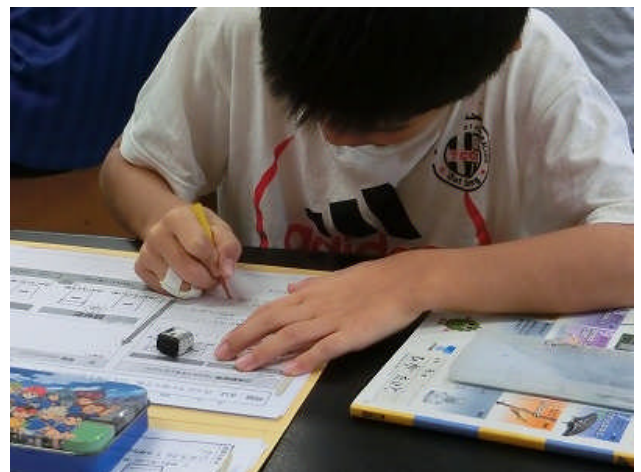


図16 定型文を参考に記述する児童の様子

## 2 作業仮説(2)の検証

考察の場において、結果から見いだしたことをイメージ図で可視化し、コミュニケーションボードで交流することによって、思考が深まり表現力が向上するであろう。

### (1) 考察におけるイメージの可視化について

#### ① 手だて

学習シートを工夫することで、結果から見いだしたことを考察文に書くとともに、

イメージ図でも表現することを習慣化する。

② 結果

理科の授業に関するアンケートによる児童の意識調査の結果を見ると、「絵や図に表すことで、自分の考えが深まると思えますか？」という設問では、肯定的に回答した児童数の合計が事前は69%だったのに対し、事後は83%まで増加した（図17）。

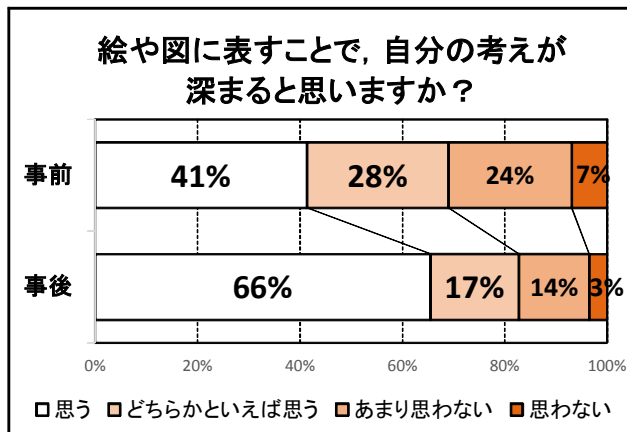


図17 イメージ図と思考についての意識調査

肯定的に変容した理由を問うと、「何か足りないと感じた時に、友達の絵が参考になる」（他者との対話における活用）、「吹き出しとかで、忘れていたことを思い出せる」「自分の考えたことを絵や図に表すと、見直せるから発見がある」（自己との対話における活用）、などと答えており、色々な場面で対話に生かされたことが述べられている（表7）。

表7 イメージ図と思考についての意識変容例（アンケート記述より）

絵や図に表すことで自分の考えが深まると思うか	
児童M（事前：思わない）	絵をかいても字がないとだめ。 →（事後：思う）何か足りないと感じた時に、友達の絵が参考になるから。
児童N（事前：思う）	絵にかくとわかりやすいから。 →（事後：思う）吹き出しとかで、忘れていたことを思い出せるから。
児童P（事前：思う）	絵や図に表すと、考えの意味が伝わりやすいから。 →（事後：思う）自分の考えたことを絵や図に表すと、見直せるから発見がある。

次に、児童のイメージ図での表現について変容を見る。図18は、本単元を通して、イメージ図の表現に変容が見られた児童Pの例である。単元の前半（第4時）と後半（第12時）では、表出したイメージの量や、矢印や言葉での補足の仕方に違いがあり、深化のようすがわかる。このような表現の変容は、一部の児童に限ることではなく全体的に見ることができた。

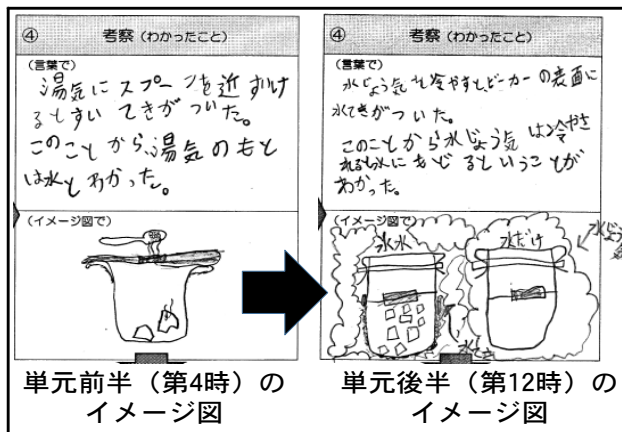


図18 児童Pの考察におけるイメージ図の変容

③ 考察

学習シートに考察を記述する際に、言葉での記述とともに「絵や図（イメージ図）」で表現するスペースを設けたことで、自然と絵や図に表現し考えることを習慣化することができた。また、「何を書いて良いか、すぐにイメージが持てない」という児童への手だての一つとして、学習シートの一角に「学習キーワード」を確認するコーナーを設けた。そうすることで、イメージ図に表すべき重要事項に焦点化でき、ポイントを押さえたイメージ図をかかせることにつながった（図19）。

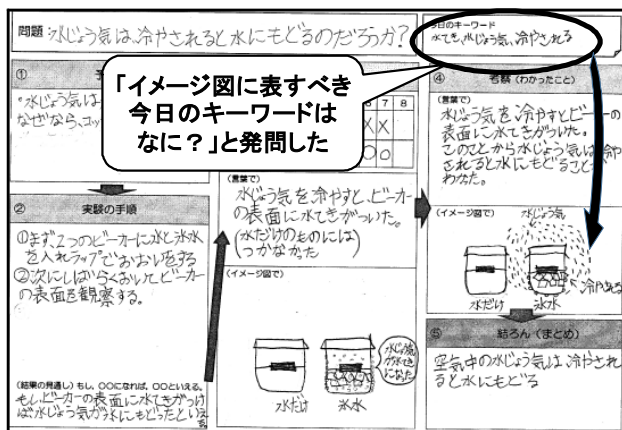


図19 学習キーワードで焦点化を図りイメージ図へ反映させる学習シート

図17のアンケートによる意識調査の結果に加え、児童からは「絵や図でかいたら、文が書きやすくなる」「自分や友達の考えがわかりやすくなる」「絵や図に表す自信がついた」などという感想も聞かれた。これらのことから、児童がイメージ図として絵や図に表現することに「よさ」を感じながら進んで取り組めたことがわかる。

次に、イメージ図と思考力・表現力の関係を考察する。図18に示した児童Pのように、児童のイメージ図は、回を重ねるごとに表現が豊かになった。これは、児童の言葉にも表れているが（表7）、自己との対話、他者との対話に有効に機能し、「児童の思考が深まった結果」と見ることができる。事実、図18のイメージ図をかいた児童Pは、表7に示されているように、事前には「絵や図に表すと、考えの意味が伝わりやすいから」と、他者との対話を意識した理由を述べているが、事後では、「自分の考えたことを絵や図に表すと、見直せるから発見がある」と、自己内対話にも有効であることについて言及している。

これらのことから、学習シートを工夫し、考察の場面において、「言葉」による表現（言語化）のみならず、「イメージ図」による表現（思考の可視化）でわかったことを整理していくこと、またそれを習慣化することは、児童の思考力を高め、表現力を向上させることに寄与したと結論づけることができる。

(2) コミュニケーションボードの活用について

① 手だて

自分の考えを持った上で、コミュニケーションボードを活用しグループで考えの交流を持つことで、進んで発言でき、思考のズレや優れた表現に気づくようにする。

② 結果

理科の授業に関するアンケートによる意識調査では、「コミュニケーションボードで、友達と考えを出し合ってまとめることが好きか？」という情意面を問う設問に対し、児童の93%が肯定的に回答している。また、「好きではない」という回答はなかった（図20）。

次に、「コミュニケーションボードを使うと、自分の考えを説明しやすいと思うか？」

という使用感についての設問でも、90%にあたる児童が、肯定的に回答している（図21）。

そして、「コミュニケーションボードは、考えを深めるのに役立ったか？」という思考することに対する有用感に関する設問においては97%もの児童が肯定的に回答した（図22）。

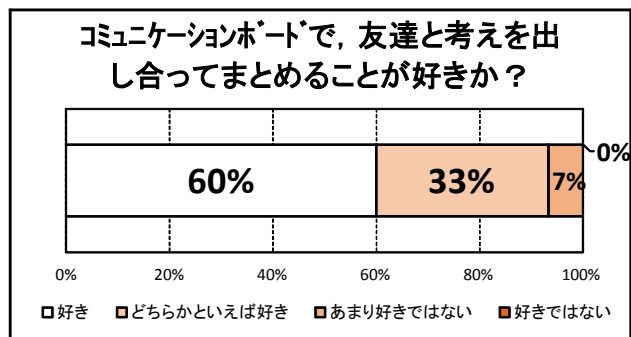


図20 コミュニケーションボードについての意識調査 (情意面)

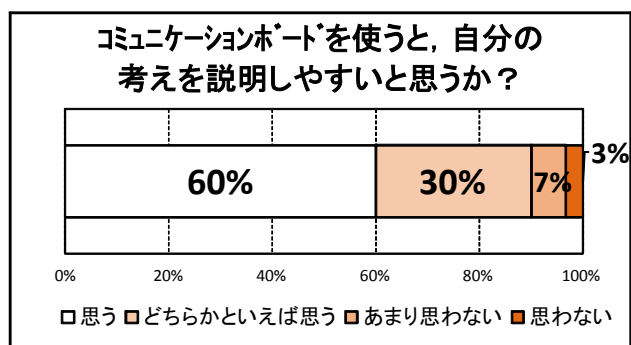


図21 コミュニケーションボードについての意識調査 (使用感)

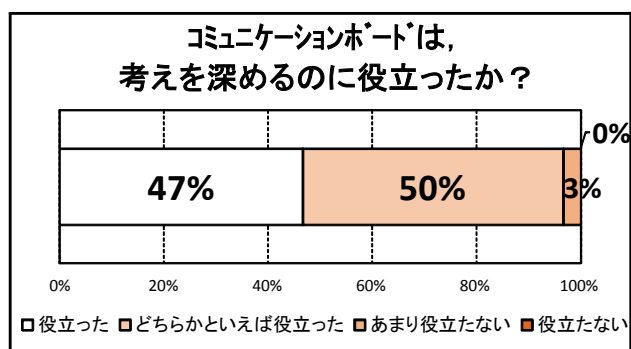


図22 コミュニケーションボードについての意識調査 (有用感)

図23-1は、小単元の確認として「水の三態変化」のようすについて、グループで対話をしながらコミュニケーションボードにまとめたものである。各自が考えを持った上で、話し合う展開にしたことで、一人ひとりが自由にかき表しながら説明す

るなど、考えを伝えようとする姿が見られた。

図23-2は、児童Kが「水の三態変化」について、自分の学習シートにイメージ図として表現したものである。グループ交流などを通して得た考えは、赤ペンを使用して加除修正するよう指示したので、思考の変容の様子を見取ることができる。児童Kのイメージ図では、コミュニケーションボードで考えの交流を持った後に表現内容の追加が見られたことから、グループでの対話によって思考の深まりがあり、新たな表現へと結びついたものであると捉えることができる。

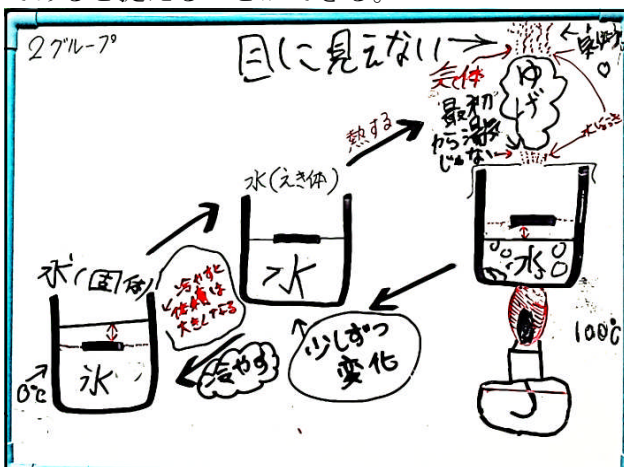


図23-1 コミュニケーションボードで交流しグループの考えとしてまとめたイメージ図

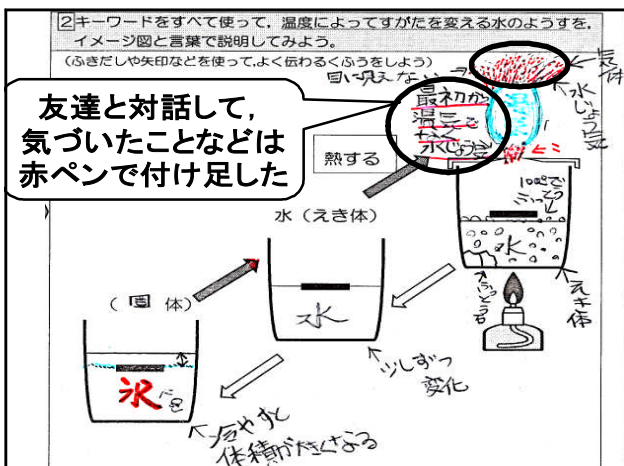


図23-2 コミュニケーションボード(図23-1)で交流後に表現内容を追加した児童Kのイメージ図

図24は、コミュニケーションボードを使うことで、児童の発言意欲に変容があるか検証した結果である。コミュニケーションボード未使用時(事前)と使用時(事後)の両方で、同じ評価基準を用いて、グループ活動での発言の様子から関心・意欲・態度として評価したものを比較した。

コミュニケーションボードを話し合いのツールとしたことで発言が増え、生活経験や既習内容を根拠として説明しようとする児童が増えたため、A評価やB評価が多くなり、C評価はほとんど見られなくなった。

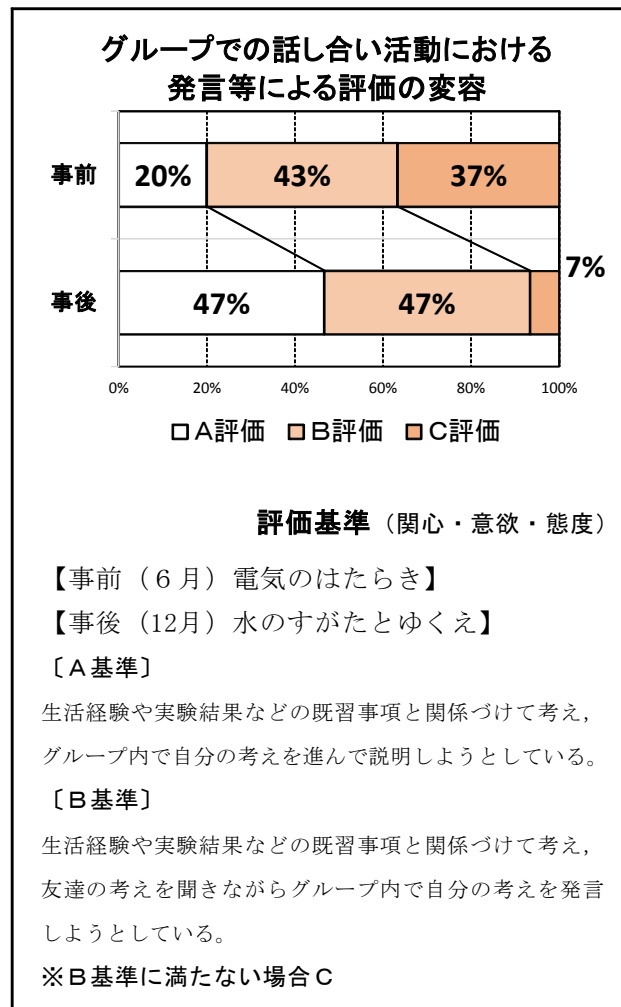


図24 コミュニケーションボード使用前後での発言意欲に対する評価の比較と評価基準

表8 児童の感想から見るコミュニケーションボードの有用性

【コミュニケーションボードを使った感想より】

- みんなの意見を一つに表せて便利だったし、コミュニケーションボードに表現するのが楽しかった。
- 自分の考えと友達の考えがちがっていて、「あーそうか!」と思うときがあった。また、使いたい。
- 自分の考えを説明しやすい。これからも使いたい。
- 友達が自分の考えのダメなところや良いところを教えてくれるから考えが深まると思う。

コミュニケーションボードを使用した児童の感想は、発言意欲の向上を裏付けている(表8)。



グループ全員で考えるのが楽しいと感じたものや、考えを話しやすいと感じたもの、または考えの違いがわかりやすいなど、全体の93%が肯定的で有用感を表したものであった。

### ③ 考察

アンケートによる児童の意識調査では、93%もの児童がコミュニケーションボードを使って話し合うことを肯定的に考えていることがわかった。また、使用した感想の言葉からも有用性を感じていることがうかがえた。実際に発言の様子を評価した結果からも、コミュニケーションボードを使わない場合（事前）と使った場合（事後）では、使った場合に関心・意欲・態度の評価が良くなったことなどから、コミュニケーションボードを使うと児童の発言意欲が向上すると結論づけることができる。

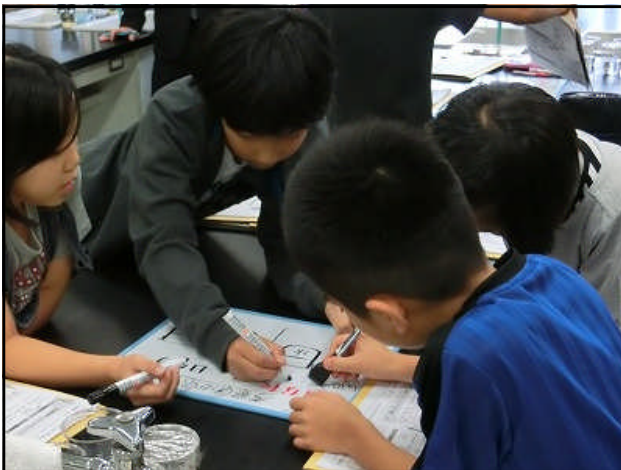


図25 イメージをかきながら説明する様子

また、他者との対話を通して自分の考えが変わったときには、赤ペンで加除修正したことによって自分の思考の変容にも気づくことができたものと考えられる。

図23-2児童Kのイメージ図からは、コミュニケーションボードを使ったグループでの対話によって気づきがあり、表現を追加した様子わかる。このことから、児童はコミュニケーションボードで対話などの交流を持ち、他者の考えを聞いたり自分の考えを説明したりすることで、自分の捉え違いや、気がつかなかったことに気がついたり、表現の仕方を学んだりできるということがわかった。

今回、コミュニケーションボードを活用するにあたり、全員にマーカーを持たせた（図25）。

そうすることで児童は、四隅から遠慮することなく表現することができた。さらに、コミュニケーションボードには、ビーカーなどの基本となる器具の図をあらかじめ油性マジックでかいておくという工夫をした。そうすることによって、児童の思考に必要な部分に焦点をあてることができると同時に、時間の確保にもつながった（図26）。

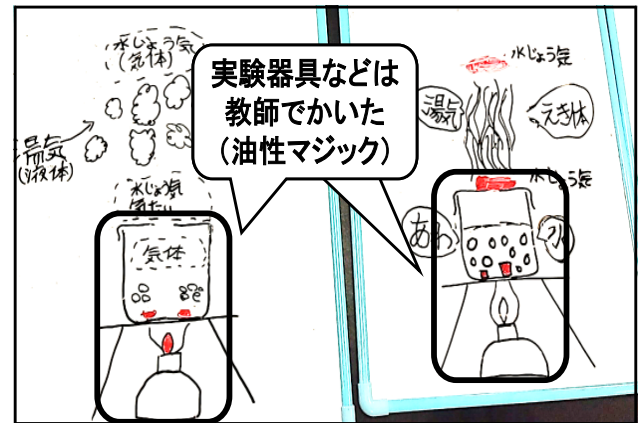


図26 図の基本となる実験器具などはあらかじめ教師でかいた（油性）

また、表現の修正をする時には、油性でかいた基本部分は消えないので、児童は安心して何度でも表現の見直しができた。そのように何度もイメージ図の修正をしながら、より可視化された思考を基に、「他者との対話」「自己内対話」を深め何度も検討を重ねることで、思考を整理することができた。また、思考したことを何度もかき表す活動を通して、表現力も高めることができた。

授業者にとっても、児童の表現の変容から思考の過程を見取ることができ、評価と指導の改善に役立てることもできた（図27）。



図27 コミュニケーションボードで可視化された思考を見取り指導と評価に活用する

課題としては、全体での共有があげられる。今回の授業では、A3サイズ程度のボードを使用した。黒板に提示した場合、教室全体を考えると十分な大きさとはいえなかった。そのため、全体での共有の場面では投影機で拡大する必要があった(図28)。

今後これらのことを解消する対応策として、タブレット端末等のICT機器の活用が考えられる。ICT機器をコミュニケーションのツールとし、対話を通して思考力・表現力を育む指導と、それを全体で共有していく方法等について継続し研究していきたい。

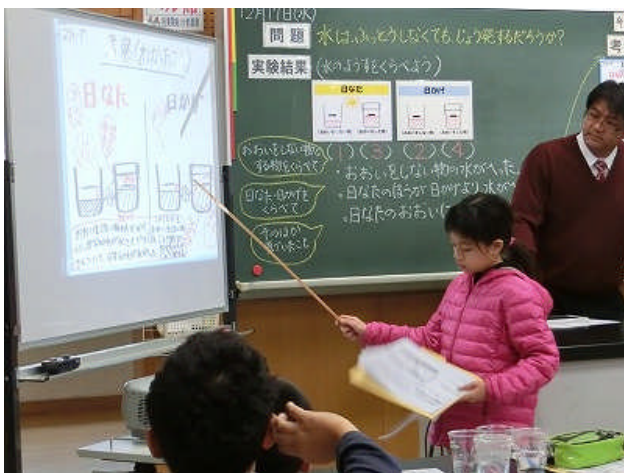


図28 タブレット端末とプロジェクタを活用しコミュニケーションボードを投影した様子

### 3 本研究を通して

本研究において目指してきた児童像は「自然事象について、根拠をもとにした対話をしながら、科学的に思考し表現できる児童」である。そのため、対話を促進する第一歩として、言語

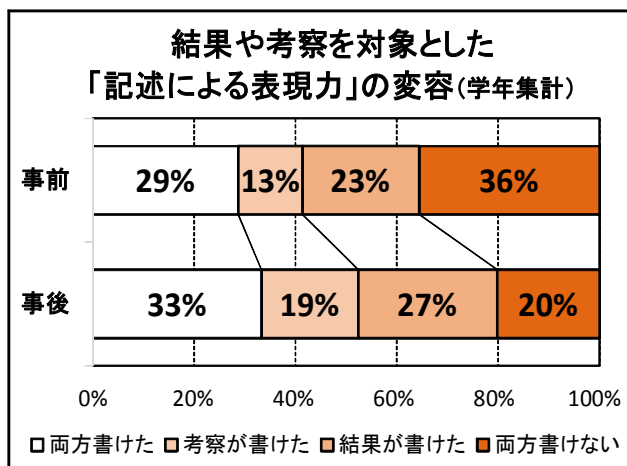


図29 記述による表現力の変容 [N=88 学年集計]

化による表現力の向上に取り組んだ。手だてとしての定型文活用は、学年の取り組みとして他学級にも同様の指導したが、やはり学年全体で見ても、言語化による表現力の向上は確認できた(図29)。

本研究を通して、児童は、自分の考えを定型文により言語化したり、イメージ図に可視化したりしたうえで、コミュニケーションボードを媒体として、対話活動を活発にすることができた。児童一人ひとりが、肩を寄せ合う中で、根拠を示しながら考えを相互に交流させる姿を多く見ることができた(図30)。



図30 肩を寄せ合い相談する本学級児童

図31のアンケートによる意識調査を見ると、本学級の児童は指導事前に比べ事後の方が「結果の考察を話し合う活動」や「まとめる活動」など、思考力・表現力を要する活動を好む人数が増えるという結果となった。このことは「本研究で試みた仮説が有効であった」ということを指し示すものであると考える。

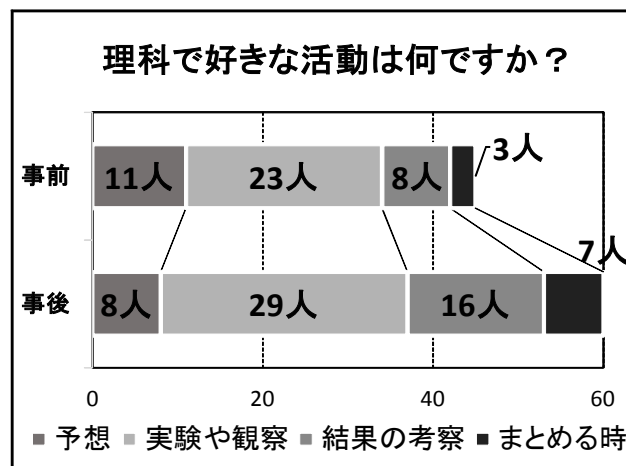


図31 理科の問題解決過程における好きな活動について(複数回答) [N=29]

## IX 研究の成果と課題

### 1 成果

- (1) 定型文を示したことで、考える視点を持つことができ、考察を書く場面などにおいて、言語化による表現力が向上した。
- (2) イメージ図に表現し考えることを習慣化することができ、科学的な思考力・表現力の向上につながった。
- (3) コミュニケーションボードで可視化された思考をもとに、「他者との対話」や「自己内対話」を何度も重ね、思考を深め整理することができた。また、思考したことを、くり返しかき表したことで、表現力も高めることができた。

### 2 課題

- (1) 定型文により、自由な発想や表現が妨げられた児童もいた。定型文に当てはめることよりも、「何を根拠として書くのか」という、ポイントの継続的な指導が重要である。
- (2) 問題解決の過程の中で、図に表したり、対話活動を取り入れたりするのには、時間配分の難しさがあった。絵や図に表すことや対話活動が、ねらいに対し有効な時間を見極めて、指導計画を立てる必要がある。

### おわりに

今回の研究を通して、水蒸気の存在をイメージ図の中に表現させたことで、「水の量が減っ

たことは、無くなったのではなく、姿を変えたのである」というように、目には見えないが存在しているものがあることを理解し、捉えることができたと思われる。このような、イメージ図による思考の可視化は、今後「物質が溶解し目に見えなくなるが存在すること」（5年生）や「空気中の酸素や二酸化炭素の様子について考えていくこと」（6年生）など、目には見えない自然事象について、科学的に思考し、理解し、概念を構築していく際にも有効にはたらくものと期待できる。

また、定型文を示し、思考の言語化を支援できたことは、児童の自己表現の自信を高め、発言意欲にももつながったと考えている。そして一人ひとりが自分の考えやイメージを語り合う中で、「ズレ」をきっかけとした「他者との対話」「自己内対話」を深めていくことが、児童の科学的な思考力・表現力を高める手だてになることを、確かな手ごたえと共に実感することができた。

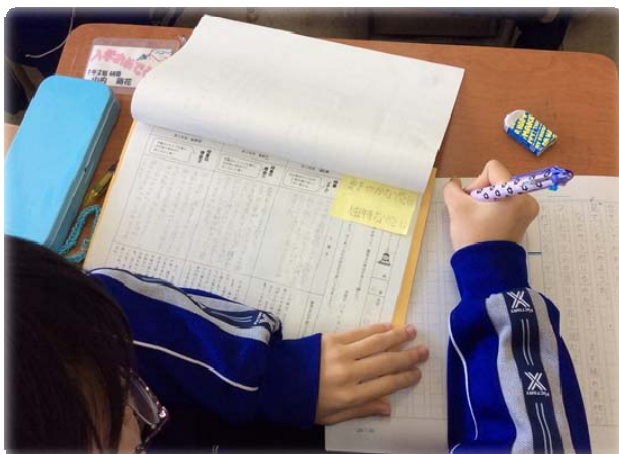
最後に、研修期間中多くのご指導をいただきました浦添市立教育研究所の仲西起實所長、山里崇研究係長、日高聡指導主事をはじめ、職員の皆様、浦添市教育委員会の諸先生方に深く感謝申し上げます。また、研究所での研修を勧め、送り出して下さった牧港小学校の仲底善章校長先生をはじめ、いつも笑顔で励ましてくださった多賀教頭先生や諸先生方、特に本研究に協力してくれた4学年の先生方、また第43期研究員として共に支え合った先生方にも感謝とお礼を申し上げます。

#### 【主な参考・引用文献】

- ・理科の学ばせ方・教え方事典 改訂新装版 角屋重樹編 教育出版 2011年
- ・指導と評価 vol. 58 連載小学校理科の授業づくり第1回 小学校理科の授業づくりのポイント 村山哲哉 日本図書文化協会 日本教育評価研究会 2012年
- ・指導と評価 vol. 59 連載小学校理科の授業づくり第21回 理科における言語活動の充実と問題解決 村山哲哉 日本図書文化協会 日本教育評価研究会 2013年
- ・根拠に基づく対話 小野田 亮介 対話が生まれる教室～居場所感と夢中を保障する授業～ 秋田喜代美編 教育開発研究所 2014年
- ・考え・表現する子どもを育む理科授業 森本 信也 編著 東洋館出版社 2007年
- ・考える力が身につく対話的な理科授業 森本 信也 東洋館出版社 2013年
- ・サイエンス・ワールド第19号 玉村かおり 那覇市立教育研究所理科通信 2012年
- ・「言語活動の充実」のために－「思考力・判断力・表現力等」の育成をめざして－ 2010年 福島県教育センター [www.cms-center.gr.fks.ed.jp/?action=common\\_download\\_main&upload\\_id=2671](http://www.cms-center.gr.fks.ed.jp/?action=common_download_main&upload_id=2671)
- ・佐世保市教育センター研究紀要No.84 佐世保市教育センター 2014年
- ・新しい理科4教師用指導書資料編 東京書籍 東京書籍 2011年

〈中学校 国語〉

国語科学習における自分の思いや考えを  
論理的に表現する力を育む指導の工夫  
—根拠をもとに美術作品の良さを伝える鑑賞文の指導を通して—



浦添市立 仲西中学校

比嘉 麻衣子

# 目 次

I	テーマ設定理由	45
II	目指す生徒像	45
III	研究の目標	45
IV	研究仮説	46
1	基本仮説	46
2	作業仮説	46
V	研究構想図	46
VI	研究内容	47
1	国語科における鑑賞文指導	47
2	論理的に書く力	48
3	論理的に書く力を育む学習指導の工夫	49
VII	授業実践	53
1	単元名	53
2	単元の目標	53
3	単元について	53
4	単元の系統性	53
5	指導と評価の計画	54
6	本時の学習	56
VIII	研究の考察	58
1	作業仮説（1）の検証	58
2	作業仮説（2）の検証	61
3	本研究を通して	63
IX	研究の成果と課題	65
1	成果	65
2	課題	65
	おわりに	65
	主な参考・引用文献	66

# 国語科学習における自分の思いや考えを論理的に表現する力を育む指導の工夫

－ 根拠をもとに美術作品の良さを伝える鑑賞文の指導を通して －

浦添市立仲西中学校 比嘉麻衣子

## 【要 約】

本研究は、自分の思いや考えを表現する力の育成を目指し、美術作品について鑑賞したことを自分の考えとして根拠を明確にした論理的な文章に表現するための国語科学習の指導法について研究したものである。

キーワード 根拠を示す 鑑賞文 論理的に書く 言語活動 読み合い（交流）  
チェックシート

## I テーマ設定理由

現代社会の知識基盤化やグローバル化は今後ますます進むと予想され、この急速に変化する社会の中で生きる生徒たちには、自分に必要な情報を選び、読み取り、そこで得た知識や技能を自分の中で組み換え、表現し使っていく力が一層必要とされてくる。

一方で、PISAや全国学力・学習状況調査などの学力調査結果からは「知識・技能の活用など思考力・判断力・表現力」に課題があることがわかっている。それらを受けて学習指導要領では「思考力・判断力・表現力の育成」を柱に、言語活動の充実が提起されるに至った。

教育現場では国語科のみならず各教科や領域において、その内容や特性に応じた言語活動に取り組んでいる。しかし、話し合い活動において自分の考えや意見をうまく説明できず困惑したり、各種表現物が単語や短文、感想のレベルにとどまっていること等生徒の言語力には課題が多く感じられる。

今年度の全国学力・学習状況調査では「目的や意図に応じて資料や文章を読み取り、根拠を明確にして自分の考えを書いたり、伝えたい事柄を明確にして書いたりすること」が本県における国語科の課題の一つとして浮き彫りになった。

本校一年生においても本県三年生の現状と同じく、「書くこと」の領域には課題が多い。今年度6月に生徒に実施した意識調査では約70%の生徒が、「苦手」「面倒臭い」を理由に「書くこと」を嫌いな活動と答えた。各教材の学習終了後に行う小テストの結果では、「書くこと」

の到達率は約44%であり、他の領域と比較すると20%以上低い結果となっている。その原因は、無答率が高いことと、不正解の多さにあると考えられる。なかでも自分の意見を文章に表現させる問いの到達率が低く、不正解の回答を見るとそのほとんどが自己の直感的な感情に終始して意見の根拠が示せていない。この現状は道徳や特別活動、各行事等のワークシート等においてもいえる。

「自己の意見や気持ちを表現する」手立てとして、書く機会を増やしたり、テーマや課題の提示等も工夫してきたが、現状の改善には至っておらず、その指導や実践には更なる改善と長期的な継続の必要性がある。

そこで、本研究では「書くこと」の領域に焦点を絞り、「意見の根拠を示して書かせる」指導の工夫改善に取り組むたい。美術作品の鑑賞文の作成において、自分の意見を作品の特徴を根拠として表現する指導の工夫を図る。国語科学習において根拠を示して書く学習を行うことで、自分の思いや考えを明確にして論理的に表現する力を育むことができるであろうと考え、本テーマを設定した。

## II 目指す生徒像

自分の思いや考えを根拠を明確にして論理的に表現できる生徒

## III 研究の目標

「鑑賞文を書く」学習において、自分の思いや考えを論理的に表現するための指導を工夫する。

#### IV 研究仮説

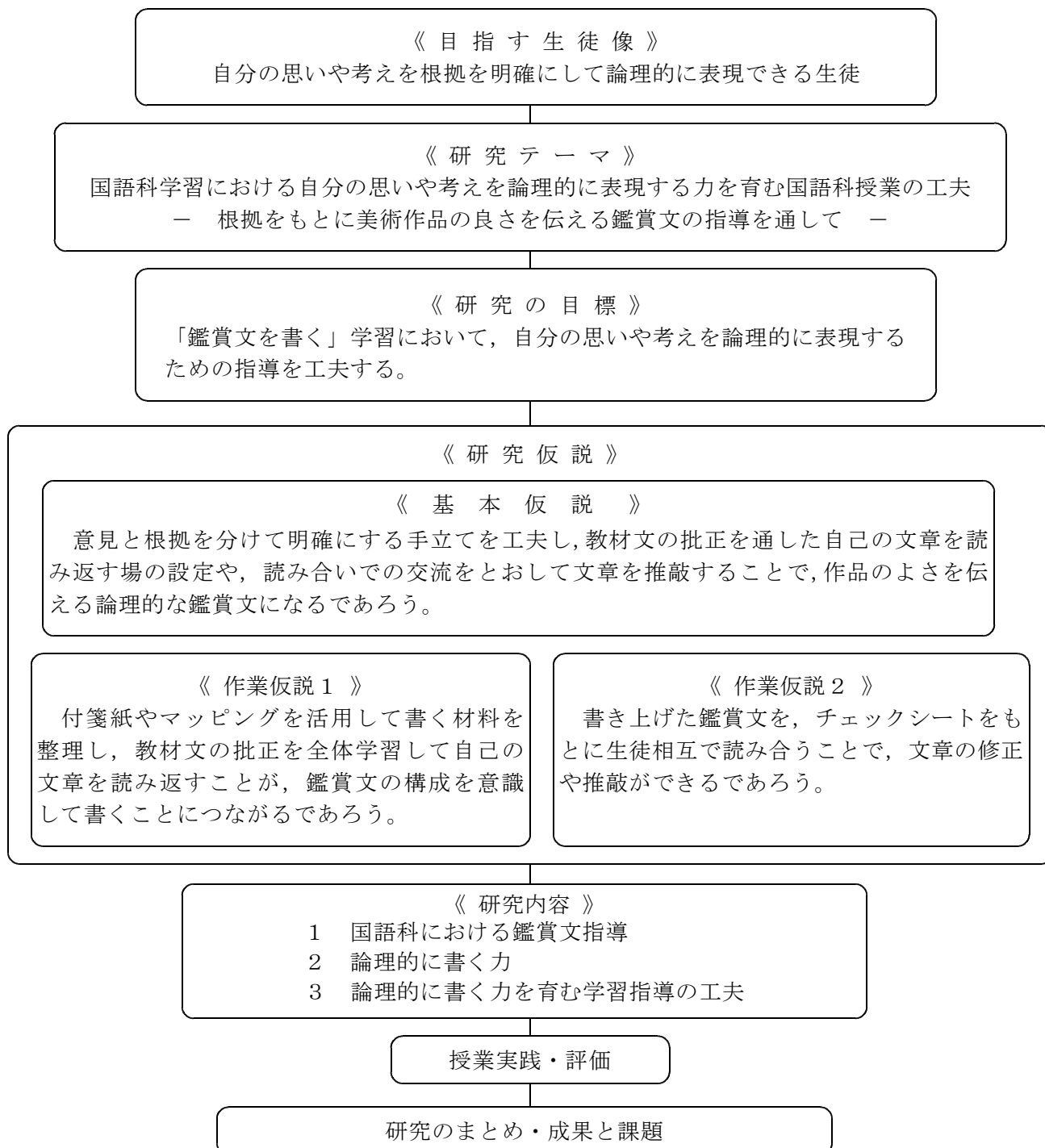
##### 1 基本仮説

意見と根拠を分けて明確にする手立てを工夫し、教材文の批正を通した自己の文章を読み返す場の設定や、読み合いでの交流をとおして文章を推敲することで、作品のよさを伝える論理的な鑑賞文になるであろう。

##### 2 作業仮説

- (1) 付箋紙やマッピングを活用して書く材料を整理し、教材文の批正を全体学習して自己の文章を読み返すことが、鑑賞文の構成を意識して書くことにつながるであろう。
- (2) 書き上げた鑑賞文を、チェックシートをもとに生徒相互で読み合うことで、文章の修正や推敲ができるであろう。

#### V 研究構想図



## VI 研究内容

### 1 国語科における鑑賞文指導

#### (1) 鑑賞指導について

学習指導要領「B 書くこと」第1学年の言語活動例アでは、「鑑賞」とは表現のしかた、内包されている意思などについて、多様な角度から光を当てて、そのよさを見極めたり味わったりすることと記されている。また、鑑賞したことを文章に書く時には、対象や素材の表現の仕方、作り手の思いや見方、作品から受けた印象や感動などについて意見や感想を書くことが大切であるとされている。


鑑賞したことを文章にするためには、鑑賞できることが前提となっている。しかし、生徒の持つ鑑賞能力には個人差があり、鑑賞について何らかの指導を講じることが望ましい。鑑賞文が単なる感想文にならないためにも鑑賞指導は必要である。

野口芳宏(2013)は、『「鑑賞指導」とは、その作品が固有に内包している魅力と感化力を十分に理解し、味わう学力を形成する指導である』として、鑑賞指導のための内容理解の深まり、言語技術の体得、人間認識の拡充の必要性を述べている。

これは主に文学作品について述べられたものであるが、文学作品のみならず芸術作品においても同様だと考えられる。鑑賞指導では、書かれている内容を確かに理解させ、豊かに味わわせること、楽しませることが、大切にされなければならない。

そこで本研究では、鑑賞指導として鑑賞の手立てを工夫する(表1)。

表1 三段階の鑑賞の手立て

	学習の場	学習内容
1	教室での授業	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鑑賞とは何か</li> <li>・鑑賞の観点とは何か</li> <li>・鑑賞文の特徴と書き方(鑑賞文の材料の集め方)</li> </ul>
2	【出前授業】 専門家に学ぶ (美術館学芸員)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・美術鑑賞の方法</li> <li>・内包される作者の意図などの見方など</li> </ul>
3	【校外学習】 県立美術館 鑑賞体験	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鑑賞ボランティアと対話を通して作品を鑑賞する</li> <li>・印象を表現する体験</li> </ul> 

第一段階では美術作品の鑑賞について、観点にしたがって鑑賞する方法、鑑賞したことを鑑賞文に表現することについて学ぶ。

第二段階では沖縄県立美術館の学芸員による出前授業を取り入れる。具体的な鑑賞の観点、作り手の思いや見方、対象や素材の表現の仕方などについて学ぶことで作品を多様な角度から鑑賞する力が育まれると考える。

第三段階では実際に県立美術館で鑑賞ボランティアとの対話を通じた鑑賞を行う。作品を前にして「何が見えるか」「何を感じるか」「なぜそう思うか」といった対話を通じた鑑賞体験を取り入れる。

難波広孝(2011)は、論理を「因果関係」、論理力を「因果を捉える力」として述べている。因果とは原因と結果や根拠と主張の関係であり、論理力とはなぜかを考える力とされる。子どもたちがあらゆることについて深く「なぜか」と問いかける論理力を育てることが重要であるとした。

生徒に論理力を持たせて美術作品を鑑賞させるために、鑑賞ボランティアとの対話を通じた鑑賞は有効であると考えられる。

#### (2) 言語活動としての鑑賞文

これまでの国語授業において、鑑賞したことを文章に書く指導は、詩歌などの文学作品を読むことと関連させることが多かった。

しかし、学習指導要領「書くこと」の言語活動例に「関心のある芸術的な作品などについて、鑑賞したことを文章に書くこと」が例示されたことで、鑑賞する材料や対象、目的等に広がりが生じた。学習指導要領の「芸術的な作品」とは、絵画や音楽、彫刻や建築物など幅広く考えることができる。

このような鑑賞の指導については、芸術的な作品を主に扱う音楽科や美術科において、指導の充実・改善が図られているが、教科によって指導の重点は異なる。国語科では、自分の考えや気持ちを根拠を明確にして書くことに重点が置かれる。


鑑賞文について、河野庸介(2011)は、「鑑賞とは、ある芸術作品について自分の立場からそのよさを味わうことである。意見文が書き手としての自分が出るのに対して、鑑賞文はテキスト



トとする芸術作品に寄り添うものである」と述べている。

これをもとに言語活動としての鑑賞文の目的や内容について整理した(表2)。本研究では美術作品の鑑賞を通して鑑賞したことを読み手に的確に伝えるために構成や記述を工夫し、推敲や交流で表現を磨くことを指導のねらいとする。また、文章を書くことによって鑑賞が深まっていくことも実感させたい。

表2 言語活動としての鑑賞文の目的や内容

目的	作品のよさ(魅力)を相手に伝える	
内容	テキストとする芸術的な作品などのよさ(魅力)について感じ取ったこと	
<b>ポイント</b> ・自分が感じ取った作品のよさ(魅力)を書く。 ・鑑賞する観点から気づいたことを根拠とする		

## 2 論理的に書く力

### (1) 論理的に書くとは

論理的に書くとは、自分の考えを明確に、また相手にわかりやすく伝えるために次の四点に注意して書くことである。

- ① 根拠(理由や具体例)を取り入れる。
- ② 言葉や表現のつながりを意識する。
- ③ 意図的に文章を組み立てる。
- ④ 相手が納得できるような筋道を整える。

本研究では、美術作品の具体的な特徴を根拠に、作品から受けた自分の感想や意見を論理的な文章として書かせる。生徒が論理的に書くための四点を次のとおり手立てを加えて指導する(表3)。

表3 論理的に書くための四点の指導

文章を論理的に書くための4点	鑑賞文作成における4点の指導
①根拠を入れる(理由や具体例)	①作品の具体的特徴を根拠にする
②言葉のつながりを意識する	②つながりを意識させるワークシートの活用
③意図的に文章を組み立てる	③根拠とする特徴を選び順番を考えて文章を組み立てる
④相手を納得させる筋道	④ペアで読み合って推敲する

### (2) 論理的な文章の構成

学習指導要領「書くこと」の目標では、小・中学校九年間を通して、「構成」を意識して文章を書くことが挙げられている(表4)。

表4 学習指導要領「書くこと」の目標(抜粋)

小学低学年	簡単な構成を考えて文や文章を書く	構成を意識した指導
小学中学年	段落相互の関係などに注意して文章を書く	
小学高学年	全体の構成の効果を考えて文章を書く	
<b>中学1年</b>	<b>構成を考えた的確に書く</b>	
中学2年	構成を工夫して分かりやすく書く	
中学3年	論理の展開を工夫して書く	

小学校低学年から「簡単な構成を考えて」文章を書き、義務教育終了の中学三年では「論理の展開を工夫」した文章が書けるようになるという指導系統になっている。「書くこと」においては論理的な文章を書くために、児童生徒に常に構成を意識させる指導が求められていると言える。また、学習指導要領の言語活動例には、「書くこと」の文種として「報告」「記録」「説明」「意見」などが具体的に示されている。

中村孝一(2011)は、これらの文章を書かせる教師に求められることは、まずそれぞれの文種の特徴や文章形態をしっかりと把握し、該当する学年の児童生徒に何をどのように書かせるのか指導内容や方法を明確にしてシンプルな文章形式(型)を示して「書き方」を教えることであると述べている。

市毛勝雄(2002)は、論理的な文章とは短く明快で構成の原則を併せ持ち、型や書き方の指導が必要であるとし、作文の授業では「説明文」と言われる実用的な文章の書き方を教える重要性を説いた。また、論理的な文章の基本的な型と各文種への文章構成の応用についても述べている。

市毛の提唱する「はじめ・なか・まとめ・むすび」の文章構成での作文指導は「帰納法」と「演繹法」を組み合わせた文章の型となっており、この型に沿って文章を書く活動が、論理的思考力・表現力を育むことになる。

本研究では、市毛の「はじめ・なか・まとめ

・むすび」の文章構成を鑑賞文の構成の型として取り入れる。実践ではその構成にしたがい段落ごとに内容を決めて鑑賞文の型として生徒に示す。生徒は鑑賞文の型にしたがって書くことで論理的な文章の型を理解することができる。鑑賞文の構成と段落ごとの内容は次に示したものとする（表5）。

表5 鑑賞文の構成と段落ごとの内容

段落	構成	内容
第1段落	はじめ	作品からうける印象
第2段落	なか	印象の根拠①(観点から)
第3段落		印象の根拠②(観点から)
第4段落	まとめ	根拠①と根拠②の共通点 ※印象につながる
第5段落	むすび	自分の意見・主張 作品と自分や沖縄との関わり ※作品のよさ(魅力)でまとめる

### 3 論理的に書く力を育む学習指導の工夫

#### (1) 単元構想表

言語活動と指導事項との関連を明確にするために富山哲也(2011)の提唱する単元構想表を作成する。単元構想表の作成によって単元を貫く言語活動と「書くこと」の領域にある指導事項との関連が明確になり、言語活動を通してどの指導事項を重点的に指導するのか整理され、指導の全体像がとらえやすくなる。

本研究では、単元を貫く言語活動を「沖縄を伝える作品を選び、県外の中学生へ向けて作品の魅力伝える文章を書こう」と設定する。重点化する指導は【記述】「伝えたい事実や事柄について、自分の考えや気持ちを根拠を明確にして書くこと」【交流】「書いた文章を互いに読み合い、題材のとらえ方や材料の用い方、根拠の明確さなどについて意見を述べたり、自分の表現の参考にすること」とした(表6)。

表6 単元構想表「書くこと」第1学年

(◎は指導の重点化を表す。『観点別学習状況の評価規準と判定基準』を参考に一部加筆)

言語活動例		(2)ア 関心のある芸術的な作品などについて、鑑賞したことを文章に書くこと。			
		指導事項(1)	学習活動	評価規準	時
沖縄を伝える作品を選び県外の生徒へ向けて作	ア	【課題設定や取材】 日常生活の中から課題を決め、材料を集めながら自分の考えをまとめること。	県外の生徒へ沖縄を伝えるために作品を選び、鑑賞の観点をもとにそのよさを考える。	県外の生徒へ沖縄を伝えるために作品を選び、観点をもとにそのよさについて考えている。	1 5
	イ	【構成】 集めた材料を分類するなどして整理するとともに、段落の役割を考えて文章を構成すること。	作品の印象と観念の結びつきを考え、観点の中から二つを、作品のよさを伝えるための根拠として選び順番を決め、文章の構成を考える。	作品のよさを自分の考えの根拠として挙げて要素ごとに整理し、段落の役割を考えて文章を構成している。	6
	ウ ◎	【記述】 伝えたい事実や事柄について、自分の考えや気持ちを根拠を明確にして書くこと。	作品からうけた印象とその根拠を明確に示し、課題条件に従って、表現を工夫して書く。	作品のよさについて、表現の仕方、作り手の思いや見方、受けた印象や感動などを明確に書いている。	6 7 8
	エ ○	【推敲】 書いた文章を読み返し、表記や語句の用法、記述の仕方などを確かめて、読みやすく分かりやすい文章にすること。	教材文で文章の批正方法を学び批正方針を理解した上で、自分の文章を読み返しわかりやすい文章に修正する。	自分の考えた作品のよさやその根拠が相手に伝わるかどうかを確かめて、読みやすく分かりやすい文章にしている。	7 8

品の魅力を伝える文章を書こう	<p>【交流】</p> <p>◎ 書いた文章を互いに読み合い、題材のとらえ方や材料の使い方、根拠の明確さなどの意見を述べたり、自分の表現の参考にしたりすること。</p>	<p>ペアで文章を読み合い、チェックシートやコメントシートをもとに意見の交流を行う。</p>	<p>書いた文章を互いに読み合い、作品のとらえ方や根拠の明確さなどについて意見を述べたり、自分の表現の参考にしたりしている。</p>	<p>8 9</p>
	<p>関連する【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】</p> <p>(1) 「イ(ウ) 事象や行為などを表す多様な語句について理解を深めるとともに、話や文章の中の語彙について関心を持つこと。」</p> <p>(1) 「イ(オ) 比喻や反復などの表現の技法について理解すること。」</p>		<p>作品のよさや魅力を表す語句を集め、文脈に応じて使い分けられている。</p> <p>作品のよさや魅力を書き表すのに、比喻を適切に用いている。</p>	
	<p>【国語への関心・意欲・態度】に関する評価</p>		<p>学習課題に沿って作品を選び、自分の受けた印象や感動を分かりやすく文章に書こうとしている。</p>	

## (2) 付箋紙とマッピングの活用

論理的な表現には「根拠を明確に示す」ことが必要である。生徒が論理的に文章を書けない大きな理由は、意見と事実の区別ができず根拠を明確に示せないことにある。これまでに目にした生徒の文章の多くは、意見と事実の区別ができないことであいまいな表現となっていた。

そこで本研究では「鑑賞文を書く」学習において、意見と事実を分けさせる手立てを講じる。美術作品から受けた印象や自己の解釈を意見、作品の特徴を意見の根拠として付箋紙とマッピングを使って分ける方法をとる。

マッピングとは、紙の中央にテーマを書き、連想する言葉を次々にメモして線でつないでいく方法でウェビングなどとも呼ばれる。付箋紙は、意見の書き出しや、情報の整理など話し合い活動などで用いられることがあり、どちらも考えを深めたり、整理する時などに用いる発想方法として知られている。

今回は、生徒が自分の意見とその根拠を分けてそれぞれを明確にするために用いる(図1)。付箋紙には、作品から受ける印象や、作品の解釈を単語で書き出す。マッピングは、生徒が観点ごとに作品の特徴を整理したり、五感で感じた情報を整理するために使用する。マッピング用紙は中央に作品名を書き、二次の段階には鑑賞の観点を書いたものをワークシートとして準備する。

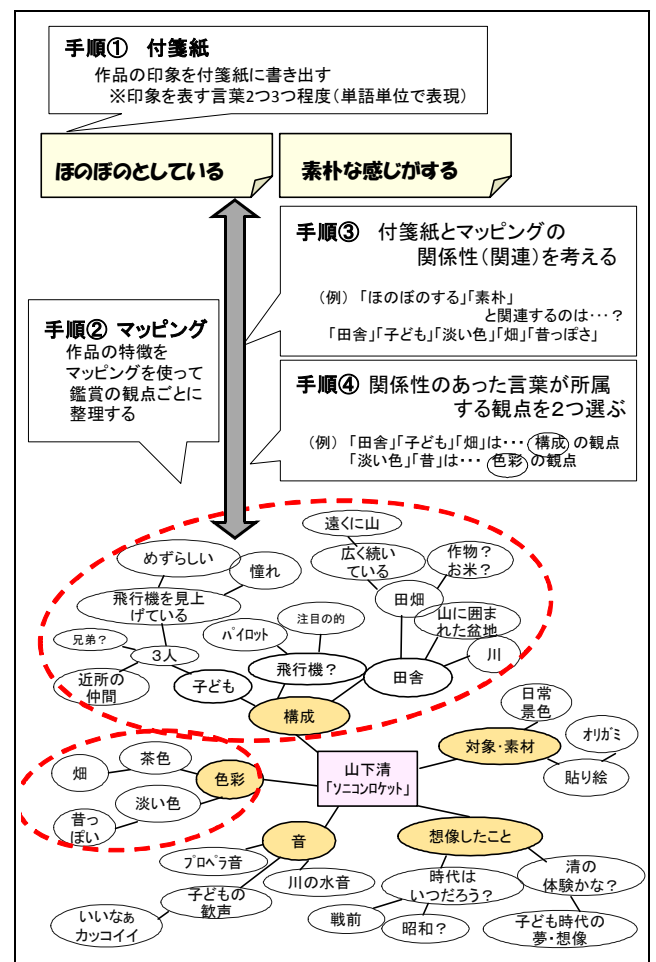


図1 付箋紙とマッピングを活用する手順

以上の手順を踏むことで、付箋紙に書かれた印象(作品に対する自分の意見)と、マッピングで整理した作品の特徴(意見の根拠)とを区別することができ、自分の意見に必要な根拠を


明確にすることができる。と考える。

(3) 付けたい力を意識した課題条件

学習課題を設定し、課題を明確にすることで生徒たちは目的意識、課題意識をもって書くことができる。

今回は実際に美術館で鑑賞を行い、鑑賞文のテーマとする作品を選ぶ際に「県外の中学生に絵を使って沖縄を紹介する」という場面を設定して沖縄を紹介するための作品を選ばせる。また、鑑賞文を書くうえで生徒に付けさせたい記述の力を明確化して段落ごとの課題条件を次のように設定する（表7）。

表7 付けたい力を意識した課題条件

課題の明確化 → 生徒の目的意識の向上		
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> <p><b>【学習課題】</b> 県外の中学生に沖縄を紹介する 作品を選び鑑賞文を書こう</p> </div> 		
段落	内容と課題条件	付けたい力(記述)
第1段落	・印象を比喻を使って言い換える	・気持ちを伝える表現を工夫する力
第2・3段落	・鑑賞の観点に沿った根拠を書く ・2文以上で書く	・事実(作品の特徴)をわかりやすく説明する力 ・必要な分量で調節して記述する力
第4段落	・二つの根拠の共通点を書く ・2文以上で書く	
第5段落	・自分との関わりを書く ・沖縄の話題に触れる ・作品のよさ(魅力)	・段落のつながりを意識してまとめる力 ・自分との関わりでとらえて書く力

(4) 教材文の批正と読み返しの場合

これまで、「書くこと」の指導における文章の推敲は、本人任せか教師の添削、または推敲目的でのグループ交流に終始していた。しかし、本人による推敲は、簡単な語彙や表記の訂正で終わることが多く、推敲前後の文章に大きな差が見られないことが課題であった。また、教師による添削は受け持つ生徒数の多さなどから十分な指導ができず、添削に多くの時間を要するという難点があった。推敲目的の生徒グループ交流は、生徒間の書く能力の差があるため推敲の目的が果たせずに終わっていた。その改善のために生徒の座席を配慮したり、意図的なグループ作成を行ったりと交流以前の準備に時間がかかり、大きな障害となっていた。

そこで、興水実(1975)の作文の基本的指導過程に学び批正指導を取り入れる。興水は、批正と推敲の違いについて、推敲は書いた人自身の立場で作品の完成という目線で読み返すことであり、批正とは教師がおこなう、あるいは学級共同でおこなうものであると述べている。

萩中奈緒美(2014)の実践「評価と指導が機能し合う指導過程」では、教材文(生徒の記述の問題点を含んで教師が作成する)を提示し、記述の問題点を批正する活動を取り入れて全体学習を行っている。この全体学習により生徒は記述の問題点に気づき、どう批正するか批正方針や方法も考えた。その後、全体学習での学びを生かし自己の文章を振り返りながら書き進めた。

萩中は、生徒に付けたい力を一人一人に確実に付けていくには、その学習指導過程に「生徒が記述の仕方を見つける段階」「生徒が実際に書く段階」「生徒が自分の記述の問題点に気づく段階」「生徒がもう一度挑戦して記述を成功させる段階」の4段階を位置づけることをすすめている。

そこで本研究においても、教材文を導入しグループで批正する活動を取り入れ、批正方法や批正方針を学ばせたい。全体学習をとおして「生徒が自分の記述の問題点に気づく段階」の位置づけを図りたい(図2)。

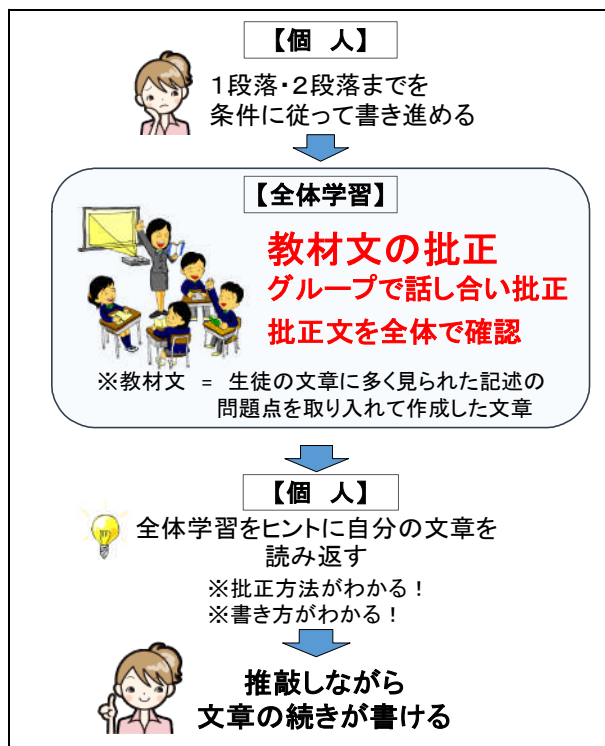


図2 教材文を使った読み返しの場合の設定

(5) チェックシートを使った生徒交流

学習指導要領の改訂内容で注目すべき項目に、「学習過程の明確化」がある。「書くこと」では「課題設定や取材→構成→記述→推敲→交流」の流れが示された。特に、学習の最後に書いたものを互いに読んで学び合う「交流」の場を位置づけ、生徒相互で書いたものをもとに考えを深めたり広めたりする学び合いを図ることが明記されている。

そこで、本研究においても「文章を読み合い、助言し合う」交流の場を指導過程に位置づけ、生徒が書いたものをもとに考えを深めたり、広めたりする「学び合い」の場としたい(図3)。



図3 指導過程における交流の位置づけ

しかし、これまでの実践では生徒間の「学び合う交流」が成り立たないという課題があった。授業後の生徒の声「何を助言していいのかわからない」を原因の一つとして考えた。

佐渡島紗織(2009)は、『中学生には、「書くこと」において、文章を対象化して他者の目から読む力が求められている』とし、書き手自身の「読み返し」と生徒相互の「読み合い」は、いずれも文章を対象化して他者の目から読む作業であると述べている。

また、文章の修正には、表記・語句・文などの表層的な修正と主張・構成・材料などの深層的な修正があり、授業で文章の修正をさせる際には、目指す修正を明確にする必要があることにも触れている。

今回は、全指導過程に2回の交流の場を設定する。指導計画の第8時に深層的な修正を目的とした第1回目の交流を、第9時では完成した鑑賞文をもとにした美術作品のとらえ方や考え方の交流を行いたい。

第8時の交流において、生徒間で文章の深層的な修正を円滑に進める目的でチェックシートを次のように作成する(表8)。生徒がチェックシートを活用して対話を通じた深層的な修正目的の読み合いができることを目指す。

表8 交流に使用するチェックシート(一部)

鑑賞文を書こう チェックシート		◎アドバイス (△×の項目について、どう改善すると良いか具体的に書きましょう)
組	番 名前	
◎ペアの鑑賞文を、次の項目にしたがってチェックしましょう。(○△×)		
段落	チェックの視点	
1	自分の考えとして作品の印象を書いているか? *特徴でなく気持ちになっているか?	はじめ
2	印象の根拠として鑑賞の観点から二つを述べているか? *二つが混ざったりしていないか?	
3	内容が印象の根拠として理由になっているか? *印象の説明にふさわしいか?	なか
3	それぞれの説明が十分か (よくわかるか?言葉が足りていますか?)	
4	「なか①」と「なか②」の共通点がまとめられているか?	まとめ
5	作品と自分との関わりが述べられているか?	むすび
	沖縄の話題に触れてられていますか? 作品のよさや魅力を伝える文章になっているか?	

VII 授業実践

第1学年 国語科学習指導案

平成26年12月11日 3校時  
 仲西中学校 1年1組35名  
 指導者 比嘉 麻衣子

【年間指導計画 1学年 2月計画 P53】

1 単元名 「沖縄を伝える作品を選び県外の生徒に向けて作品の魅力を伝える鑑賞文を書こう」

2 単元の目標

【関心・意欲・態度】興味を持った作品を選び、観点を決めて作品の魅力を伝える鑑賞文を書く。  
 【書くこと】観点を決めて鑑賞し、根拠を明確にして文章の構成を考え、書いた文章を読み合い、自分の思いや作品の魅力を伝える鑑賞文を書く。

【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】作品のよさを語る語彙を増やし、効果的な表現を工夫する。

3 単元について

- (1) 教材観 (省略)
- (2) 生徒観 (省略)
- (3) 指導観 (省略)
- (4) 単元の評価規準 【学習指導要領の内容】書(1)ウ・オ, (2)言語活動例ア, 伝国(1)イ(ウ)・(オ)

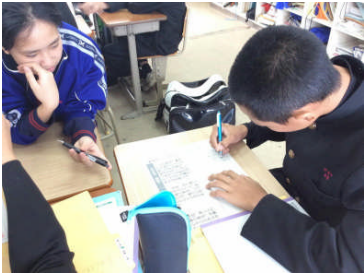
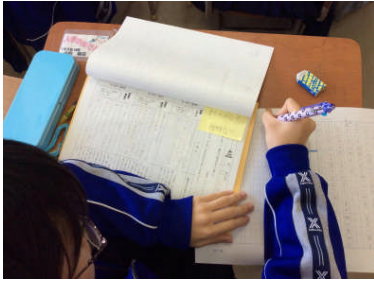

国語への関心・意欲・態度	書く能力	言語についての知識・理解・技能
① 沖縄を伝える作品を選び、観点を決めて作品の良さを伝える鑑賞文を書こうとしている。	① 観点を決めて作品を鑑賞し、その良さや魅力の根拠をあげて鑑賞文を書いている。(ウ) ② 書いた文章を互いに読み合い、作品のとらえ方や表現について意見を述べたり、自分の表現の参考にしている。(オ)	① 作品の良さや魅力を表す語句を集め、文脈に応じて使い分けている。(イ(ウ)) ② 作品の良さや魅力を書き表すのに、比喩などの表現技法を必要に応じて適切に用いている。(イ(オ))

4 単元の系統性



5 指導と評価の計画（全9時間）

次	時	ねらい	学習活動	評価規準と評価方法
一	1	◎鑑賞文の特徴を知り観点に沿った鑑賞の方法と鑑賞文の書き方を理解する。	①目標を確認し学習の見通しを持つ。 ②著名作家の絵画作品を見て、作品から受ける印象を話し合う。 ③作品から受ける印象(自分の気持ち)と、作品の特徴(事実)との違いを押さえる。 ④鑑賞文のモデルを提示し、鑑賞文とはどんな文章か理解する。 ⑤鑑賞文を書くための情報集めの方法(付箋紙とマッピングの活用)を理解する。	<b>関①</b> 絵画の鑑賞に興味を持ち、鑑賞文を書くための情報集めの方法を理解しようとしている。(行動観察) <b>書①</b> 絵画の印象と、作品の特徴を表す言葉をそれぞれ書き出している。(付箋紙とマッピング)
	2	<b>【出前授業】</b> ◎絵画作品の鑑賞の観点を理解し、絵画作品の対話を通じた鑑賞を体験する。	①絵画の要素に着目した作品鑑賞の観点を理解する。 ②対話を通じた鑑賞を体験する。  県立美術館学芸員による出前授業	<b>関①</b> 鑑賞の観点を理解し、具体的な部分を取り上げ、作品のよさや魅力を挙げている。(行動観察)
二	3	<b>【校外学習】</b>	①鑑賞のテーマを理解する。	<b>関①</b> 対話を通して、作品のよさや魅力を多様な視点から鑑賞している。(行動観察) <b>書①</b> テーマに合った作品を選び、観点を決めて鑑賞し、その作品のよさや魅力を適切な語句を用いて書き出している。(ワークシート)
	4 5	沖縄県立美術館 学校招聘事業 「美術館へ行こう2014」へ参加 ◎県外の中学生へ沖縄を伝える作品を選び、観点にしたがって鑑賞する。	テーマ 「県外の中学生へ沖縄を伝える作品を選び、その鑑賞文を書こう」 ②県立美術館のコレクションギャラリーを、鑑賞する。  鑑賞ボランティアと対話をしながら鑑賞 (生徒1グループ6名につき鑑賞ボランティア1名) ③鑑賞文にする作品を決め、自由に鑑賞する。 ④選んだ作品の印象と特徴を、ワークシートにできるだけ詳しく記録する。 ⑤アートカードで鑑賞の観点、印象の表現の仕方を体験する。 	

三 鑑 賞 文 を 書 こ う	6 ◎付箋紙とマッピングを使って、鑑賞文の構成を考えて書く。	①鑑賞文作成の流れを理解する。 ②美術館で使用したワークシートの情報を整理する。 ＊作品の印象を付箋紙に書き出す。 ＊作品の特徴をマッピングで整理する。 ③「印象」と「印象の根拠」となる観点の結びつけを考え、観点を二つ選ぶ。 ④「はじめ」「なか」部分を書く。	<b>書①</b> 作品の印象の根拠となる観点ごとの特徴を選び、鑑賞文の構成を組み立てている。(ワークシート) <b>言①</b> 作品の良さや魅力を表す語句を集め文脈に応じて使い分けている。(ワークシート)
	7 ◎教材文の文章の問題点を探し、批正方法を知り、自分の文章を読み返して書く。	①教材文の問題点を話し合う。 ②分かりやすく文章を批正する。 ③分かりやすい文章にする方法を理解する。  教材文の批正の様子 ④自分の文章の読み返しを行う。 ⑤読み返し、修正を加え、続きを書き上げる。	<b>書①</b> 論理的な文章のために記述の問題点を考え修正しながら鑑賞文の構成を考えて書いている。(ワークシート) <b>言②</b> よさや魅力を伝えるために、適切な語句や表現方法を用いている。(ワークシート)
8 本 時	◎自分の思いが伝わるか文章の読み合いをして表現を見直す。	①チェックシートの「項目」と「チェックの視点」を確認する。 ②鑑賞文をペアで交換して読み合う。 ③適切な語句や表現の工夫を考える。 ④ペアで分かりやすい表現を提案し合う。 ⑤自分の文章を再度読み返し、修正箇所を修正する。 ⑥清書する。 	<b>書①</b> 互いの鑑賞文を読み合い、チェックシートを活用して文章の内容や表現についてよい点や改善点を指摘している。(行動観察) <b>言②</b> よさや魅力を伝えるために、適切な語句や表現を用いている。(ワークシート)
	9 ◎鑑賞文を読み合い、感想を交流する。	①お互いの文章を読み合う。 ②鑑賞文のよい点をコメントし合う。 (発展) 他の芸術作品を選び、鑑賞文を書く。 	<b>書②</b> 書いた文章を互いに読み合い、文章の内容や表現についてよい点を述べている。(ワークシート)



## 6 本時の学習【8／9時間】

### (1) 目標

鑑賞文をペアで交換して読み合い、作品のよさや魅力が「鑑賞の観点」を根拠に述べられているか、適切な表現の工夫を考えて推敲する。

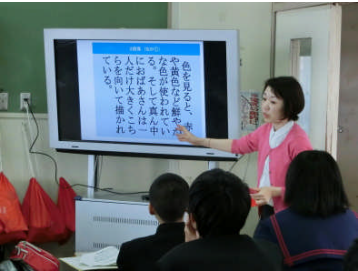
### (2) 本時の評価規準（評価方法）

国語への関心・意欲・態度	書く能力	言語についての知識・理解・技能
沖縄を伝える作品を選び、観点を決めて作品の良さを伝える鑑賞文を書こうとしている。(行動観察・自己評価表)	書いた文章を互いに読み合い、作品のとらえ方や表現について意見を述べたり、自分の表現の参考にしている。(行動観察・ワークシート)	作品の良さや魅力を表す語句や比喩などの表現技法を必要に応じて適切に用いている。(ワークシート)

### (3) 本時の授業の工夫

ペアによる鑑賞文の読み合いの場において、チェックシートを活用して読み合いの交流を円滑に進め、鑑賞文の表現を見直し修正させる。

### (4) 展開

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	評 価 項 目 (方 法)
5 分	1 前時の振り返りをする。	○ 鑑賞文作成の流れを提示して、本時がどの位置にあるのか確認する。	関 自分の思いを伝える鑑賞文を書こうとしている。 (行動観察)
	2 今日のめあてを確認する。	○ 前時まで、鑑賞文が一通り書き終えられているか確認する。	
	自分の思いや考えが相手に伝わるか鑑賞文の読み合いをして表現を見直そう		
40 分	3 チェックシートの項目を確認する。	○ チェックシートをもとに文章の「チェックの視点」を確認する。	書 チェックの視点を理解しようとしている。 (行動観察)
		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p><b>チェックの視点</b></p> <p><b>【1段落：はじめ】</b></p> <p>①自分の考えとして作品の印象を書いているか。</p> <p><b>【2，3段落：なか】</b></p> <p>①印象の根拠として鑑賞の観点から述べているか。</p> <p>②内容が印象の根拠として理由づけされているか。</p> <p>③それぞれの説明は十分か。</p> <p><b>【4段落：まとめ】</b></p> <p>①なか部分の共通点について述べられているか。</p> <p><b>【5段落：むずび】</b></p> <p>①作品と自分との関わりが述べられているか。</p> <p>②沖縄の話題に触れているか。</p> <p>③作品のよさや魅力を伝える文章になっているか。</p> </div>	
		○ チェックシートにしたがって文章をチェックし合い、分かりやすい表現を提案させる。 *分かりやすい表現の書き換えが提案できない生徒は、ペアで話し合いながら考えさせる。	書 互いの鑑賞文を読み合い、チェックシートを活用して文章の内容や表



- 4 ペアで鑑賞文を交換して文章をチェックシートを基に読み合う。
- 5 自分の文章を読み返し文章の推敲をする。
- 6 もう一度、ペアで読み合いをして清書する。

- ペアのアドバイスを基に自分の文章を読み返し、文章を推敲する。  
\*教科書 p254「文章の推敲」参考  
\*推敲に困っている生徒へ支援する。  
\*優れた表現を全体に紹介し、自分の表現の参考にさせる。
- 推敲を終えたペアは、再度文章の読み合いをして清書に移る。  
\*原稿用紙の使い方を意識させて清書させる。  
\*教科書 p254「原稿用紙の使い方」参考。



現についてよい点や改善点を指摘している。  
(行動観察・ワークシート)

**言** 作品の良さや魅力を表す語句や比喩などの表現技法を必要に応じて適切に用いている。  
(ワークシート)

まとめ  
5分

- 7 今日の振り返りとまとめをする。
- 8 次時の見通しを持つ。

- 成果や感想を自己評価表にまとめ、自己評価させる。  
\*自分の鑑賞文の改善点を見つけ、相手に伝わりやすい表現に修正できたか。
- 次時はグループで鑑賞文の読み合いをすることを確認し、清書を終わっていない生徒は次時まで完成できるよう支援する。  
\*放課後指導、清書用紙の持ち帰りなど。

**関** 本時のめあてが達成できたか自己の振り返りをして  
(自己評価表)

(5) 板書計画

**【鑑賞文作成の流れ】**

- ① 作品の印象を付箋紙に書く。
- ② 作品の特徴を観点ごとにマッピングで整理する。
- ③ 印象の理由づけに必要な観点を  
選ぶ、順番を決める。
- ④ 一、二段落を書く。
- ⑤ 全体学習で見直し。  
自分で読み返す。
- ⑥ 三、四、五段落を書く。
- ⑦ ペアで読み合いをする。
- ⑧ アドバイスを基に見直す。
- ⑨ 清書する。
- ⑩ グループで読み合う。(交流)

**鑑賞した作品**

作品

作品

作品

作品

鑑賞文を書こう⑧

めあて 自分の思いや考えが相手に伝わるか  
鑑賞文の読み合いをして表現を見直そう。

師走十一日(木)

段落	チェックの視点	段落	構成	内容
1	自分の考えとして作品の印象を書いているか？ *特徴でなく気持ちになっているか？	第1段落	はじめ	作品からうける印象
2	印象の根拠として鑑賞の観点から二つを述べているか？ *二つが混ざったりしていないか？	第2段落	なか	印象の根拠①
3	内容が印象の根拠として理由になっているか？ *印象の説明にふさわしいか？ それぞれの説明が十分か (よくわかるか？言葉が足りていますか？)	第3段落		印象の根拠②
4	「なか①」と「なか②」の共通点がまとめられているか？	第4段落	まとめ	根拠①と根拠②に共通すること
5	作品と自分との関わりが述べられているか？ 沖繩の話題に触れていますか？ 作品のよさや魅力を伝える文章になっているか？	第5段落	むすび	作品と自分の関わり 自分の意見・主張

## VIII 研究の考察

### 1 作業仮説(1)の検証

付箋紙やマッピングを活用して書く材料を整理し，教材文の批正を全体学習して自己の文章を読み返すことが，鑑賞文の構成を意識して書くことにつながるであろう。

#### (1) 付箋紙とマッピングの活用について

##### ① 手立て

付箋紙とマッピングを活用し，作品を見て受けた印象（自分の意見）と印象の根拠となる作品の特徴（事実）を分けて鑑賞文の材料を整理させ，構成を意識させる。

##### ② 結果

第1時では，鑑賞文の材料を整理する方法として付箋紙とマッピングの手法の説明を行った。鑑賞文を書く作品とは別の作品を題材として付箋紙とマッピングで情報を整理する練習を行った。まず，作品を見て受けた印象を単語単位で付箋紙に記述する。次に作品の特徴を鑑賞の観点ごとにマッピングを使って整理した。

第3～5時の美術館鑑賞では，生徒それぞれで鑑賞文の題材とする作品を決め，第1時の手法でワークシートをまとめた（図4，5）。表9は，生徒ワークシートの分析である。

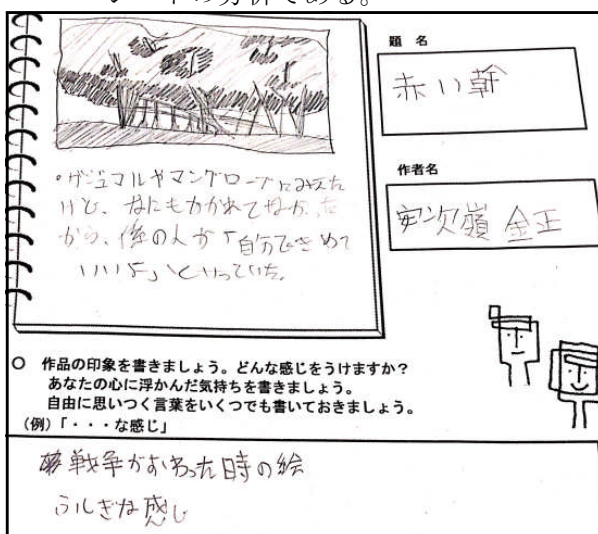


図4-1 印象をまとめたワークシート

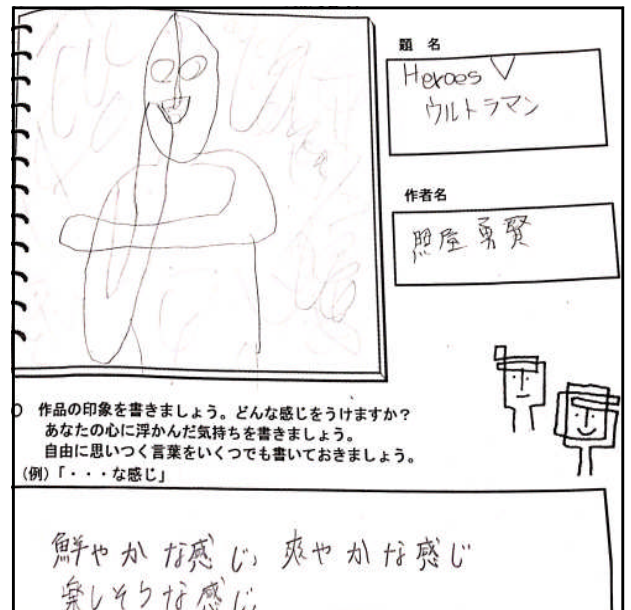


図4-2 印象をまとめたワークシート

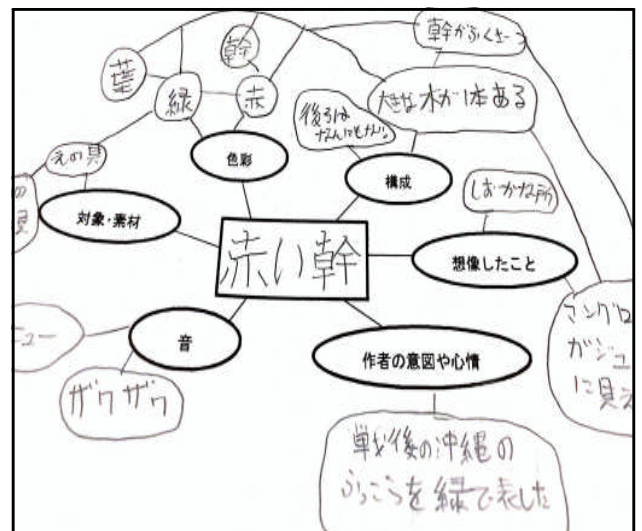


図5-1 マッピング（作品の特徴の整理）

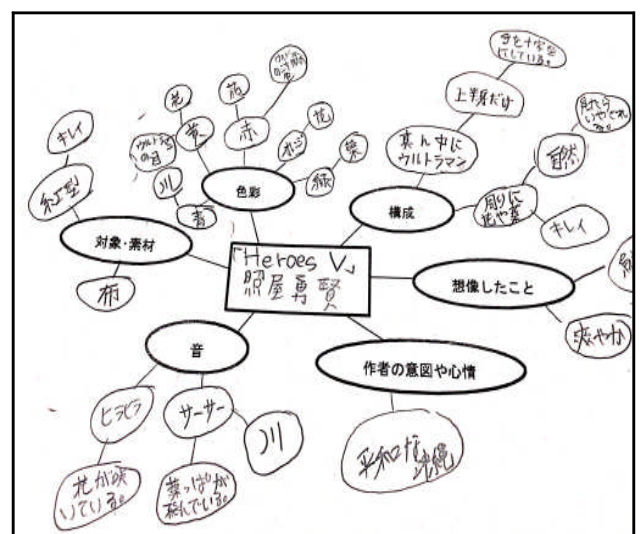


図5-2 マッピング（作品の特徴の整理）

表9 美術館鑑賞時のワークシート分析

【付箋紙に作品の印象を書く】		
A	印象を表す適切な表現を複数用いて書けた。	82%
B	印象を表す表現で書けた。	12%
C	印象を表す表現として不適切であった。	6%
【マッピングで作品の特徴を整理する】		
A	六つ全ての観点を使って特徴の整理ができた。	47%
B	半分以上の観点を使って特徴の整理ができた。	50%
C	一つの観点で特徴の整理ができた。	3%
【印象と作品の特徴を結びつける】		
A	マッピングで整理した観点の中から印象の理由となる（関連のある）観点を選び印をつけた。	55%
B	マッピングで整理した観点の中から選んで印づけはしていないが、自分の印象の理由となる観点が記入されている。	36%
C	マッピングで整理した観点の中から選んでいない。もしくは結びつけを考えていない。	9%

対象人数：66名

「付箋紙に作品の印象を書く」は94%の生徒が、「マッピングでの作品の特徴の整理」は97%が達成できている。

「印象と作品の特徴の結びつけ」は、55%が達成できた。印がなく選択の形跡は見られないが、関連のある観点がマッピングに整理されている生徒は36%いた。

生徒が書き上げた鑑賞文を、事前の鑑賞文と比較する。図6によると、意見とその根拠を示して記述しているものは事前では14%であったが事後には98%へと大幅に増加している。根拠を示していないものは83%から0%へと減少した。

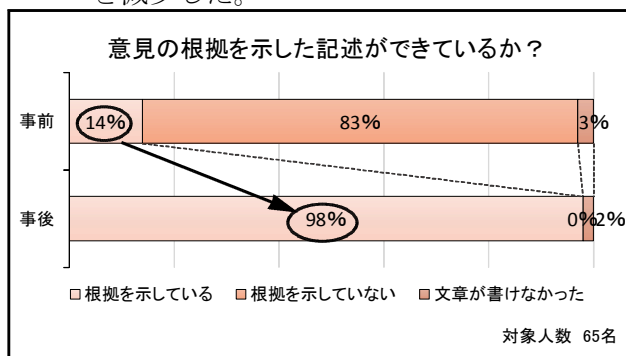


図6 授業前後の鑑賞文の比較

また、生徒意識調査（図7）では、「文章の構成を意識して書くことができますか」の質問に「書ける」と答えた割合が大幅に増加し、「書けない」の回答が0%となった。「普段、書く時に構成を意識していますか」の質問では、構成を意識するようになった生徒の割合に増加がみられた。

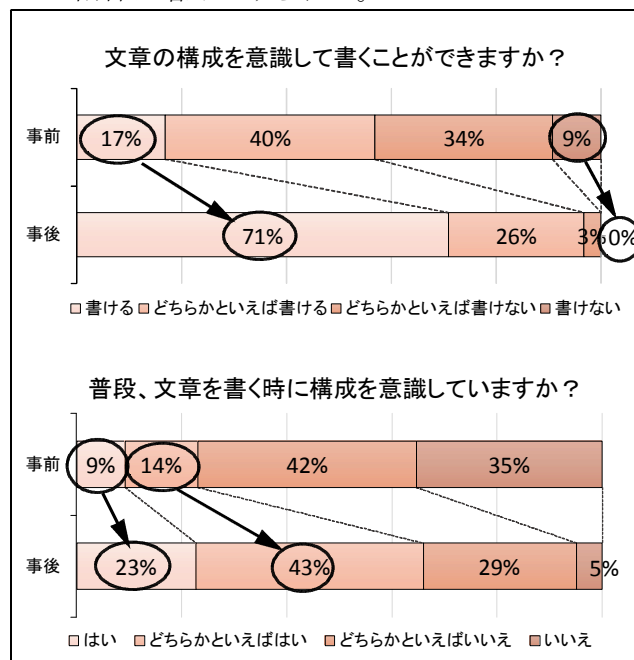


図7 「構成」に関する生徒意識調査

### ③ 考察

生徒の書き上げた鑑賞文は98%の文章が意見（印象）と根拠（作品の特徴）がはっきりと区別されていた（図6）。また意識調査では、文章の構成を意識した記述ができるという回答とともに、文章を書く際に構成を意識するようになった生徒が増えていることがわかる。

このことから、付箋紙とマッピングを用い意見とその根拠を物理的に分けさせる方法が、意見と根拠を分け鑑賞文の構成を意識させることに効果的であったといえる。

### (2) 教材文批正の全体学習について

#### ① 手立て

教材文を使って批正方法を全体学習し文章構成の確認と、自己の文章の読み返しをさせる。

#### ② 結果

本検証の第6時に教材文を使って批正方法を全体学習を行った。その後、自己の文章を

読み返す場を設定し、各自で自分の文章を批正しながら後半を書き進めた。次はグループでの批正の様子(図8)と教材文のワークシート(図9)である。



図8 教材文をグループで批正する様子

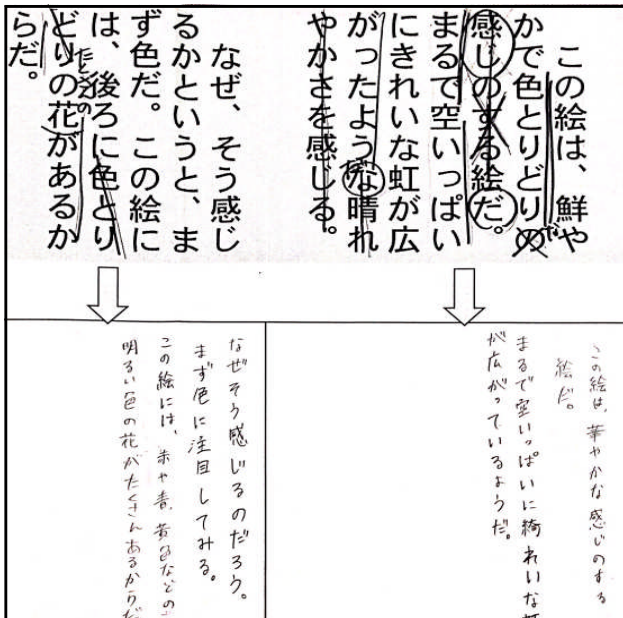


図9 教材文批正のワークシート

教材文は、前時に生徒が書いた文章の中から記述に問題のあるもの数点を組み合わせて作成した。生徒はグループで話し合いを通して文章を批正した。批正の目的は、文章の構成が正しいか見直すことであり、話し合いの視点は、「段落ごとの条件に沿った文章になっているか」「印象の根拠として適切な観点を挙げているか」とした。

表10は教材文と生徒が批正した後の文章である。話し合いの視点以外にも「一文を短くする」「繰り返し使われていた語句の言い換えをする」「より具体的な言葉を使用する」などの書き換えを行っている。

表10 グループで批正した教材文

(教材文)	(生徒の批正後)
<p>この絵は、鮮やかで色とりどりの感じのする絵だ。まるで空いっぱい綺麗な虹が広がったかのような晴れやかさを感じる。</p> <p>なぜそう感じるのかというと、まず色だ。この絵には、後ろに色とりどりの花があるからだ。</p> <p>次は、音だ。沖縄ということからカチャーシーの音が感じる。</p>	<p>この絵は華やかな感じのする絵だ。まるで空いっぱい綺麗な虹が広がっているようだ。</p> <p>なぜそう感じるのだろうか。まず色に注目してみる。この絵には、赤や青、黄色などの明るい色の花がたくさんあるからだ。</p> <p>次に音に注目する。この絵は沖縄の伝統工芸である紅型を使っていて、沖縄らしさを感じさせる。そこから、民謡に乗せてカチャーシーを踊っている人たちの姿が想像される。</p>

生徒意識調査(図10)を見ると、「自分の文章を読み返して修正できますか」の質問に対し、「できる」「どちらかといえばできる」という肯定的な回答がともに増加している。また、「普段、書いた文章を読み返して修正していますか」という質問では「書いた文章を読み返して修正している」という肯定的回答が微増している。

授業後の生徒感想(表11)には、「批正方法をグループで話し合う場がおもしろい」という感想や、「批正の方法がわかり、自己の文章を読み返すことができた」という達成感、「これからは読み返そう」という意欲もみられた。

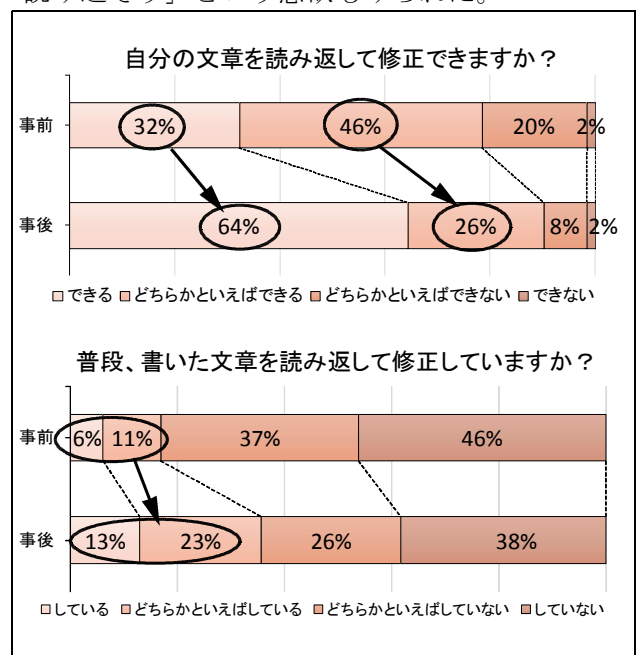


図10 「修正」に関する生徒意識調査

表11 第5時授業後の生徒感想

- ・自分の文章を振り返って読んで、間違いのあるところを見つけ自分なりにいい文を書くことができた。
- ・自分の文章を読み返して書くことが少し難しかったけど、自分じゃなく他の人の文を読み返すと思えばできた。
- ・グループで相談して文章を批正するのがおもしろかった。批正の方法がわかった。
- ・今までは自分の文章を読み返して修正したことがなかったけれど、読み返すと直すところが見つかって、これからは読み返して修正しようと思った。

### ③ 考察

グループで批正した教材文を見ると、生徒の文章批正能力は充分備わっており、鑑賞文の構成を意識した批正ができていることがわかる。また授業後の感想（表11）や意識調査（図10）からは、教材文を活用して批正方法をグループで話し合うことの有効性が見て取れた。

このことから、教材文を批正する活動は、文章構成を意識した作文をさせることにつながったといえる。

また、グループの批正後は自己の文章を読み返し、黙々と書き進める姿が多く見られたことから教材文には批正方法の理解を促すだけでなく、書き方のモデルとしての効果もあったことがわかる。

## 2 作業仮説(2)の検証

書き上げた鑑賞文をチェックシートをもとに生徒相互で読み合うことで、文章の修正や推敲ができるであろう。

### (1) チェックシートについて

#### ① 手立て

チェックシート（表8）を活用してチェックの視点をもとにペアで読み合って改善点を アドバイスし合い、最終的な推敲をさせた。

#### ② 結果

チェックの視点を確認後、ペアで鑑賞文を交換し読み合いをした。生徒は文章とチェックシートと照らし合わせながら読み進め、項目一つ一つを丁寧にチェックしていた。コメント欄は、はじめ、なか、ま

め、むすびの4つの部分に分け、それぞれの部分で良い点や改善のアドバイスを記入させた。



図11 チェックシートを活用して読み合う



図12 読み合い後にアドバイスを交換

チェックシートのコメント欄に書かれた生徒の記述（表12）を見ると、チェックの視点にしたがい、良い点や改善が必要な点について具体的な言葉で評価やアドバイスが書かれている。改善例を考え記述しているものもあった。チェック後はそれぞれのアドバイスを基に文章をどう書き直すかペアで話し合う姿も見られた。

表12 生徒のチェックシートの記述

#### 【はじめ】部分

- ・自分が絵を見て感じた「力強い」という思いが書かれていてとてもいいと思う。
- ・赤い幹の部分が血のように見えるという比喻表現はとてもいい。
- ・ここで「なぜなら…」と理由を述べるのではなく、ここでは自分の思ったことだけを書いた方がいい。

#### 【なか】部分

- ・構成、色彩について細かく書かれていて絵を見ていない人でも想像できそうでとてもいい。
- ・二段落は、最初は構成の話なのに、途中で色彩のこ

とを言っている。

- 最後の「暗くて寒そう～」のところはもう少し言葉を足して説明がほしい。

### 【まとめ】部分

- ちゃんと一段落の内容と共通していて読んでいて納得できた。
- 根拠で述べた二つの共通点を見つけ、何に似ているかが書かれていた。
- 色についても触れたほうが説得力があると思う。

### 【むずび】部分

- 沖縄について触れていない。ひいおばあちゃんは沖縄出身？沖縄に住んでいる？などにつなげたらどうか。
- 自分との関わりがとてもおもしろかった。
- 最後がちゃんと沖縄の良さにつながっていた。すごくいい文章だと思う。
- 「よみがえらせる」を「まだ立ち上がれる」に書き換えたらどうでしょう。

生徒の意識調査結果（図13）では、「友達の文章のよい所に気づくこと」について、肯定的回答の総数は微増だが、「できる」の回答が大幅に増えている。「友達の文章に対して改善点を指摘して修正すること」では、「できる」の回答が大きく増加している。

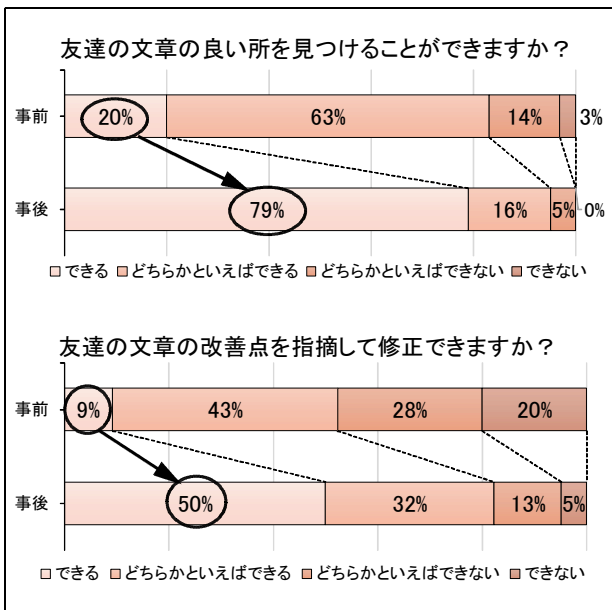


図13 「修正やアドバイス」に関する生徒意識調査

生徒Aを例に、読み合い前後の文章（表13）を比較する。読み合い後に主語が不明確であることと、作品の特徴の説明不足を指摘されている。その後ペアのアドバイスを受けて、語数や文量が増加し、文章がより丁寧で詳しい説明に書き換えられている。

表13 生徒A 読み合い前後の文章の比較

**【読み合い前の文章】**

この絵は力強くて少し悲しそうな感じのする絵だ。まるで、何かに対して怒りを感じているようだ。なぜそう感じるのだろう。まず、絵の中心にあるおばあちゃんの表情だ。（略）

↓

ペアで読み合い

**【ペアから受け取ったコメント】**

【はじめ】 怒りを感じているのが誰かがはっきりしない。どんな絵か説明したらもっといい。

【なか】 どんな表情なのか書くといい。

↓

**【読み合い後に修正した文章】**

この絵は、中心に沖縄のおばあちゃんが描かれていて、暗く、力強くて、少し悲しそうな感じのする絵だ。おばあちゃんはまるで何かに対する強い怒りを表しているようだ。なぜそう感じるのかというと、まず絵の中心にあるおばあちゃんの表情だ。おばあちゃんが中心に描かれているが、おばあちゃんは真正面を見ているのではなく、視線を下に向けている。そこが少し悲しさを生んでいるようにみえる。（略）

また、授業後の生徒感想（表14）ではペアにチェックしてもらうことで改善点に気づかされ、自分の文章が良くなったという意見があった。

表14 第6時授業後の生徒感想

- 隣の人にアドバイスをもらって文章が前より良くなったと思う。
- 読み合いをしてお互いの文章の見直しができた。
- 鑑賞文の直すところを見つけてもらえて良かったです。直して清書まで進むことができた。
- チェックシートを使ってペアでアドバイスを言い合うことができた。

### ③ 考察

チェックシートの記述内容（表12）を見ると生徒はアドバイスの視点を明確にして友達の文章を読んでいることがわかる。これまでの類似した実践では、アドバイスが単なる感想の交換になってしまうことが多かった。チェックの視

点を細かく記載したことが、的確なアドバイスを生徒間で行うことにつながった。

生徒意識調査（図13）からは、「友達の文章の良い点を認め、改善点に気づきアドバイスができた」という結果が表れた。これまで他へのアドバイスに消極的であった生徒も、ペアの文章に指摘やアドバイスができたことで達成感を感じている。

これらのことから、チェックシートを基に生徒間で読み合いを行うことは、文章の修正や推敲に効果があることがわかる。

また、チェックシートが話し合いのきっかけになっているペアも見られた。普段、会話を交わすことのない間柄であってもチェックシートを介することで、関係に変化が見られた。座席による生徒の人間関係に左右されず話し合いを成立させるツールとしての可能性も感じられた。

### 3 本研究を通して

#### (1) 鑑賞文の論理性について

鑑賞文とは「自分が感じ取った作品のよさや魅力をどのように良いのか根拠を明らかにして伝える文章」である。また、論理的な文章とは「短く明快な文章であり、構成の原則を持つ文章」であり、自分の考えを明確にわかりやすく伝えるために根拠を取り入れ、言葉のつながりを意識して相手を納得させる筋道をもたせなければならない。

そこで、ここでは論理的な鑑賞文の条件を以下（表15）の3点として、生徒の鑑賞文の論理性を考察した。

表15 論理的な鑑賞文の条件と達成率

①	作品の良さや魅力を鑑賞の観点から根拠にして述べている。	98%
②	論理の展開に必要な言葉（接続詞）のつながりを意識して使用している。	29%
③	文章が論理的構造を持ち、相手を納得させる筋道が整っている。	55%

項目①に関しては、ほぼすべての鑑賞文において達成された。項目②の接続詞のつながりを意識した記述がされたものは全体の29%にとどまった。生徒作品は接続詞の数が少な

く論の展開に必要な接続詞が欠如しているものが見られた。それでも項目③55%の鑑賞文は基本的には論理的構造を持ち、相手を納得させる筋道が整っていると判断できた。

このことから接続詞が少なく、記述や表現の未熟さがあっても一定の型を持つことで意見や考えを伝える文章になることがわかる。論理的文章を書くための基本的な論理構成の型の重要性が確認できる。

#### (2) 鑑賞文の内容について

今回、鑑賞文の構成の型とともに段落ごとの課題条件を提示した。生徒の鑑賞文の内容（表16）から課題条件の達成率をみる。項目①98%は鑑賞の観点を根拠に自分の意見を述べる文章となっており、項目②根拠の妥当性が認められるものは88%であった。この二点においては成果を高く評価できる。

しかし、「項目③根拠二つの共通点をまとめる」、「項目④自分との関わりを入れる」、「項目⑤沖縄との関連を持たせる」の三点に課題が残った。項目⑥鑑賞文として作品の良さ（魅力）を伝える文章であったと判断されたものは54%である。作品と自分や沖縄を関連させたいという教師側の思いが課題を複雑化させてしまった感がある。

表16 授業後の鑑賞文の内容分析

	分析の視点	達成率
①	印象とその根拠を区別している	98%
②	印象の理由付けとして適切な鑑賞の観点を根拠にしている（妥当性がある）	88%
③	二つの根拠の共通点をまとめている	66%
④	自分との関わりを入れている	58%
⑤	沖縄の話題に触れている	62%
⑥	作品の良さ（魅力）を伝えている	54%

生徒Bの文章の比較（表17, 18）を行った。他教科（美術科）の課題として出された鑑賞ワークシート、事前アンケート時の鑑賞文、本検証で書いた鑑賞文の3点である。接続助詞を多用して一文が長い傾向にあった文章が短く変化している。段落の設定や、接続詞を



使用して根拠を観点ごとに列挙したことで、読みやすく分かりやすい文章となっている。

表17 生徒B文章の比較

	他教科(美術)の課題	事前アンケート時の鑑賞文	本時で書いた鑑賞文
意見と根拠の区別	区別されている	区別されている	区別されている
根拠の記述の仕方	一つの内容を二通りで記述(意見に続けて一文で記述, 理由は, と記述)	意見に続けて複数の根拠を二文で記述	意見とは別に接続詞を使って観点別ごと(一つの観点につき2~4)に列挙
言葉の接続	接続詞を使用していない	接続助詞でつないでいる	接続詞の使用
根拠数	1	4	6
段落の数	1	1	5
字数/文	28.7	45.0	26.3

表18 生徒B文章(記述)の変化

【美術科の課題 鑑賞ワークシート】  
 山下清さんは、幼少期に貼り絵をたくさんやっていた事がわかった。貼り絵は細かい所まででいねいにやってすごいと思った。私は「友達」という絵が気に入った。山下さんの絵を見て思ったことは、とても細かい「点」を使って影を表現したりしていとてもすごかった。私は、エッフェル塔の作品が気に入った。理由は、とても細かい所まで本当にこだわって書いているととても感じたからだ。山下清さんの作品をもっと見てみたいと思った。



【事前アンケートでの鑑賞文】  
 貼り絵でこんなに細かい所までできていすごいと思うし、飛行機が普通の絵で描いたと思うくらいいすごかったです。木や畑なども、とてもでいねいで、人の表情もわかったのですごいと思いました。



【本時の鑑賞文】  
 「生命の力」  
 この絵は、暗くて寂しい感じがする。だが、どこか元気をもらえる絵だ。  
 なぜそう感じさせるのだろう。まず、絵の構成だ。ボロボロになった石のすき間に一匹だけヤドカリがいる。そして、奥の方には太陽が昇ってきているような光が描かれている。一匹のヤドカリからは寂しさ、昇

ってくる太陽からは元気をを感じる。  
 次に色彩に注目する。この絵は全体的に黒や灰色が多く使われている。草も緑ではなく、焦げて灰色になったかのようにとても悲しい感じがする。だが、その中に一匹の赤いヤドカリがぼつんとして、生命の力を感じさせる。また、奥の方から昇ってくる光はとても明るく見える。  
 この絵は、周りの草や石などが暗いことからヤドカリの赤や朝日の光が強調され、元気をもらえる感じがするのだろう。  
 私はこの絵はきっと戦後の沖縄を表した絵だと思う。沖縄で昔起こった戦争では、この絵に描かれているようにたくさんの物や人の命が奪われてしまった。だが、今私たちが生きているのは、この時代を生き抜き、命をつなげてくれたご先祖様のおかげだ。だから、今の沖縄には「命どう宝」ということを大切にする心がある。

授業後の生徒の感想(表19)には、伝える難しさと書けた達成感、書き方がわかれば書けるという自信が表れている。

表19 最終時授業後の生徒感想

- ・見て感じたこと、思ったことを分かりやすく伝えるのは難しかった。でも書き方がわかった気がする。
- ・時間をかけて一つの文章を書くことでけっこういい文章がかけた気がする。次に書く機会があれば、今回のポイントをおさえて書くようにします。
- ・書けたことが嬉しかった。型とか構成とかどうやって書くのかがわかったら書けることもわかった。
- ・だいたいどんなことを書けばいいのかがわかったから、今後は大丈夫だと思う。

(3) 美術館での鑑賞体験について

今回は沖縄県立美術館の事業「美術館へ行こう2014」と授業の関連を図った。事業に参加することで鑑賞文を書く前段階として鑑賞指導のための三段階を設定できた。実際の鑑賞は県立美術館で鑑賞ボランティアとの対話を通した鑑賞体験を行った。対話によって生徒は論理的思考をもって絵を鑑賞できた。生徒の感想(表20)からもその効果がうかがえる。

表20 美術館鑑賞後の生徒の感想

- ・絵をじっくり見ることができていい体験だった。
- ・学芸員さんのお陰で、どうやったらどんな風に見えてくるのかがわかった。
- ・美術館で学芸員さんと話していて、「感じる」とはどういうことかわかった気がする。

#### (4) 交流について

今回、修正目的の意見交流を指導過程に2回位置づけた(表21)。文章を完成させる途中で自分以外の人の目が入ることで文章はより洗練された。また、文章を読み合い他の人の意見に触れることで、違いを知る楽しさや人に伝える喜びを感じたことが生徒の感想(表22)からわかる。

表21 意見交流の過程

1. 個人の思考	各自が意見と根拠を整理して書き出す。
2. グループの交流・思考	グループで教材文の修正方法を話し合い修正する。
3. 個人の思考	修正方法に照らし合わせ自己の文章を読み返す。
4. ペアの交流・思考	チェックシートを活用し読み合い、アドバイスし合う。
5. 個人の思考	自己の文章を最終推敲する。
6. グループの交流	完成した鑑賞文を読み合い、多様なものの見方に触れる。

表22 授業後の生徒感想

<ul style="list-style-type: none"><li>・友達の文章のよい所を見つけて、自分が感じるだけでなく、<u>友達の感じ方を聞いて、絵の感じ方を膨らませることができた。楽しかった。</u></li><li>・みんなの鑑賞文を読んで、<u>例えばおもしろかったり、感じ方が様々で人によって見方や考え方がまったく違うことがわかりすごいと思った。</u></li><li>・読み合いをして、相手の良いところも見つけることができたし、<u>みんなの感じ方が聞けて話が弾んで楽しかった。</u></li></ul>
--

## IX 研究の成果と課題

### 1 成果

#### (1) 付箋紙とマッピングの活用の有効性

意見と事実を分ける手立てとして用いたことで意見と事実の混同が無くなった。また鑑賞文作成のための材料整理としての役割も果たし、作文がスムーズに進んだ。

#### (2) チェックシートの有効性

チェックの視点を細かく設定したことで生徒相互で修正目的の読み合いが成立した。生徒はアドバイスを基に推敲したことで、文章がより論理的になった。

#### (3) 体験と知識による深まり

美術館鑑賞で本物の作品に触れ、専門的知識を持つ鑑賞ボランティアとの対話を通じた鑑賞活動を取り入れたことで、論理的思考をもって作品を鑑賞することができた。その結果、ほとんどの生徒が作品に対する思いを表現できた。

## 2 課題

#### (1) 構成の型と課題条件の弊害

型の提示により、生徒作品は一定の論理性を持ったが、書き上げた生徒の文章の論の展開が似通ったものになった。今後は、生徒が論の展開の多様性を学び、論の型を各自で選択し作文する指導の工夫を考えたい。

また、課題条件の細かさが記述に混乱を生じさせた。条件をシンプルに設定する必要もある。

#### (2) 接続詞指導の弱さ

言葉や文章、段落のつながりを考えて接続詞を使って文を組み立てていく指導が必要である。

#### (3) 表現や修辞についての学習

構成や型に重点を置いたため、表現や修辞についての指導が至らなかった。教科の特性として表現を深める指導にも挑戦したい。

おわりに

書くことに対する生徒の困り感と、そのような生徒に十分に伝えられていない自らの実践の不充足さを常日頃から感じ、今回の研究のテーマとしました。相手に伝わるようにわかりやすく書くことは大人であっても難しいことです。しかし、社会で生きていく上で欠かせない言語能力の一つであり、社会からの要請は今後益々大きくなることが予想されます。

言語能力は短期間の指導で身につくものではなく、本研究における成果は真の成果とは呼べないのかもしれませんが。しかし今回、授業後の生徒の声「書き方がわかったことが嬉しい」「今後は大

丈夫だ（書ける）と思う」が私にとって大きな成果だと感じています。国語科の授業が言語技術の習得の場として大きな意味を持ち、生徒一人一人に力をつけるものであるべく、今後も日々の実践にあたりたいと思います。

また、今回の研究において鑑賞文の題材となる美術作品として本物の郷土の作品に触れたことも大きな成果でした。沖縄県立美術館の収蔵する美術作品は、私たちの住む沖縄の歴史であり、財産といえます。それらの作品に触れ、学習の題材とすることで生徒の鑑賞文は郷土沖縄や、沖縄の歴史、自分や家族の生き方に触れた深みのある文章となりました。「美術館へ行こう2014」に招待していただき、鑑賞の場を与えてくださった沖縄県立美術館館長の安里進様、多大なご協力をくださ

いました学芸員の仲村保様、鑑賞ボランティアとして参加して下さったすべての方々へ感謝の気持ちでいっぱいです。

また、研修期間中、ご指導いただきました仲西起實所長、山里崇係長、日高聡指導主事をはじめとする研究所の職員の皆様、検討会や報告会等でご指導ご助言をいただきました浦添市教育委員会の先生方へ深く感謝申し上げます。

最後に、思う存分研究に打ち込める環境を与えてくださった仲西中学校の渡口政春校長、本研究の指導助言者として、最後まで細やかな指導をくださいました金城孝子教頭、協力して下さった仲西中学校職員の皆様、そして半年間研究をともに励んだ研究員のお二人の先生方に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

#### 【主な参考・引用文献】

- |                                      |                     |        |       |
|--------------------------------------|---------------------|--------|-------|
| ・授業づくりの教科書：国語科授業の教科書                 | 野口芳宏                | さくら社   | 2013年 |
| ・「なぜ」とひたすら尋ねる論理力こそ一批評でも批判でもなく、問うこと一  | 難波広孝                |        |       |
| 言語技術教育第20号「この言語技術」で思考力・表現力が高まる       | 日本言語技術教育学会編         | 明治図書   | 2011年 |
| ・中学校国語科新授業モデル書くこと編                   | 河野庸介他               | 明治図書   | 2011年 |
| ・論理的思考力・表現力を「構成」の指導で育てる              | 中村孝一                |        |       |
| 言語技術教育第20号「この言語技術」で思考力・表現力が高まる       | 日本言語技術教育学会編         | 明治図書   | 2011年 |
| ・市毛勝雄著作集第5巻：作文の授業改革論                 | 市毛勝雄                | 明治図書   | 1998年 |
| ・21世紀型授業づくり47：国語力を育てる言語技術教育入門        | 市毛勝雄                | 明治図書   | 2002年 |
| ・単元構想表でつくる中学校新国語授業 START BOOK 第1学年   | 富山哲也他               | 明治図書   | 2011年 |
| ・平成24年度、版観点別学習別学習状況の評価規準と判定基準〔中学校国語〕 | 金子守編                | 図書文化社  | 2011年 |
| ・国語科作文教育                             | 興水実                 | 明治図書   | 1975年 |
| ・「評価→指導」のサイクルを指導過程にできるだけ多く組み込もう      | 萩中奈緒美               |        |       |
| 評価と指導 第60巻1月号                        | 日本図書文化協会            |        | 2014年 |
| ・「書くこと」における言語力育成の考え方                 | 佐渡島紗織               |        |       |
| 「言語力」を育てる授業づくり・中学校                   | 梶田叡一編               | 図書文化社  | 2009年 |
| ・中学校学習指導要領解説国語編                      | 文部科学省               | 東洋館出版社 | 2008年 |
| ・評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料、中学校国語    | 国立教育政策研究所教育課程研究センター | 教育出版   | 2011年 |

## 平成26年度 浦添市立教育研究所職員名簿

所 属 ・ 職 名	氏 名
所 長 研 究 係 長 指 導 主 事 情報担当主任主事 主 事 司 書	仲 西 起 實 山 里 崇 日 高 聡 與那城 太一 名 城 めぐみ 知 花 史 代
IT 指 導 員	比 嘉 恵 理 與 儀 恵 吉 國 吉 伸 明
○ 適 応 指 導 教 室 「 い ま あ じ 」 指 導 担 当 者 適 応 指 導 員 適 応 指 導 員	小 脇 雅 代 西 村 佳 代 子 田 端 宏 太 郎

研 究 報 告 集 録 (第43号)

平 成 27 年 3 月 発 行

発行人	仲 西 起 實
発行所	浦 添 市 立 教 育 研 究 所
所在地	〒901-2103 沖 縄 県 浦 添 市 仲 間 2 丁 目 47 番 3 号
	電 話 (098)876-7522
	FAX (098)876-7222
	URL <a href="http://www.urasoe.ed.jp/uraken/">http://www.urasoe.ed.jp/uraken/</a>
	ウラケンゼロ
	E-mail <a href="mailto:uraken0@urasoe.ed.jp">uraken0@urasoe.ed.jp</a>